

ぽよぽよちゃんは栄え  
たい

彼岸花ノ丘

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

此処は人間、魔物、亜人……様々な種族が暮らし、諍いの絶えない世界・アスラガルド。

その世界の辺境に浮かぶ小さな島に、ぽよぽよとした生き物『スライムさん』が暮らしていました。ある日、『スライムさん』のひとりである『ぽよぽよちゃん』は海に落ちてしまいます。無事大陸まで流れ着いたぽよぽよちゃんでしたが、その住人にとってぽよぽよちゃんは外来種な訳で……

侵略的外来生物スライムさんによる、ほのほのあぼかりぶすものです。

『小説家になろう』『カクヨム』にも投稿しています。

月・水・金曜日の週三回、12時頃更新予定。

# 目次

ほー！ー！ー！	111
ほおおお……	102
ほーっほーっほーっ	92
ほおほおほお！	85
ほおおっ	78
ほおっ	68
ほおほお！	54
ほっほーっ	45
ほお？	30
ほおっ	19
ほおほお	11
ほー	2

ほよほよ	190
ほよほっほー	184
ほっほっほっ	177
ほほー	170
ほよよ	162
よ	151
ほ	141
ほよーん	131
ほよん	123



## ぽよー

魔法に満ちた世界・アスラガルド。人間、亜人、魔物……数多の種族が暮らすこの世界は、常に争乱に満ちていました。

争乱の理由は様々です。価値観の違い、利害の違い、信仰の違い。共通しているのは、誰もがあらゆる違いを拒み、誰かが誰かを憎んでいる事でしょう。

土は血で、空気は戦火で、水は涙で、日々穢れています。ですが争乱は治まるどころか、刻々と世界中に広がり、激しさを増していました。

誰もが思っていました。このままでは世界が燃え尽きてしまうかと。

誰もが思いました。だから敵を早く倒さねばならないと。

悲劇と憎悪は、止まる気配すらありません。

——そんな世界規模の諍いすら届かない大海原のど真ん中に、その島はありました。

島は地面の殆どがゴツゴツとした岩で覆われていて、土は少ししかありません。草どころか苔すら生えておらず、不毛な大地でした。加えて島自体がとても小さく、一周千二百マグクリット——長さの単位です。一マグクリット＝百クリットとなっており、

大人の人間が大体百五十〜百七十クリットの大きさです。――ほどこありません。

しかし寂しい場所かと言えばそうでもなく、草花の代わりにぼよんぼよんとしたものが何千と動いていました。

ぼよんぼよんとしたものは、みんな大体同じ姿形をしています。大きさもどれも三十クリットぐらいです。全てが深海を彷彿とする濃い青色をしており、下半身は貝の中身のような軟体生物の様相をしていました。対して上半身は太いですが手を持ち、のつべりしていますが顔を持ち、塊ですが髪の毛のようなものを携えています。例えるなら子供向けの人形のような姿です。その顔立ちは、どちらかといえば女の子っぽく見えるでしょう。

果たして彼女達は何者なのか？

答えを言ってしまうと、実はスライムなのです。とはいえ一般的なスライムはぺちやぺちやとしたゲル状で、彼女達のようなハッキリとした姿は取れません。

では何故彼女達はこんな姿をしているのかと言うと、この島で独自の進化を遂げた結果でした。

彼女達の祖先はずっとずっとの大昔に、この島へと流れ着きました。スライムはとても弱い魔物ですが、この小さな孤島には彼女達を虐める怖い魔物はいません。そのため彼女達は大いに繁栄し、邪魔される事なく進化し、独自の姿を持つに至ったのです。普

通のスライムではないので、ここではスライムさんと呼ぶとしましょう。

この物語の主人公ぽよぽよちゃんは、そんなスライムさん達のひとりでした。

ぽよぽよちゃんは迫り出した岩の上で海を眺めています。今日の天気は、雨雲いっぱい。海は荒れ気味で、波も高いです。時折激しく打ちつける波がぽよぽよちゃんに掛かっていますが、それでもぽよぽよちゃんは岩の上から動きません。

「ぽよぽよ〜」

そしてぽよぽよちゃんは、「ごはんはまだかなあ」的な意味合いの声を独りごちました。

スライムさんだらけのこの島ですが、石と砂ばかりで、スライムさんのごはんとなるものはありません。大昔はそれなりに食べ物があったのですが、際限なく増えたスライムさんのご先祖様がみんな食べ尽くしてしまいました。なので今では時折海から流れ着く海藻や生き物の死骸が彼女達のごはん。ぽよぽよちゃんが海を眺めているのは、そのうちごはんがやってこないかなと期待しているからです。

ちなみにぽよぽよちゃんの後ろには、数え切れないほどのスライムさんが並んでいます。ぽよぽよちゃんと同じく、食べ物流れ着いてこないか、じっと待っているのです。先頭に立つぽよぽよちゃん、ちよつと踏ん張らないと押されて海に落ちちゃうかも。



のんびりと、流れ着くゴミを待ち続けるぼよちゃん達。彼女達は大体毎日、朝から晩まで、こうして食べ物を待ち続けます。たまには遊んだり、お喋りしたりもしますが、基本的には食べ物を待ち続ける日々です。

勿論、食べ物が少ないので食いつぶされる訳にはいかない、という切実な理由もあります。ですが食べ物なんて殆どないこの島で進化したスライムさん達は、絶食にとても強いのです。一年か二年何も食べなくても、元気でいられます。更に言うと、ほんの数日前にたくさんのお肉と木が島に流れ着き、島のスライムさん達はみんなお腹いっぱいになっています。このまま二年間、食べ物が流れ着かずともスライムさん達は元気でしよう。

それでも食べ物を求めるのは、誰もが『自分』を増やしたいと思っっているからです。スライムは分裂によって繁殖します。スライムから進化したスライムさんも、この繁殖方法に変化はありません。分裂すると体重は半分に減ります。言い換えると、体重が誕生時と比べ二倍になった時、スライムさんは分裂出来るのです。

そしてスライムさん達はみんな、もっと自分を増やしたい、と思っっていました。あまり自分を増やしたがいらない個体より、自分を増やしたい個体の方が適応的です。厳しい環境に適応する中で、より強い想いが生き残った結果でした。

今日も彼女は繁殖のため、海からやってくる食べ物をのんびりと待ちまして――

「……ぼよ……」

待っていた甲斐もあつて、ついに見付けました。

ぷかぷかと浮かぶものが、島の方へとたくさん流れてきます。昨日流れ着いたのと同じ種類のお肉と、たくさんの木でした。

普段は海草が一日数本、魚が一週間に一匹流れ着けば良い方。なのに今回流れ着いたのは、山ほどの食べ物です。島から溢れそうなほどたくさんいるスライムさんが、またしても全員お腹いっぱいになるでしょう。

「ぼよぼよ……」

ぼよぼよちゃんのテンションは最高潮。すぐにも浜辺に行こうとその身を反転

「ぼよ……」

「ぼよぼよ……」

「ぼよぼよ……」

したものの、後ろに居た仲間達が迫ってきました。

みんな繁殖したいのです。ごはんがあると聞いて黙ってはいられません。ごはんの姿を見ようと、岩の切っ先にどつと押し寄せます。

ぼよぼよちゃんは仲間達に押されて後退。

「ぼ、ぼ、ぼよ〜?」

当然岩の切っ先の向こう側に下がる足場などありませんので——どーんつと、ぼよぼよちゃんは突き飛ばされました。ついでに、じゆうなんにんかの仲間達も一緒に突き飛ばされます。

そのままぼよぼよちゃん達は、海に落ちてしまいました。

これは大変です。一般的なスライムは、水中での活動にさして支障はありません。大抵のスライムは表面がぬるぬるとした粘液で覆われています。これは雑菌などを防ぐのと同時に、外界から酸素を取り込むための媒体としても機能するのです。この粘液のお陰で多くのスライムは大気中のみならず、水中でも酸素を体内に取り込みます。大気中より効率は落ちるため永住こそ出来ませんが、真水の中であれば一週間程度は生存可能と言われています。

しかしぼよぼよちゃん達スライムさんは、この粘液を持ちません。彼女達が暮らすこの島には川も湖もなく、周りにあるのは飲み水に適さない海水だけ。利用出来る水分は食べ物に含まれるものと、たまに降る雨水のみ。つまりこの島は、常に真水が不足しているのです。粘液などで無駄に排出しては生き残れません。そのため彼女達は、粘液の分泌機能を退化させてしまったのです。水分が蒸発しないよう皮膜も分厚くなり、最早粘液があっても酸素は取り込めないでしょう。現在、呼吸は大気を直接体内に飲み

込み、体組織と直に触れさせる事で行っています。当然海中では飲み込む大気がないので、息が出来ません。

ぽよぽよちゃん達の身体は、今や水中生活を想定していません。おまけに今日の海は荒れ模様。このままでは沖に流され、数分で溺れ死んでしまいます。

「ぽよぽよ〜」

「ぽよー」

「ぽよ?」

「ぽよ〜」

ところが陸地の仲間達は誰も助けてくれません。スライムさんは仲間同士の仲は悪くありませんし、出来る手助けはしてくれませんが、出来ない時はあっさり見捨てます。仲間が死んでも「ぽよ〜(そっかー)」と思うだけ。身体はぷるぷるほわほわ系なのに、心はハードでクールなのです。

ぽよぽよちゃんも助けてもらえないとは思いません。ぱちやぱちやと手をばたつかせ、どうにかこうにか近くを漂っていた木の板に辿り着きます。一緒に落ちた仲間達も、なんにんかは木の板に掴まれたようです。

「ぽよ。ぽよー」

「ぽよぽよぽよ。ぽよー」

「ぼよー」

尤も、泳げないぼよぼよちゃん達は島に戻る方法が分かりません。それどころか海流に乗り、沖へと流されてしまっています。どんどん島が遠くなり、仲間達も離れ離れに。

やがて、ぼよぼよちゃんの周りに仲間の姿はなくなり、島も見えなくなりました。

「……ぼよぼよ〜」

しかしぼよぼよちゃんは気にしません。元氣いっぱいなぼよぼよちゃんにとつて今の島は窮屈で、ちよつと暮らしにくいなと思っていました。なら、このまま何処かに行くのも悪くないと感じたのです。何処に何があるかは、さっぱり分かりませんが。

ぼよぼよちゃんは板に捕まり、なーんにも考えずに流され続けます。

こうして始まった、ぼよぼよちゃんの大冒険。

ぼよぼよちゃんには忘れていきます。自分達の島には、元々スライムさんがひやくにんぐらしいしか居なかつた事を。

ぼよぼよちゃんには知りようもありません。一週間前、遠洋で魔物と人間の戦いが起き、幾つもの船や魔物が沈み、その一部がぼよぼよちゃんの暮らしていた島に流れてきたなんて。

そうして本来ひやくにんしか居なかつたスライムさんがなんぜんにんにもなつて、ぼ

よよちゃんやんは押し出されました。舟が沈まなければ、人間と魔物の争いがなければ、よよちゃん達は今日も島でのんびり暮らしていたでしょう。

これは、小さな歪み。

歪みは次の歪みを生み、少しずつ、『世界』にヒビを入れていきます。この世界がこれからどうなるか、よよちゃんには分かりません。分かるほど、よよちゃんは賢くないのです。

ただ一つ言える事は、

よよちゃんやんの旅路が、更なる歪みを生む事だけです。

ぼぼよ～

一匹の普通のスライムが、砂浜を歩いていました。

体長は二十クリット程度。ねとねとした粘液を纏い、半透明な青色をした、水玉のような形の身体が砂の上を滑るように移動します。ごくごく一般的なスライムの体長・体色・体型です。

彼（スライムは分裂して増えるため、性別はありませんが）は文字通り砂を食んでいました。スライムは極めて薄い膜で身体を覆っており、その膜で砂や土などを包み込みます。すると粘液の作用により皮膜同士がくっつき、袋状となります。この袋はやがて酵素の作用により分離し、体組織内へと移動。液性で見紛うほど結合が緩い細胞達か、砂や土の粒子に付いた有機物を舐め取ります。

これが一般的なスライムの食事でした。魔物の中でも力が弱いスライムには、獲物を捕らえる事すら出来ません。故にこうした、貧しい食に甘んじているのです。

「……………」

さて、そんな食事をしていたところ、彼は海に漂うものを見付けました。

それは板に捕まった、小さな生き物でした。セイレーンとか魚人かな、だったら怖い

なあ……そう思いながらまじまじと観察すると、どちらでもない事に気付きます。

いえ、それどころか、なんだか仲間スライムっぽいような？

「……」

仲間が海に流されていると思い、彼は慌てました。

確かにスライムは、水中での長期生存が可能な生き物です。ですが海水となると話が違います。皮膜がとても薄いため、海水に長く浸かると浸透圧により身体の水分が抜け出てしまうのです。一日だけなら粘液の作用でなんとかありますが、二日目になるとかなり危うく、三日は絶対に持ちません。

目の前の仲間がどれだけの間海を漂っているかは分かりませんが、悠長にしている場合ではないでしょう。

そして彼は、魔物の中ではかなり仲間意識が強いとされているスライムの中でも、とびきりのお人好しでした。

彼は迷わず海に飛び込み、仲間の下へと駆け寄りまして――

「……」

助けられたスライムさんこと、ぽよぽよちゃんは能天気な声を漏らしました。

仲間と思って助けたら、変な姿をした仲間だったので、スライムはちよつと困惑します。ですが海を漂っていたのは事実。助けた事を後悔なんてしていません。





さて、ぼよぼよちゃんですが……実は十六日間も海を漂っていました。

通常のスライムならば、とうに脱水で死んでいる期間です。では何故ぼよぼよちゃんが生き長らえたかというと、その答えは彼女達スライムさんが持つ分厚い皮膜にありました。

元々水分の蒸発を防ぐために進化させた皮膜でしたが、これが浸透圧に対する抵抗性も發揮したのです。分厚い皮膜は水中生活への適応を失わせましたが、漂流生活には有利に働きました。世の中何が幸いするか、分からないものですね。

そんなぼよぼよちゃんのスーパースペックなど知らないスライムは、「ひよつとして脱水による後遺症で知性が……」なんて失礼な事を考えていました。脆弱な魔物である分、スライムは知性がそこそこ発達していたりします。

ともあれ仲間を助ける事が出来、スライムは安堵しました。

安堵出来たのは、その短い間だけでした。

さく、さくと、砂の上を歩く音がします。

スライムは反射的に、音がした方へと振り向きました。彼が見た先には、ぼよぼよちゃん達に近付いてくる一匹の獣——野犬の姿があります。所謂大型犬ではありませんが、スライムやぼよぼよちゃんよりも大きな犬でした。所謂大型犬ではありません。

これは大変です。スライムの貧弱さは魔物の中でもとびきりで、まともに戦えば犬に

も負けず。逃げなければ簡単に捕まり、オモチヤになる前に中身を撒き散らす事となるでしょう。

「ぷるるー！　ぷるるー！」

早く逃げよう！　スライムはそう訴えます。

「ぼよぼよー」

ですがぼよぼよちゃん、逃げたり呆けたりするどころか——足下に落ちていた海藻の欠片を、人形のような頭にある口——正確には総出入口と呼び、呼吸や排泄もこの穴から行います——に詰め込んでもしかたもせずと食べていました。

ぼよぼよちゃん達スライムさんが暮らす島には、天敵がいまません。そのため彼女達は、危機感というものを退化させてしまったのです。例え野犬が迫ろうと、ドラゴンが舞い降りようと、ぼよぼよちゃんは動じません。そういうものが現れた、ぐらいにしか思えないのです。

あまりにも暢気なぼよぼよちゃんに、スライムは呆氣に取られます。

この隙を突くように、野犬はスライム達目掛け駆けてきました。

野犬の行動に気付いたスライムは、その場に留まります。スライムの足では、野犬からは逃れられません。何しろ全力疾走しても、赤ん坊のハイハイよりちよつと速いぐらいなのですから。

スライムは野犬が迫る時をただただ待ち――

野犬がその口を大きく開いた瞬間、びしゃっ！ と音を立てて黄色い液体を放ちました。

液体は野犬の顔に掛かると、肉が焼けるような音と煙を出します。野犬は悲鳴を上げながらバタバタと藻掻き、一目散に逃げていきました。

これぞスライムの必殺技、溶解液です。強力な酸を浴びせ、敵にダメージを与えます。……必殺技と言いましたが、精々表面を火傷する程度の威力しかありません。先の野犬のように顔にでも当たり、上手い事目に入れば失明を起こせますが、その程度です。おまけに一日一発しか撃てない有り様。これがスライムの限界でした。

とはいえ撃退には成功しました。もう大丈夫だと、スライムはぼよぼよちゃんに伝えようとしています。

丁度その時です。

ぼよぼよちゃんがスライムに近付き、なんと、彼にチュツと口付けしたではありませんか。

スライムにキスの文化はありません。なので彼はドキドキしたりはしませんが、文化がないからこそ困惑もします。

ぼよぼよちゃん、そんな彼に構わずちゅうちゅうと吸い付いてきます。やがてぐぼぐ

ぼと音を立てながら、その口を広げていき……少しずつ、スライムを口の中に押し込んでいきます。

スライムはハツとしました。ハツとした時には、もう手遅れでしたが。

ぼよぼよちゃんは、自分を助けてくれたスライムを食べようとしていました。

「ぷんぷん……ぷんぷん……ぷんぷん……ぷんぷん……」

スライムは必死に身体を震わせ、ぼよぼよちゃんに訴えます。止めてくれ！ 食べないでくれ！ ですが、ぼよぼよちゃんは止まりません。

今のぼよぼよちゃんは、スライムの事しか見ていませんでした。

そうです。ぼよぼよちゃんは、最初から彼の事をごはん程度にしか思っていないませんでした。自分を助けてくれた事への感謝など、抱いてもいません。感謝する心など、絶海の孤島には不必要なものですから。

必死に暴れるスライムを、ぼよぼよちゃんは口の中に押し込んでいきます。ぼよぼよちゃんの弾力のある身体は、スライムを類張るほどに膨らみ、彼を容赦なく飲み込んでいきました。スライムは半狂乱になりますが、どうにもなりません。

ついにはごくんと、ぼよぼよちゃんはスライムを丸呑みにしてしまいました。しばらくその愛くるしいボディが内側からぼこぼこ膨らみましたが、やがて収まりました。

「……………」

ぼよぼよちゃんの口から、大きなげっぷが出てきます。消化酵素がタンパク質などを分解した際、二酸化炭素が発生するため、スライムさんは食事後によくげっぷをします。つまりは、そういう事です。

しかしぼよぼよちゃんのお腹を満たすには、あんなものではまだまだ足りません。もつとごはんを食べて、もつと増えたいぼよぼよちゃんは、辺りを見渡します。

そうして地平線の彼方に、何やら砂浜とは違う色合いのものが見える事に気付きました。ぼよぼよちゃんは少し考えた後、ぼよんよんと跳ねて、地平線を目指します。

ぼよぼよちゃんはとても好奇心旺盛なのです。

だつて周りと雰囲気が違う場所には、ごはんがあるかも知れないのですから……

## ぼよっ

ぼよんぼよんと跳ねていた。ぼよぼよちゃん、地平線にあつた何かのすぐ近くまでやってきました。

そこは緑色の棒がたくさん立ち、四角い石が綺麗に並んでいました。それらを囲うように、大きな石がぐるりと並んでいます。どれもぼよぼよちゃんの背丈よりずっと高く、なーんにも考えずに見上げたぼよぼよちゃんは、すってんころりん、後ろに転がってしまいました。

ぼよぼよちゃんには知る由もありませんが、緑色の棒は街路樹で、四角い石は人間達の住む家でした。それらを囲うのは、魔物や亜人の攻撃を防ぐための防壁です。

此処は港町サスウエル。海の傍で暮らす、人間達の町です。

この町に入る正規の方法は、防壁に一ヶ所だけ設けられた検問所を通る事です。ですが野生動物的生活をしていたぼよぼよちゃんに検問所なんてものが分かる筈がなく、分かったところで魔物を入れてくれるほど審査は甘くありません。

興味を持ったので中に入れてみたいぼよぼよちゃんは近くを見渡し、防壁の一部に開いている、小さな穴を見付けました。

それは町に溜まった雨水を外へと逃がすための、簡易的な排水口でした。穴の大きさは約二十クリット。ぽよぽよちゃんの背丈よりもずっと小さな穴ですが、そこは一応スライムの仲間。ぽよぽよちゃんは自らのぽよぽよボディを変形させ、穴を潜って町の中に侵入します。

壁の向こうは、一層綺麗な世界でした。

道端に植えられたたくさんのお花々。建物の窓に掛けられた洗濯物の数々。玄関の前に置かれた水瓶。

他にも色々ありましたが、どれもぽよぽよちゃんが暮らしていた島には存在しないもの。生まれて初めて目の当たりにする、複雑で、味わいのある景色に、今まで岩と海と仲間しか見た事がないぽよぽよちゃんは感動でその目を潤ませ

「ぽよ〜ぽよ〜」

たりなんかはせず、まったりと歩き始めました。

ただのスライムでしたら、情緒を抱くだけの知性があります。しかしぽよぽよちゃん達スライムさんは長年の進化により、エネルギー消費が多い脳細胞を削減していました。今や知性はトカゲ〜ネズミ級。景色に感動するような感性は無駄なので持ち合わせておりません。

さあ、ぽよぽよちゃんが移動している間、この場所……サスウエルについて少し話し



ましよう。

サスウエルは昔、隣国との交易で大いに繁栄した町でしたが、ここ十数年は海の魔物クラーケンの出現により幾つかの航路が途絶し、すっかり寂れてしまいました。漁で獲れる魚も減り、町民の多くが別の町に移っています。

それでも、なんやかんや表通りが人でごった返し、彼等をターゲットにした露店が所狭しと並ぶぐらいには、今も住人は居るのですが。

「ぼよっ?」

裏通りから表通りに出てきたぼよぼよちゃん。小首を傾げて、表通りを歩く人間達を眺めます。

人間の姿を見るのは、初めてではありません。

ですが、それは偶然島に流れ着いた水死体です。動きませんし、腐敗性ガスが溜まってぶくぶくに膨れ上がっていますし、皮膚は剥離し……おっと、失礼。

ともあれ、ぼよぼよちゃんは、目の前の生き物が島に流れ着くものと同じとは気付きませんでした。とても大きくて、強そうです。ぼよぼよちゃんが小さくて、弱そうなだけですが。

「ぼよっ」

しかしながら天敵と呼べる生物と出会った事がないぼよぼよちゃん。初めて見る生

きた人間に、恐れずぼよんぼよんと歩み寄りました。

小さいとはいえ、三十クリットほどあるぼよぼよちゃん。当然、隠れようともせず人混みに出れば、その姿は見付かってしまいます。ぼよぼよちゃんは近くを歩いていた若い女の人と目が合い、

「——きやああつ?!」

いきなり、短い悲鳴を上げられました。

「ぼよ?」

「うわあ!? す、スライム? なんかスライムみたいのがいるぞ!」

「早く憲兵に伝えろ!」

「お嬢ちゃん、こつちに来なさい!」

呆気にとられるぼよぼよちゃんを余所に、通りに居た人々は素早く避難します。ぼよぼよちゃんの周りから、人間の姿は一斉に消えました。

どうやらぼよぼよちゃん、町の人にへんてこスライムと認識されたようです。確かに女兒向け人形のような、色々間の抜けた形状をしています。が、ふるふるぼよぼよした身体はとてスライムっぽく見えます。スライムさんを知らずとも、ぼよぼよちゃんがスライムの仲間である事は一目瞭然でした。

勿論人々は、スライムがとても弱い魔物である事を知っています。同時に、吐き出す

溶解液を浴びれば、一生消えない傷痕が残る事も。目に入れば失明です。接触しないに越した事はありません。

謎のスライムに、人々は確かな恐怖を抱きました。

「……ぼよっ？」

当人は、呆れるほどに無垢ですが。何が起きているのか分からず、ぼよぼよちゃんはぼけつとします。

そうしてぼよぼよちゃんが突つ立っていると、とことこ小さな影が近付いてきました。

小さな男の子です。大体、三歳ぐらいでしょう。小さいといってもぼよぼよちゃんの三倍近い背丈があります。すぐ傍までやってきた男の子に、ぼよぼよちゃんは見下ろされました。

「お、おい！ 子供が居るぞー！」

「こつちに来なさいー！」

大人達は叫びますが、どうやらこの男の子、生意気盛りの様子。

意地悪な笑みを浮かべるや、彼はぼよぼよちゃんを蹴ったではありませんか。

「ぼよぼよっ……」

ぼよぼよちゃん、あつさりと転がります。酷い目に遭いましたが、天敵がない島で

生まれたぽよぽよちゃんには『攻撃』という概念がありません。その概念は不要なので、進化の中でずっぱり切り捨てました。ぽよぽよちゃんは自分が何をされたのかも分らず、キョトンとしてしまいます。

転んだぽよぽよちゃんを見て、男の子は嬉しそうです。

「なんだよー、よわっちいなあー！」

そのまま何度も何度も、ぽよぽよちゃんを蹴つてきます。ぽよぽよちゃん、蹴られるがまま。ボールのように転がりました。

それを見ていた大人達、ふと思ったのでしよう。

あのへんてこスライム、弱いぞ——と。

「な、なんだよ、脅かしやがって」

「よくよく考えたら、ただのスライムだしな」

子供の行動により、大人達が士気を取り戻します。確かにスライムは油断してはいけない相手ですが、その気になれば素手でも勝てる相手なのです。ましてや大人が武器を持ち、数人がかりで挑めば、退治するなど余裕でしょう。大人達は一斉に家へと戻り、再び出てきた時には、棒やら箒やらで武装していました。

そして男の子とぽよぽよちゃんの下に、我こそが一番乗りだと言わんばかりに駆けてきました。これには男の子の方がちよつと驚いたのか、ぽよぽよちゃんから視線を外し

ます。

丁度、そのタイミングです。

ぼよぼよちゃんの身体が薄く広がり、縦横に百クリットほど伸びたのは。

男の子に、声を上げる時間もありません。ぼくん、とぼよぼよちゃんは男の子を包み込み、軽々と持ち上げました。その光景を目の当たりにし、大人達も足を止めてしまいません。

これは、ぼよぼよちゃん達スライムさんの捕食方法の一つです。

ぼよぼよちゃんが暮らしていた島では、食べ物は滅多に流れ着きません。飢餓に強いスライムさんでも、何時もお腹を空かせているような環境です。流れ着いたごはんが大きくて口に入らないなどと弱音を吐けば、たちまち他の子に盗られてしまうでしょう。そのためぼよぼよちゃん達スライムさんは、自身の身体を薄く引き伸ばし、包み込めるよう進化しました。これなら自分より大きな食べ物でも、独り占めに出来ます。

勿論、口に含んだだけでは食べた事になりません。食べ物を落とさぬよう、ぼよぼよちゃんは子供を包み込んでいる自身の身体を捻ります。それと同時に伸ばした皮膚の表面に鋭い突起を幾つも作り、捕らえた『食べ物』へと突き刺します。

そして突起から、消化液を分泌しました。

ぼよぼよちゃん達スライムさんは、全身から消化液を分泌する事が出来るのです。攻

撃用の溶解液ではありません。溶解液が敵にダメージを与える事を目的にしているのに対し、消化液は食べ物を吸収しやすい状態に変えるためのもの。一見似た効果があるようで、全く別の代物です。消化液には溶解液ほどの即効性はありませんが、溶解液で変化した分子は吸収に向きません（反応の過程で、タンパク質の多くが高分子化してしまふからです）。どちらも一長一短があり、天敵がいない環境で進化したスライムさんは、溶解液の合成器官を退化させてしまいました。代わりに、体表から消化液を分泌出来るように進化したのです。

さて、直に消化液を打ち込まれた獲物は、刻々と分解されていきます。タンパク質はアミノ酸へと変化し、どろどろとしたスープへとなって、総出入口を通って体組織内へと流れ込んでいきます。お腹がぷくぷくと膨らんでいき、ぽよぽよちゃん、至福の時を堪能していました。

「!? ————!」

勿論生きたものを消化しようとするれば、獲物は苦痛のあまり暴れるでしょう。じわじわと身体が、表面から、ゆつくと溶けていくのです。とても怖いですね。しかしぽよぽよちゃんは甘くありません。天敵に襲われた事はなくとも、食べ物の奪い合いは毎度の事。一度捕らえた餌を放すなど言語道断です。

時間にして、一分にも満たない僅かな時。子供を包み込んでいた皮膚が解かれ、すつ

かりぼよぼよちゃんの形に戻ります。

そこに、子供の姿はありません。あるのは、おデブちゃんになったぼよぼよちゃんだけです。

「けぼっ」

ぼよぼよちゃんは、ごちそうさまのげっぷをしました。

「た、たた、食べたあああ!?!」

「ひひひひひひひひ!?!」

人々は錯乱したような悲鳴を上げ、我先にと逃げ出します。まるで予想外の事が起きたと言わんばかりの反応ですが、正にその通り。スライムの攻撃とは溶解性の液体を飛ばしてくるぐらいなのです。被害は大火傷を負う程度の、悲惨ではありませんがあんまり死にはしない程度。人を丸呑みにするなんて、あり得ない事でした。

押し合いへし合い、隣の人を突き飛ばし、人々は自分だけでも助かろうとします。老人や女性が相手でもお構いなし、パニック状態で散り散りになります。

ぼよぼよちゃんは、その間ころころと転がっていました。大きなモノを食べたので、身体はボールのように丸くなり、あんまり自由に動けません。消化したモノが吸収出来るまでこのままです。

とはいえぼよぼよちゃん、危機感なんてありません。実のところ痛覚が退化してお

り、男の子に蹴られた時も痛みすら感じていませんでした。自分が攻撃されていた事実にも、今も気付いていないのです。

ころころころころ。風に揺られるがまま、満腹になったぼよぼよちゃんはぼーんやりと過ごそうとします。

——ところが、そもいかないうです。

「見付けたぞ！ アイツだ！」

大きな声が、聞こえてきました。

ぼよぼよちゃん、声に興味を持ったので短い手足をぶるぶるさせて、どうにかこうにか起き上がります。するとすっかり誰も居なくなつた表通りに、四人の若者が居るではありませんか。

一人は黒いどんがり帽子を被り、黒いマントを羽織る、自身の背丈よりも大きな杖を持った可愛らしい女の子。

一人は槍を持ち、白銀に輝く重厚な鎧を纏つた無骨な男の人。

一人は修道服を身に纏い、十字架を握り締める麗しき乙女。

そして一人は、軽量ながら鎧を装備し、宝石のように煌めく剣を構えた淡麗な青年。

ぼよぼよちゃん、こんなにもカラフルな景色は初めて見ました。美味しいものでしょうか？ 興味があつたのでじつと見ていたところ、青年がぼよぼよちゃんに一歩近付き



ます。

そして、

「見付けたぞ。これ以上の勝手はさせない……ここで、討つ！」  
全員を代表するように、そう宣言するのです。

ぽよ？

勇者と呼ばれる人々がいます。

彼等、或いは彼女達は、人に仇成す魔物の討伐を仕事としています。その目的は一攫千金目当てだったり、根なし草でも出来る仕事だからだったり、魔法の試し撃ちのためだったり、正義感だったり……人によつて様々。共通点があるとすれば、彼等の誰もが『勇ましい』者達である事でしょう。魔物との戦いは常に命の危険があり、勇敢さが無い者には出来ない事ですから。

そのような勇者界限で、伝説と呼ばれるチームがありました。

軽薄な口振りからは想像も出来ませんが、素早い槍裁きで数多の敵兵を貫いたという亡国の騎士デユナミス。

齡十七にして何百もの魔法を使いこなす天才魔法使いセリーヌ。

生まれながら神秘と浄化の力に満ち、下等な悪魔ならば近付く事すらままならない聖女アンリ。

そして天性の才覚と機転により、熟練の戦士すらも打ち負かしてしまふ若き剣士口イ。

数多の魔物を征伐し、誰一人として仲間を失わず、金や名誉ではなく正義のために戦う気高き勇者達——そんな恐るべき集団が、ぼよぼよちゃんの前に現れた四人組の正体だったのです。ひよっとしたらぼよぼよちゃん、大ピンチ？

ですが当のぼよぼよちゃんは、やっぱり危機感なんてなく、ぼんやりと四人を眺めています。

「ま、所詮スライムだ。さっさと片付けようぜ」

「デュナミス。あなたはまたそうやって油断する……町人の話によれば、あのスライムは既に幼子を一人喰らっているのですよ」

「それに、普通のスライムは人の形なんか取らないでしょ」

「へいへい。忠告ありがとうございます」

修道服を着た乙女アンリさんと、とんがり帽子の女の子セリーヌさんに窘められ、鎧姿の男であるデュナミスさんは軽口を叩きます。

「そんじゃあ、隊長の意見を伺いますか……ロイ、どうする？」

そして剣を構えた青年……ロイさんに、指示を求めました。

「……相手はスライムだが、子供とはいえ人を丸呑みにしている。瞬発的には素早く動けるだろう。不幸中の幸いだが、子供を飲み込んだ分だけ重くなり、動きは鈍っている筈だ。手早く片を付けるぞ！」

「りよーかいつー！」

劍を構えたロイさんと槍を握り直したデユナミスさんが、疾風の如く速さで駆けてきます。

対するぽよぽよちゃん、満腹でころころころころするのが精いっぱい。仮に動けたところで、ぽよんぽよんと弾むのが限度です。到底逃げ切れません。

ロイさんは素早く、鋭い切っ先の劍を叩き付け、

ぷよーん、とぽよぽよちゃんの身体は潰れました。

「——何ッ」

ロイさんは驚いたように目を見開きます。一般的にスライムの皮膜は薄く、犬が噛み付いただけで破れるほど脆いのです。劍で斬ろうとすれば当然一撃で終わります。しかしぽよぽよちゃん達スライムさんの皮膜はとても厚く、ちよつとやそつとでは切れません。お陰でこの一撃は難なく耐えました。

ですが彼等も歴戦の勇者達。この程度の予想外で乱れる事はありません。ロイさんは跳び退き、素早く体勢を立て直します。

「せいっー！」

そして一瞬の隙を埋めるように、後ろに居たデユナミスさんが槍を振りました。

ぽよぽよちゃんの皮膜は頑丈ですが、それは叩くという方向に対してです。突く、と

いう攻撃への耐性は、あまり高くありません。

ブスリと、デュナミスさんの槍はぽよぽよちゃんを貫きました。

「良しー」

素早くデュナミスさんも後退し、ぽよぽよちゃんから槍を引き抜きます。同時に勝ち誇るような笑みを浮かべました。

スライムの体組織は液体状です。そのため小さくても穴が開くと、身体の中身が止め処なく出てきてしまいます。ぽよぽよちゃんの体組織も、水分を蓄える機能を持つタンパク質の影響により比較的固形に近くはありますが、自力で形を留めていられるほど頑丈でもありません。ましてや今はお腹いっぱいの状態。体組織は消化してスープ状にした食べ物が満たされ、極めて液体に近くなっています。

開けられた穴から、ぽよぽよちゃんの中身が勢いよく溢れ出しました。青色の液体でしたが、まるで首を切られた獣が血を噴き出すような光景です。当然ぽよぽよちゃんの命はもう長くない

と、彼等は思ったでしょう。

「ぽよっ………ぽよー!!?」

ぽよぽよちゃん、ワンテンポ遅れてようやく自分の身体に穴が空いた事に気付きます。流石のぽよぽよちゃんも、身体に穴が空いたら大変な事は重々承知しているので

す。

だから、塞ぎました。

目視可能な早さで、皮膜を再生させるという方法で。

「いつ!?!」

「う、?.....!?!」

勇者達の誰もが驚きます。魔物には魔力があるので、魔法で傷を癒やす事はありません。高位の魔物の中には出鱈目な魔力を用いて、詠唱なしに回復する個体もいるそうです。ですがぼよぼよちゃんはスライムの一種。犬にも負けるスライムの魔力などお察しです。ぼよぼよちゃんの行為は、彼等の理解を超えるものでした。

さて、ぼよぼよちゃんの再生機能ですが、これも進化によって獲得したものです。

ぼよぼよちゃん達スライムさんが暮らす島は、昔は兎も角、今ではすっかり見晴らしの良い岩場です。そのため隠れる場所が何処にもなく、嵐が来ても耐えるしかありません。

しかし嵐がもたらす暴風は、島にある小石を矢のように飛ばしてくる事があります。

柔らかい皮膜ではこの猛攻に耐えられません。けれども皮膜の強度を高めると動きが鈍くなり、また食べ物を捕らえるための変形も出来なくなります。嵐に耐えられても、その後食べ物が取れなくては意味がありません。

そこでスライムさん達は、傷口をすぐに治すという進化を辿りました。

無論それは簡単な事ではありません。本来スライムが持っている機能の幾つかを退化・消失させ、構造を単純化させる必要があります。失った機能は多岐に渡りますが、お陰で今回も難を逃れました。これで一安心と、ぼよぼよちゃんは安堵します。

「おいおい、マジかよ……こりゃ、そんじよそこらの魔物とは訳が違うぞ……！」

「物理攻撃は通用しないか。どうやら、スライムと思わない方が良さらしい」

対する勇者達は、苦悶の表情を浮かべています。再生能力の高さを目の当たりにし、ぼよぼよちゃんへの警戒度を引き上げたようです。

ぼよぼよちゃんも、「なんか、いやなのー」と思い始めていました。攻撃の概念はありませんが、気分の善し悪しはあるのです。彼等と一緒に居ても、あまり楽しくありません。

嫌な事からは逃げるに限ります。ぼよんぼよんと、ぼよぼよちゃんは彼等に背を向けました。

「逃げるつもりなのですが、そうはいきません」

その様を見て、アンリさんが素早く呪文を唱えます。

するとどうでしょう。アンリさんの周囲に、光の球が現れたではありませんか。球の数は四つ。いずれも眩く、神聖さを醸しています。

これは聖女であるアンリさんしか使えない、浄化の光です。魔力と反応を起こし、その際に生じる熱を持って敵を膨張・破裂させるといふ、聖女らしからぬ奇跡の技です。そして魔物とは、大なり小なり魔力を持つモノ。故にこの技から逃れられる魔物はいません。

アンリさんは浄化の光を、ぽよぽよちゃん目掛け容赦なく放ちます。哀れぽよぽよちゃん、避ける事も適わず、浄化の光の直撃を受けてしまい

——ぽこんっ。

なんとも間抜けな音と共に、浄化の光を弾きました。残る三つの光も、ぽこんっ、ぽよんっ、ぽかんっ、と弾かれました。弾かれた球はころころと地面に転がります。

「ぽよ? ……ぽっぽよ♪」

そしてぽよぽよちゃん、転がった光の球に気付くと、突いて遊び始めました。まるで堪えていません。

「そ、そんな……!?!」

アンリさん、予想外の事態に表情を絶望で歪ませ、後退りしてしまいます。

さて、この事態ですが……理由は簡単。実はぽよぽよちゃん達スライムさん、魔物なのに魔力を全く持っていないのです。何故なら魔力を生成するための器官が退化し、消失しているから。



魔物の魔力は、主に戦闘で用いる魔法のために使われます。スライムでも簡単な治療魔法ぐらいなら使い、敵から逃げる時に役立たせます。ところがぼよぼよちゃん達スライムさんは、天敵のいない島で進化しました。島ではわざわざ魔力を生成する必要がありません。むしろそんな器官を作るぐらいなら、体組織で満たして栄養の貯蔵庫にした方がマシです。再生力を高める上でも、複雑な魔力器官は邪魔でした。

こうしてぼよぼよちゃん達スライムさんは、魔力を失ったのです。またしても偶然の進化に助けられました。

しかし勇者達はそのような事情など知りません。彼等からすれば、ぼよぼよちゃんはあらゆる攻撃を無効化する、さぞ恐ろしい怪物に見えるでしょう。

「なんて奴だ……アンリの浄化がまるで効いてねえ！」

「結界を張っているのか？ いや、浄化の光は魔力に反応する。あのような反応をするとは……」

「反撃してこないのは良いが、それがまた不気味だぜ……」

デユナミスさんとロイさんも一步後退り。ぼよぼよちゃんと距離を取ります。

ぼよぼよちゃん、まだ何もしていませんが、相手をとてもしびらせているようです。

……正確には、何も出来ない、と言うべきですが。

ぼよぼよちゃん達スライムさんは、そもそもにして『敵』というものが分かりません。

島で脅威と呼べるものは嵐ぐらいで、何をしても徒労に終わるだけ。抗おうという考えはどんどん退化していききました。退化した思考には、敵を攻撃する、という考えは浮かびもしないのです。

え？ スライムや子供の時のように食べれば良いじゃないかって？

そうですね、食べるというのも立派な攻撃でしょう。ただし、襲われる側にとっては、ぽよぽよちゃん達スライムさんにとつて、食べるというのは『食べる』ための行為でしかありません。攻撃に転用するという発想はないのです。

光の球で遊ぶのに飽きたぽよぽよちゃんは、嫌なものがいる事を思い出し、そそくさとその場を後にしようと思いました。

「ああもう！ じれったい！」

「！ 待てセリ——」

それを逃すまいと、今度はセリーヌさんが前へと出ます。咄嗟にデュナミスさんが止めようとはしますが、天才魔法使いのセリーヌさんが呪文を唱える方が早いです。

魔法使いは、自らの魔力を呪文の力によつて操り、魔物と同じ力を使う事が出来る人々です。その威力は、非人道的の一言に尽きます。

『フレア・コースト』！

ましてや上級魔法……この世界でも使えるのは数えるほどしかない威力の魔法と

なれば、その殺意は凄まじいものです。

突如現れた巨大な炎に、ぼよぼよちゃんは丸ごと包み込まれてしまいました。

「――！」

炎に包まれたぼよぼよちゃん、ジタバタと暴れますが、どうにもなりません。炎の勢いは弱まらず、ぼよぼよちゃんは徐々に動きを鈍らせます。

そして炎の中で、ぼよぼよちゃんの姿は少しずつ小さくなっていきました。

「えっ!? な、なんか普通に効いてる……?」

どうやらセリーヌさん、まさか通用するとは思っていなかったようです。呆気に取られます。

魔法の炎がぼよぼよちゃんを焼いたのは、ほんの二十秒ちよつと。ですがその二十秒で、ぼよぼよちゃんの姿はすっかり消え果てます。セリーヌさんが魔法を消しても、ぼよぼよちゃんの姿は見えません。

代わりに、黒い塊が残るだけでした。

「……………」

デユナミスさんは恐る恐る近付き、黒い塊を槍の先で突きます。塊は硬く、刺さる手応えはぐにぐにとしています。当然、動き出す気配などありません。

安全を確保すると、今度はアンリさんとセリーヌさんが塊に近付きます。そして二人

は手を、塊にかざしました。

これは魔物の生死を確認しているのです。魔物の中には、致命的な傷を受けると、仮死状態になるモノがいます。中には心臓を止め、腐臭まで漂わせる猛者もいるほどです。

そこでアンリさんとセリーヌさんは、魔法と奇跡の力を用いて生死を判別するので、仮死状態はあくまで表面的な事象を捉えた結果に過ぎません。体液の循環や、魔力の流れを検知すれば、死んだふりを見抜けます。同時にこれは非常に危険な作業です……生死を確認すべく意識を集中しているので、例えば急に魔物が起き上がったなら、二人は不意を突かれる格好となるのです。勿論ロイさんやデユナミスさんが見張っています、それでも危険な事には変わりはありません。

戦いの中で、一番緊張する瞬間……それは、アンリさんとセリーヌさんが、同時に安堵の息を吐いた事で終わりました。

死亡確認。ぽよぽよちゃんだった塊は、如何なる生命活動もしていないと判明したのです。

「ふう。どうやら、本当に死んだらしいな」

「ああ……しかし、魔法以外が通じない魔物か。厄介だな」

「まさか浄化の光すら通じないなんて……私の力が至らないばかりに」

「今回は仕方ない。このような事態を想定していなかった俺の責任だ……それと、今後はセリーヌの力が一層必要になるな」

「ふ、ふふんつ。当然よね! なんてつたつて私、天才だから! 例え炎が効かなくても、まだ氷や雷、闇と光の魔法だってあるんだから! まっかせなさい!」

「頼りにしてるぜ、天才さんよ」

和気あいあいと、しかし戦いの復習は忘れずに、勇者達は勝利の余韻を噛み締めます。それから改めて、ぽよぽよちゃんだったモノを見ました。

「さて、この亡骸だが……どうしたものか」

「片付けるにしても、道にこびり付いちちゃってるわね。ちよつと剣とか槍で剥がせない?」

「おいおい、勘弁してくれよ。石造りの床に擦り付けたら、武器が駄目になっちまう」

「でしたら、へらが必要になりますね。近くの民家、には人が居ませんから、宿屋まで戻りましょう」

「そうすつか……んあ?」

話をしていたところ、ぺこんつと小気味良い音がデユナミスさんの鎧から鳴ります。

それは、「雨粒がぶつかった音でした。」

「つと、雨かよ。さっさと片付けて、宿に戻ろうぜ」

「そうだな。全員で行けばいっぺんに持ってこれるか」

「うわっ！ 降ってきた降ってきた！」

話している間にも、雨足はどんどん強くなります。如何に連戦連勝の勇者達でも、風邪には敵いません。全員が、そそくさとこの場を後にします。

誰も居なくなつた場を、雨音だけが満たします。ざあざあと音が鳴るほど強い雨は、辺りをびっしりと濡らしました。当然ぼよぼよちゃんだつた黒い塊も、雨に濡れてしまします。

するとどうでしょう。黒い塊の一部が、ぐによくによと動き始めたのです。黒くなつた表層部分はカサブタのように剥がれ、中にある文字通り青々とした中身を露呈させます。動く場所は段々と広がり、ついには全身に。

そして全ての黒い表層を落とすと、青い中身はぼよんと跳ね、

「ぼよー」

ぼよぼよちゃん、復活です！

実はぼよぼよちゃん、燃やされても死んでいませんでした。とはいえ、何かトリックを用いた訳でもありません。ぼよぼよちゃんは環境変化に適応しただけです。

その名は『クリプトビオシス』。

体組織の水分を抜き、自らの身体を乾燥状態にする事で厳しい環境に耐える形態で

す。言ってしまうえば復活可能な干物なのですが、ただの乾物と侮るなかれ。百度を超える高温、マイナス二百度近い低温、人間なら即死する放射線、真空……いずれも、幾らかの時間制限はありますが耐える事が出来るのです。

この能力も、食べ物が少なく、乾燥や高温が度々訪れる島の不安定な環境への適応で獲得したものでした。ちなみにクリプトビオシス状態の生物は、一切の生命活動が停止しています。呼吸どころか代謝もしていません。僅かな生命反応を検知するアンリさん達の方法では、ぼよぼよちゃんの生存は見抜けなかつたのです。

「ぼっよ、ぼっよ、ぼっよっよー」

蘇生したぼよぼよちゃん、身体をぐにやんぐにやんと動かしません。一通り準備運動を終えると、ふるるん、と震えました。

そして、頭の真ん中から切れ目が入ります。

切れ目はどんどん深くなり、ついには頭が裂けてしまいました。するとまるで傷を直すように、左右の頭から欠けた部分が生えてきます。切れ目が移動した胴体でも同じ事が起きていました。

やがて切れ目はぼよぼよちゃんの足下まで行き、ぷっちんと音を立ててぼよぼよちゃんを真っ二つに。

ぼよぼよちゃんは、ふたりになってしまいました。いえ、正確には、ぼよぼよちゃん

と、ぼよぼよちゃんによく似た子、でしょうか。ちよっぴり顔付きが違います。目付きのキリツとした（比較的）凛々しいスライムさんです。

これこそがぼよぼよちゃんの繁殖方法である分裂です。中身が溢れたり、クリプトビオシス状態から復帰時に皮膜の再構築をしたりで結構なエネルギーを消費しましたが……子供とはいえ一人を食べたので、繁殖に十分なエネルギーは残っていました。

「ぼよっ！」

「ぼよぼーよ」

「ぼよー？ ぼっぼよー」

「ぼーよ、ぼーよ」

ぼよぼよちゃん、分裂した自分とお話します。やがてぼよぼよちゃんは分裂した相手を置いて歩き出しました。分裂した相手も、ぼよぼよちゃんとは反対方向に歩き出します。

ぼよぼよちゃんは町の外を目指していました。

分裂した相手は町の内を目指していました。

ひとりは嫌な場所から逃れ、ひとりはこの場所で栄えるために――



## ぼっよー♪

港町サスエルの外は、広大な平野でした。

空からはざあざあと大きな雨粒が降っていましたが、ぼよぼよちゃんは構わず歩きます。平野は背丈の短い草が生い茂っており、一面緑色。雨に濡れた葉が水滴でキラキラと輝いていました。

ぼよぼよちゃんは雑食です。当然草も食べられます。食べられますが……しかし食べやすいかは別問題。

大昔のご先祖様、つまり普通のスライムなら、とても簡単に食べられたでしょう。普通の食事のように、土や砂を体内に取り込むのと同じ要領——皮膜で餌を包み込み、包み込んだ皮膜ごと体内に取り込む方法です——でやれば良いのですから。地表近くの有機物を取り込むのはスライムの十八番なのです。

ところがぼよぼよちゃん達スライムさんは、これが大の苦手。皮膜が分厚くなり、粘液を失った事で、餌を包んだ皮膜を体内に取り込む事が出来なくなったためです。

そのためスライムさんは、食べ物を口から入れる必要があります。島で暮らしていた時の餌は流れ着いた千切れた海草や魚の死骸など、一口で大きな量を摂取出来る食べ物



熱が移ります。その空気を体外に排出する事で、体温調整をします。

これは人間などが行う発汗、つまり汗を流し、その気化熱で体温を下げる方式と比べるとうかなり非効率です。しかしぼよぼよちゃん達にとって水は貴重なもの。だから排出するなど以外の外。例えば非効率でもこの方法を使うしかありません。

幸いにして、この辺りの土地は生まれ故郷の島よりも気温が低く、空気式体温調節でも問題ありませんでした。ぼよぼよちゃん、もりもりどんどん進みます。

やがて、ぼよぼよちゃんは港町サスウエルと、その隣の町であるアマイアまでの道のりの丁度真ん中辺りまで来ました。このまま真っ直ぐ歩けば、明日の夜明け頃にはアマイアに着くでしょう。

旅路は順調そのものでした。

「オイー・オマエ、何シテルー」

……おや？ 誰かがぼよぼよちゃんを呼び止めます。

言葉の内容はぼよぼよちゃんには分かりませんが、『物音』に興味を抱いたので、ぼよぼよちゃんは振り返りました。

そこには百クリットほどの小さな身体をした、子鬼が居ました。痩せた身体にでっぴりと出た腹は、飢餓に遭った子供のよう。ですがその顔は醜悪の一言に尽き、子供のような可愛らしさはありません。

これはゴブリンです。下位の魔物の一種で、その力はスライムよりはマシな程度しかありません。ですが非常に繁殖力が高く、また道具を作り出すなど小手先の技術に優れています。見た目の割りに、そこそこ危険な相手でした。

「ぼよー?」

尤もぼよぼよちゃんはゴブリンなど見た事もなく、キョトンとしていましたが。

「……オマエ、スライム、カ?」

ゴブリンもゴブリンで、戸惑っていました。どうやらスライムと違って声を掛けたようですが、思っていたスライムとあまりに違う見た目のため、ちよつと混乱しているようです。

とはいえぼよぼよちゃんの容姿は、彼にとつてさして気にする問題ではなかったのでしょう。顔を振って困惑を払うと、彼はぼよぼよちゃんに威圧的に話し掛けます。

「ぷらーが様カラ、命令。にんげんノ町、攻メル。オマエ、手伝工」

ふんぞり返り、偉そうに命じてくる彼に、拒否を許すような雰囲気はありませんでした。

実はこのゴブリン、とある魔族（とても強い魔力を持った、魔物の一種です。人型をしており、人語も話せません）が率いる軍の一員としてアマイアに攻め入ろうとしています。

魔物達の住む土地は魔力に汚染された不毛の大地であり、全員が幸せに生きていくだけの資源がありません。そのため強い種族が弱い種族を支配する、弱肉強食の世界となっていました。考え方も、強い者が弱い者を支配して当然というもの。故に彼等は、自分達よりも弱いと思つた種族を、力によつて支配しようとしません。傍迷惑な事に、魔物達<sup>自分</sup>だけでなく他の種族さえも。厳しい環境への適応が、周りに迷惑を掛ける価値観を育んでしまつたのです。

このゴブリンが所属する軍も、目的は略奪と支配でしょう。ゴブリンがぼよぼよちゃんを軍に誘つたのも、自分の利益のために違いありません。

「ぼよ？」

残念ながら、ぼよぼよちゃんには全く意味が通じていませんでしたが。

「拒否ハ許サナイ！ コツチニ来イ！」

しかしゴブリンはぼよぼよちゃんの意見は聞いていないようで、ぼよぼよちゃんを捕まえると、ひよいつと持ち上げます。

ぼよぼよちゃん、ゴブリンの狼藉を黙つて受け入れます。何をされているかは分かっていますませんが、自分の行きたかつた道を外れ、違う場所に向かつている事には気付いていました。

しかしそれでも構いません。

ぼよぼよちゃんは嵐の夜、海流によって新天地に運ばれました。なら、今回もそれと同じです。

自分を運ぶのが海だろうとゴ布林だろうと、運ばれた場所が天国だろうと地獄だろうと、やる事は変わらないのですから。

………

………

…

ぼよぼよちゃんが連れてこられたのは、平野に作られた魔物達の前線基地でした。

基地と言っても、ろくなものではありません。テントがあり、食べ物の詰まった箱が平積みされている……あくまで一時的な駐屯地です。侵攻を開始するまでの、軍備を整えるための場所と言うべきでしょうか。

ゴ布林に連れられたぼよぼよちゃんは、その基地の奥にある、謎の施設にて放り投げられました。ぼよんと床を跳ね、ぼよぼよちゃんは無事着地します。

辺りを見ると、何やら不思議な場所でした。部屋の中には大きな釜があり、その釜には棒が刺さっています。棒の横にある板を押すと棒自体が回転、釜に浸かっている部分にも板があり、中身を攪拌する仕組みになっています。

そして板を押しているのは、不定形で、ねばねばとした、ごく一般的なスライム数十

体でした。

「今日カラ、オマエ、ココデ働ケ。ジャアナ」

ぼよぼよちゃんを連れてきたゴブリンはそれだけ言うと、さっさと部屋を出てしまします。仕事の説明もなしです。

ぼよーん……ではなく、ぽかーんとしているぼよぼよちゃんでしたが、やがて一匹のスライムが近付いてきました。そのスライムは他のスライムよりも大きく、どうやらリーダー格のようです。

「ぷるるるる、ぷる、ぷるるるるる」

リーダースライムはぼよぼよちゃんの前で震えます。スライムのごく一般的な会話です。

曰く、此処では魔力を精製している。

人間と戦争をするには、たくさん魔力が必要となる。武器を強化したり、戦いの傷を癒やしたり、町に結界があるなら破るために使ったり……しかし魔力は消費すれば、回復までしばしの時を必要とする。魔力を持たない魔物など、そこらの獣と変わらない。他で代替出来るなら、しておきたいものだ。

そこで魔族のお偉いさんは、人間達の技術を応用した。

動植物を素材として、魔力の結晶を作り出す。この結晶を燃料とする事で、結界破り

や武器強化で余計な魔力を使わずに済むのだ。

そしてその魔力作りを担っているのが、殆ど戦力にならないスライム達。肉体労働こそが、自分達に出来る唯一の貢献である。いや、貢献せねばならない。少しでもスライムの価値を認めてもらえなければ、自分達はそれこそ魔力作りの『素材』とされてしまおうだろう。

……との話を、リーダースライムは語りました。それはスライム達の悲運を呪い、絶望に彩られた言葉でした。同じ魔物であっても、力が弱いというだけで、スライム達は奴隷が如く扱いを受けていたのです。

「……………ぷるる、ぷるる、ぷるるるるる」

今更つまらない話をしてしまったな、と彼は語ります。そして仕事の方法を教えようと伝えると彼は背を向け、

ぽよぽよちゃんは、自分の身体を変形させました。捕食のための、です。

「……………ぷるる!」

リーダースライムは呆気にとられているうちに、ぽよぽよちゃんに捕らわれました。中で暴れているようですが、最早手遅れ。消化液を分泌され、彼の身体は溶けていきま

す。  
一般的なスライムの会話方法を退化させてしまったスライムさんであるぽよぽよ



ちゃんは、リーダースライムが何を言っていたのかさっぱり分かっていませんでした。仮に分かったところで、ぼよぼよちゃんの行動は変わらなかつたでしょう。主従？ 種族の危機？ それを理解し、共感するような感性は持ち合わせていないのです。進化の過程で、不要なものは全て切り捨てたのですから。

溶かした同族を飲み干し、自らの一部としたぼよぼよちゃん。他のスライム達は労働に勤しんでいるからか、まだぼよぼよちゃんの狼藉に気付いていません。たくさんのスライム達が、この場で一生懸命働いています。

「……ぼよー♪」

それはぼよぼよちゃんにとって、楽園のような景色でした。

ぽよぽよっ！

魔物達の多くは夜行性です。

理由としては、夜は月の魔力が降り注ぐため活動しやすいから、というのが一般的なものです。中には吸血鬼のように、陽光が弱点のため否応なしに夜行性という種族もあります。

そのような事情から、平野に作られた魔物達の軍の駐屯基地も、夕刻頃はまだ静かなものでした。兵である多くの魔物は寝ており、動いているのは小間使いのゴブリンと、見張りをしている一部の兵士。

そして夜に決行される作戦を考えている、参謀達ぐらいでした。

「……では、決行は今夜新月の刻だ」

駐屯基地の一角にあるテント内にて。角を生やし、紫色の肌をした淡麗な青年が命令の言葉を発します。

彼は魔族です。魔族とは魔物の中でも高位の存在であり、高い魔力による強大無比な魔法を得意とします。個体数は極めて少ないのですが、その影響力は計り知れませんが。

魔族の青年プラーガさんの言葉に、この基地に集った兵士達の長である三種の魔物

……オーク（三百クリットを優に超える巨体を持った、豚面の巨人です）とワイルドウルフ（オオカミの姿をした種族です）、そしてゴブリンはこくと領きました。作戦会議は終わり、各々兵士達に作戦を伝えるべくテントから出て行きます。

残るは、プラーガさんただ一人です。

「……少し、時間を掛け過ぎたか」

テントの外を見れば、すっかり夕刻になっていました。休息を取っていた兵士達も、そろそろ自然と目覚める頃です。戦の時は間近に迫っています。

その時にふと、魔力結晶の事が気になりました。

スライム達に精製を任せているそれは、戦局を左右するものです。もしも十分な量が精製出来ていなければ、兵士達は戦の行方に不安を感じ、裏切るかも知れません。軍といったところで、彼等は略奪と暴虐を目当てに集まった烏合の衆なのです。自分の利益にならなければ平気で味方を裏切ります。魔物とはそういう種族なのです。

尤も、スライムは非常に弱い種族であり、こちらの要望に応えなければどうなるかは重々承知しているでしょう。あくまで問題ない事を確認すべく、プラーガさんは意識を研ぎ澄まします。魔族であるプラーガさんは、遠方の魔力を感知する事も出来るのです。

結果、本日精製された魔力結晶はノルマの六割程度であると判明しました。

プラーガさんはギョツとしました。少な過ぎます。大型の釜を使って精製しているので、一回の作業で割合は大きく上がりますが、それでも精々一割ほどです。作業にして三々四回分、時間にして三時間ほどサボっていたとしか思えません。これでは作戦に支障が出ます。

スライム達は何をしているのか？ 苛立ちながらプラーガさんはスライム達の魔力を探ります。が、見付かりません。あまりにも見付からなくて、まるで基地内に居ないようです。

……何故、居ないのでしょうか？

流石に、プラーガさんも違和感を覚ええました。プラーガさんはテントの外に出て、辺りを見渡します。偶々近くを、荷物を持った一匹のゴブリンが通ってしました。彼に尋ねてみる事にします。

「おい、そこのお前」

「エ？　へ、へイ、何デシヨウカ……？」

「スライムの管理はお前達の仕事だったな。スライム達が何処に行ったか知らないか？」

「エツ!?　イヤ、アノ、ワ、ワタシモ作業ガアリマシテ……」

つまり、把握はしていないらしい。

どうせそんな事だろうと思っていたプラーガさんは、さして失望しません。元よりゴブリンに期待などしていません。

「……」託を並べる暇があるなら、すべき事があるのではないか？」

「ハ、ハイッ！ スグニ確認シマスッ！」

命令を受けたゴブリンは、急ぎ足でスライム達の仕事場へと向かいます。

「さて、どうしたものか……」

スライムについては一先ずゴブリンに任せ、プラーガさんは考えます。

まず、作戦の中止はあり得ません。軍の兵士である魔物は、自分の利益のために集まった集団です。中止なんて言えば、何をされるか分かったものではありません。プラーガさんは軍に居るどの魔物よりも強いのですが、軍の魔物全てを相手出来るほど強くはないのです。

延期も難しいと言わざるを得ません。魔力結晶の精製は『待ち』の工程が非常に多く、労力を集めても時間の短縮が出来ません。今から作業を始めてもノルマ達成は数時間後となり、そこから出陣してもアマイア到着は昼近くになってしまいます。魔物は元気を失い、人間は元気がいっばいな時間帯です。この時間帯に攻めるのは流石に無謀なので更なる延期が必要ですが、そうなると今度は食べ物がありません。

選択肢は、準備不足は承知で定刻通り決行する以外にありませんでした。

「仕方ない。不足分は私が前線に出て補うとしよう。偶には運動しなくては、腹に贅肉も付いてしまうしな」

不敵な笑みを浮かべながら、プラーガさんは準備運動がてら己の魔力を高めました。丁度、そんな時です。

「プ、プラー、プラーガ様ア！」

プラーガさん呼び止める声でしたのは。

「……全く、興が乗ってきたのに不粋な」

機嫌を損ねたプラーガさんは、苛立ちを隠さずに声がした方へと振り向きしました。

そして、プラーガさんはギョツとします。

振り向いた場所に居たのは、プラーガさんに駆け寄ってくるゴブリンでした。プラーガさんにはゴブリンの区別など付きませんが、彼が来た方角からして、先程スライム達の様子を見に行かせた個体と思われまます。

ところが彼は、その右腕を失っていました。

残った左手で切断面を抑えています。紫色の血がぶじゅぶじゅと音を立てて噴き出ています。魔物の多くは人間よりも生命力に優れています。これほどの怪我となれば十分に致命傷です。手当てをしなければ、このゴブリンの命は間もなく潰えるでしょう。

「プラーガ様ア……タ、助けテ……」

「あ、ああ。任せておけ」

ゴブリンの懇願に、プラーガさんは治癒魔法で応えます。基本自分の利益しか考えていない魔物にとつて、死にかけの魔物を助けるなどあり得ない行為です。

しかし今回は、このゴ布林から話を聞く必要があります。何しろ基地内で、兵士の一人が致命傷を負ったのです。野放しにすれば軍全体に影響するかも知れません。

「出血は止めた。どうした？ 何があった？」

「ハ、ハヒ……スライム、ガ……スライム、ニ、襲ワレ……」

「何？」

スライムに襲われたとはどういう事か？ プラーガさんには分かりません。確かにゴ布林は決して力の強い魔物ではありませんが、スライムはそれ以上に貧弱な魔物です。

更に詳しい話を聞く必要があるでしょう。

「ヒツ、ヒイイイイイイッ!？」

ところがゴ布林は、急に半狂乱となってしまうました。

「おい、どうした？ 何があった」

「ヒイイイ！ 食ベナイデ！ 食ベナイデクレエ！」

プラーガさんの言葉が耳に入っていないのか、ゴブリンは悲鳴を上げながら後退りをします。プラーガさんはゴブリンの視線を追い、彼が恐れ慄く存在を確認しようとした。

「ぼよちゃん」

しましたら、そこには一匹の謎生物が。

現れたのは不定形の下半身をぼよんぼよんさせながら動く、ぼよぼよちゃんでした。ぼよぼよちゃんは相変わらず能天気な顔で、ゴブリンと、プラーガさんを交互に眺めます。

相対するプラーガさん、顔を顰め、困惑したように瞬きをしました。

最初ぼよぼよちゃんをスライムの変種かと思ったプラーガさんでしたが、魔力を感じ取れなかったため違うと判断します。どんなに脆弱な魔力でも、魔力は持っているからです。むしろ魔力を持つからこそ、魔力と呼ばれるというべきでしょう。

魔力でないなら、ただの動物でしょうか？ とてもそうは思えません。ぼよぼよちゃんの形態は明らかに一般的な生物から乖離しているのですから。

正体不明の生命体にプラーガさん、僅かに怯みます。

しかし、本当に僅かでした。

「(スライムもどきか何かは知らんが、魔力もないような生物だ。この私の敵ではない)」



プラーガさんは不敵に笑います。オークのように巨体から繰り出されるパワーこそが恐ろしい種も多々いますが、基本的には魔力の強さこそが魔物の強さです。全く魔力のない存在に、どうして怯む必要があるのでしょうか？

「貴様が何者かは知らぬが、この私の陣地に土足で踏み込むとは良い度胸だ。後悔する間も与えんぞ」

プラーガさんはその手に魔力を集め、禍々しい光を放ち――

「ギャツ」

不意に、ゴブリンが悲鳴を上げました。

その時思わずゴブリンの方に、プラーガさんは目を向けました。ぼよぼよちゃんがあまりに弱そうなので、目を逸らしても大丈夫と思っていたのかも知れません。

そのためプラーガさんは、隣に居たゴブリンが別のぼよぼよちゃんに飲み込まれる光景を目の当たりに出来ました。

「……………?!」

プラーガさんは慌てて飛び退きます。

新たに現れたぼよぼよちゃんに襲われたゴブリンは、片手を失っていた事もあり、呆気なく全身を包み込まれてしまいます。もう彼は助かりません。そこには満腹になり、幸せいっぱい転がるぼよぼよちゃんが居るだけです。

「な、なんだコイツは!? 人間側の味方なのか!？」

最早敵である事は明白。プラーガさんは自分の置かれた状況を把握しようと拠点全域に意識を向けます。

そして凍り付きました。

拠点内の魔力が、どんどん減っていたのです。逃げ惑う魔力が消え、荒ぶる魔力が消え、抑えていた魔力が消え……残すは僅か。おまけにどれもが弱々しく、頼れるほど大きな魔力は何処にもありません。

いえ、頼りないほど小さな魔力すら、プラーガさんの周りには居ませんでした。

「ぼよ」

「ぼつよぼつよー」

「ぼよよー」

代わりに、続々とぼよぼよちゃん……いえ、スライムさんが姿を表します。ひとり、ふたり、さんにん、じゅうにん、にじゅうにん……

プラーガさんの周りは、すっかりスライムさんだらけになっていました。スライムさん以外の魔物は居ません。何故なら他の魔物達は、スライムさん達が食べてしまったのです。食べた分だけ増えていき、次々と他の魔物に襲い掛かり……今では逃げ遅れた臆病者が僅かに残るだけ。

そしてプラーガさんと他の魔物の区別なんて、スライムさん達には付きません。

誰もがプラーガさんを見て、にんまりと微笑みました。

「う——うおおおおおっ!」

身の危険を感じたのでしょうか、プラーガさんは叫び声を上げながら魔力を高めます。

普通の魔物であれば、プラーガさんが発する魔力の大きさに怯み、戦意を喪失する事でしょう。されどぼよぼよちゃん達は魔力を感じ取れないどころか、恐怖という感情さえも失っています。巨体だろうが強かろうが、見付けたごはんは食わねばならないのです。

プラーガさんが動いたのを見るや、スライムさん達は一斉に跳び掛かりました。策などありません。スライムさん達が暮らしていた島では、考えなしの突撃こそが最良の捕獲方法なのです。

そのあまりの無策ぶりは、却ってプラーガさんを追い詰めます。魔族は高い魔力を持ち、恐るべき魔法の使い手ですが——その強力な魔法を使うためには、呪文の詠唱が必要なのです。

四方八方から流れ込んでくる相手と戦うには、決定的に向かない力でした。

「うおあっ!?! や、止め、がぼっ!?!」

迫り来る青色の津波を前にして、一瞬怯んでしまったプラーガさん。まともな魔法を一発と撃てないまま、腕を吞まれ、足を吞まれ、頭を吞まれてしまいました。口を塞がれただけでなく、魔法を撃つための手先が吞まれては、自爆の可能性もあり魔法は使えません。いえ、使おうと思えば使えますが、それには相応の覚悟が必要でしょう。

スライムさんにそんな迷いはありません。

プラーガさんはぼよぼよちゃん達スライムさんにとって、少しばかり大きなごはんです。しっかりと皮膜を広げればギリギリ丸呑みに出来たかも知れませんが、プラーガさん自身が動き回り、何より他にもスライムさんがたくさん居る状況。悠長にしては食いつぶされる、せめて一口だけでもと、無数のスライムさんがプラーガさんの身体の一部だけを包み込みました。

さて、このまま消化するのは非効率です。口を閉じきっていない状態では包み込んだごはんが引きずり出されるかも知れませんが、消化したものが溢れる危険性もあります。

出来る事なら、丁度良いサイズに小分けしたいところ。

そこでスライムさん達は皮膜から、本来は消化液を注入するための棘を必要以上の長さで数伸ばし、プラーガさんの身体に突き刺しました。

そして力いっぱい——身体を大回転！

これは『テスロール』と呼ばれる、ある種の生物が獲物を食い千切る時の動作と同じものでした。スライムさん達は時折島に流れ着く自分よりも大きなごはん……船をも沈める巨大魚やクラークンの死骸を食べるために、この技を進化の中で体得したのです。

プラーガさんは生きていましたが、スライムさんには関係ありません。生きたまま四肢をもぎます。嘔き出す血の臭いに惹かれて更にたくさんのスライムさん達が群がり、胴体をちまちまと引き千切っていききました。飛び出した内臓も美味しくいただきます。

プラーガさんは痛みで悲鳴を上げたりはしません。とうの昔に、頭を捻じ切られていたからです。ごはんにする動物の苦痛云々なんて高尚な考えはスライムさん達にはありませんが、食べ物を捌り殺すなんて悪趣味な考えもありませんでした。

かくしてプラーガさんは、跡形もなくスライムさん達のお腹に収まります。たくさんのスライムさんが満腹感を味わい、幸せそうにころころと転がりました。ですがスライムさんは他にもまだまだたくさん居ます。たくさん増えたのですから。

プラーガさんを食べられなかったスライムさん達は、次のご飯を探して歩き回ります。一人たりとも逃しません。

そしてこの部隊の司令官は、もう居ません。

退却命令も出されぬまま、夜は更け、明けていき――

かくして平野は、大変静かになりました。

魔物達の軍勢はおろか、運び込まれた兵站もありません。代わりに存在するのは、青くてぼよぼよした生き物だけ。

何千にも増殖したスライムさんが、平原の一角を埋め尽くしていました。

「ぼよよ。ぼよよぼよよ〜」

そんな無数のスライムさんを生み出した最初のひとり……ぼよぼよちゃんは、たくさん仲間を増やせて満足していました。

幸福感でぼよんぼよんしている最中、平原に居るスライムさん達の三割ほどが、移動を開始します。新たな食べ物を探しに行ったのです。目指す場所は……おやおや、此処に集まっていた魔物が狙っていた都市アマイアでしょうか？ アマイアは商業都市です。たくさん人間と彼等が消費する食糧があります。あのスライムさん達は、しばらく『ごはん』には困らないでしょうね。

仲間達が移動したのを見て、残ったスライムさん達の何割かが別方向へと旅立ちます。更に残ったスライムさん達も別方向に……どんどん散り散りになっていきます。

消化・吸収が終わり、分裂したぼよぼよちゃんも、周りに仲間が居なくなつたのを見て、移動を始めました。

仲間がたくさん増えて、ぼよぼよちゃんは幸せになりました。しかしその幸せは一時のものでしかありません。満腹になってもいずれ空腹が訪れるように、スライムさん達の繁殖欲求も時と共に再燃するのです。

誰も行っていない方へ、誰も手付かずのごはんを求めて、ぼよぼよちゃんは動きます。もつと、もーつと、栄養のために。

# ぽよ〜♪

魔物の軍勢を食べ尽くし、仲間と別れてから数日後。ぽよぽよちゃんは不思議な場所に辿り着きました。

そこは、たくさんの緑に覆われた場所でした。とても大きな棒が何本も立っていて、遠くが見渡せません。たくさんのごはんの匂いもして、ぴーぴーきーきー、聞いた事のない音もたくさん聞こえてきました。

此処は人間達が森と呼んでいる、たくさんの植物が生えている土地です。雑食であるぽよぽよちゃんにとって植物はごはんであり、ごはんが視界を埋め尽くしているようなものでした。

もしもこの植物を食べ尽くしたなら、どれだけ仲間を増やせるでしょうか。

「ぽよー・ぽよ、ぽよぽよぽよー」

ぽよぽよちゃん、興奮のあまりダツシユ。強靱な足腰が生むスライム種離れした脚力は、恐るべきスピードを発揮します。大体、大人が走るぐらいの速さです。

ぽよぽよちゃん、早速近くにあった朽ち木に齧り付きます。皮膜を伸ばして包み込み、手頃なサイズに砕いてから皮膜を閉じて、たっぷり消化液を出してスープにしよう



とします。

実は木材というのは、ごはんとして利用するのが難しいものなのです。その理由は、木材に含まれる物質であるリグニンにあります。このリグニンは木材の二十〜三十%を占める主成分で、非常に安定的なためごく一部の菌類を除いて分解が出来ません。つまり、消化・吸収が非常に難しいのです。他にもセルロースという分解が難しい炭水化物も多量に含んでおり、木材というものは普通の動物では殆ど消化出来ません。流石は地表面をことごとく覆い尽くし、生態系の最下層という名の最大バイオマス量を誇る惑星の支配者だけがあります。

さて、ぼよぼよちゃんはこの強力な支配者にどう立ち向かうのでしょうか？

答えはシンプル——多種多様な消化酵素をやたらめったにぶちまける事です。

何百種もの消化酵素を当てて、上手く反応した数種の酵素に木材を分解させます。なんとも強引な方法ですね。しかしこれもまた、ぼよぼよちゃん達スライムさんが辿った進化に理由があります。スライムさん達は島に流れ着いたものをなんでも食べてきました。そういったものの大半は生き物の死骸で、よく分からない雑菌が大繁殖している可能性が大了。そして繁殖した雑菌達は、時折とても危ない毒素を作る事がありません。

こうした毒素はどんな雑菌が繁殖したかによって変わるため、どの毒に当たるかは食

べてみるまで分かりません。特定の毒に耐性を持つという方法では対抗出来ないのです。そのためスライムさん達の進化は、手当たり次第に酵素を当てて解毒を行うという強引なものとなったのでした。非常にエネルギー効率の悪い食事の仕方ですが、消化液はスープ化したごはんと共に回収するため、損失は最低限に抑えられます。かくしてスライムさんは、食中毒への『耐性』を獲得したのです。

……というように本来は食中毒対策の進化が、木材の分解にも役立つたのでした。尤も、あくまでこれは雑菌対策であり、材木を食べるためのものではありません。中々消化は進まず、ごくんと飲み干すのに十数分と掛かってしまいました。

げぼよ、と、げつぷを出したぼよぼよちゃん。ちよつと疲れてしまいました。一休みとしてぼてんと座り、ぼんやりと空を眺めます。

そうして暢気に休憩していると、ガサガサと落ち葉を踏み締める音が聞こえてきました。なんだろう？ ぼよぼよちゃんは音がした方をじつと見ます。

しばらくすると茂みを掻き分けて、大きな弓を構えた生き物が現れました。

一見すれば、その生き物はとても人間に似ています。金色の髪を携え、細身ながら引き締まった筋肉を持ち、凛々しく端正な顔立ちをした女性です。ですがその端正な顔の横にある耳は人間のものよりずっと長くて先が尖り、紺碧の瞳には人間と異なつて瞳孔が見られません。よくよく見れば、人間とは全く異なる生き物だと分かるでしょう。

彼女はエルフでした。エルフとは人類との共通祖先から数百万年前に分岐し、独自の進化を遂げた種です。森林環境に留まり、森に適応した原人が祖先なのです。尤も、古生物学や進化生物学が殆ど発展してないこの世界において、その事実は人間どころかエルフ本人も知らないのですが。

そんな人類の親戚であるエルフ——シャーリーさんは、ぼよぼよちゃんを見て肩を竦めました。

「……結界を抜けて侵入してきた奴がいたから来てみれば、なんとも変な奴だな」

シャーリーさんはぼよき、ぼよぼよちゃんをじつと観察しながら首を傾げます。エルフはとても排他的で、森に結界を張る事で侵入者を常に見張っています。何時もなら子供のエルフを攫いに来た人間や、欲深な魔物が侵入者なのですが……此度の侵入者ぼよぼよちゃんは、初めてお目に掛かる生き物。どんな生物なのか興味があるようでした。

対するぼよぼよちゃんの方ですが……シャーリーさんには気付きましたが、あまり関心はありません。何しろ森の中は食べられるものがいっぱいなのです。ちよつと離れた位置に居るエルフより、すぐ傍に生えているキノコの方が気になりました。頑張ってキノコを引っこ抜き、総出入口へと押し込みます。

その姿は、子供が大きなおやつを一生懸命食べようとしているかのようです。

「……取り立てて、警戒するほどの脅威ではない、か」

遭遇者に対してあまりにも無防備な姿に、シャーリーさんは弓を下ろします。排他的なエルフではありませんが、自然崇拜の信仰を持つているため動物には優しいのです（というよりその信仰のせいで自然破壊をする他の知的生物を嫌っている、と言うべきでしょう）。ぽよぽよちゃんは魔物ではなく、余所から入り込んだ野生動物と判断されました。割と本質を言い当てています。

かくしてシャーリーさんは、森の奥へと戻っていきます。

ぽよぽよちゃんはシャーリーさんが去った事にも気付かぬまま、キノコをもごもご食べていきます。木よりはいくらか消化に優しいですが、栄養価が低く、数も多くありません。

増えるためには、もっと良いごはんが必要です。

手当たり次第口にものを運び入れながら、ぽよぽよちゃんはどれがどんな食べ物なのかをしっかりと覚えます。

大繁栄の道も小さな一歩から。

自分の願いを叶えるため、ぽよぽよちゃんは真面目にごはんを食べるのでした――

それから、大体一ヶ月ほどの時が流れました。

この一ヶ月、ぼよぼよちゃんは森で暮らしていましたが……中々数を増やせずにはいました。

理由の一つは、森の中の動物がとても手強い事。

ぼよぼよちゃん達スライムさんは、実は瞬発力に欠けるといふ弱点があります。そのため草食動物や小動物達は襲おうとすると逃げられてしまい、肉食獣が相手だと素早く攻撃されてやられる事が多々ありました。人間や魔物は奇襲状態で、尚且つスライムだという油断を誘えましたが、自然にそんな甘っちょろい謀略は通じないのです。

そしてもう一つの理由は、良質なごはんが不足していた事です。

スライムさんは材木の分解が出来ます。ですがあくまで力押しであり、効率的な食べ方ではありません。食事に多大なエネルギーを消費し、時間も掛かります。そうして頑張つて分解しても、得られる栄養素の大半は糖類。タンパク質やその原料となるアミノ酸など、身体の材料となる物質はほんの僅かしかないので。流石は地上生態系の支配者、性根がひん曲がっているとは思えない意地悪な栄養バランスですね。おまけに、植物の中にはスライムさんが生成する数百種の酵素をすり抜ける毒素もあり、死んでしまふ個体も多数いました。小動物の中にはそれら植物毒を溜め込んだものも多く、動物でも安全なごはんとは限りません。

この森に棲む動物達の多くは、極めて限られたものだけを餌としています。これは他

種との競争を避けるなどの理由もありますが、何より他種が発達させた防御機能を破るためには相応のエネルギーが必要になるからです。万能とは言い換えれば中途半端。なんでも食べられるというスライムさんの生態的長所は、この森の中では非効率の典型でした。

自然に容赦はありません。非効率で不適応な種はすぐに淘汰されてしまいます。外来種故今までは獲物の警戒心が緩めで、捕食者は怪しがつて近付きませんでした。ポーナス期間はそろそろ終わりです。接触が増えた事で獲物からは危険な敵と認知され、捕食者からは弱い獲物とバレル頃でしょう。

さて、このままでは全滅してしまうだろうスライムさん。

しかしそこは過酷な環境で進化適応した侵略的外来生物。このまま大人しく定着に失敗するような、柔な生態はしておりません。

「ぼーよぼーよ、ぼっぼっぼよぼよー」

森で暮らすスライムさん——ぼよぼよちゃんは今日も元気に歩いていました。時折落ち葉を拾い食いしつつ、ごはんを探します。

やがて一本の、大きな倒木を見付けました。

倒れてからまだまだ日が浅いようで、キノコ一本生えていません。皮の下はまだまだ頑丈な状態で、デスロールで捻じ切るのはむずかしそうです。包み込もうにも流石に大

き過ぎます。

仕方なく、ぼよぼよちゃんは口からだばーつと消化液を吐き出しました。削り取れないなら、液状スープにして嚙れば良いと判断したのです。出来上がったスープが零れて地面に吸われると回収不能になるので、あまり理に適った方法ではありませんが。

そもそもぼよぼよちゃん達スライムさんの消化酵素では、木材の分解には時間が必要です。量もたくさん使います。こんな非効率な食べ方では、森林生物との競争には勝てません。

——ただし、かつてのままでは、という文言が付きますが。

なんとという事でしょう。ぼよぼよちゃんの消化液を浴びた倒木が、見る見るうちに溶けていくではありませんか。じゅわじゅわぶくぶくと泡を吹き、透明な消化液が枯れ色に染まっていきます。それは木材の栄養がたつぷりと溶け込んだ、倒木スープでした。

ぼよぼよちゃんは出来上がったスープを嚙り、取り込んでいきます。リグニンやセルロースが分解された結果、糖質を多量に含んだ甘ったるいスープ。アミノ酸やタンパク質は僅かですが、そこは量で補います。

そうです。一月もの森林生活を経て、ぼよぼよちゃんは木材の効率的な摂取が可能となったのです。

実はぼよぼよちゃん、この森を訪れた時と比べ、消化液にある変化が起きていました。

変化と言っても、大それたものではありません。消化液に含まれる食中毒を分解する酵素を減らし、木材の分解に有益な働きをする酵素の比率を増やしただけです。これにより、木材の分解がよりスムーズに行えるようになりました。簡単に言えば、体質が森林生活に適したものと変化したのです。

では、何故ほよぼよちゃんの体質は変化したのでしょうか？

これはスライムさん達の、というよりもスライム種全体の特性が関係しています。実はスライム種は、一つの個体内に複数種の遺伝子が存在しているのです。例えるなら、単細胞が何十億と集まって活動している状態、でしょうか。統率の取れた活動が不可欠な高等臓器を持たず、複数の細胞が塊になって分かれる分裂増殖だからこそ持てた性質です。

そんな訳でスライムさんの身体には複数種の遺伝子がありますが、ここで自然淘汰が加わります。

摂取した食べ物を分解するため、その分解に適した遺伝子を持った細胞がより増殖し、適していない遺伝子の細胞は減少していくのです。そうすると段々と全身の遺伝子比率が変化し、体質が変わります。ちなみに減ってしまった遺伝子は、適応した遺伝子を作り出した栄養の一部を利用するため中々『絶滅』しません。仮に何種かの遺伝子が絶えても、紫外線や毒物、分裂時のコピーミスなどによる変異で新たな遺伝子が日夜作



られています。このように多様性もしっかり担保しているので、環境がしつちやかめつちやかに激変しても、ちゃんと追随出来る仕組みになっていくのです。

——さて、スライムさんが環境に合わせて体質を変えられるという事は、日に日に森林環境に適応しているという事でもありません。

エルフの森の生態系は、いよいよ淘汰圧を強めるでしょう。ですが既に手遅れです。ぼよぼよちゃん達は、森で最大のバイオマスを誇る植物を利用出来るようになったのですから。

「ぼよ～ぼよ～ぼよ～」

倒木を食べ、十分に大きくなったぼよぼよちゃんは分裂を始めます。再び食べ物を摂取し、大きく育つほどに、その身体はより木材の分解に適したものへと変化します。

そして、それは他のスライムさんも同じなのです

ここ数日急速に数を増やし始めた、他のスライムさん達にとつても——

## ぼよよっ

ある日の夜の事。

「……森が騒がしいな」

エルフのシャーリーさんが、ぼつりとぼよよきました。

此処は森の奥深くにある、エルフの村。草と蔦で作られた素朴な家々が、巨大な木の上に幾つも建っていました。

この森にはエルフの集落が四つあります。集落同士の仲は、悪くはありませんが、良くもありません。厳しい自然界で暮らす彼等は、食べ物不足などで割とよく集落間抗争をしているのです。そのためエルフ達は集落がある巨木のとつぺんに見張りを置き、常に周囲を警戒する決まりとなりました。

今日はシャーリーさんが見張りに立つ日。そのため彼女は森を眺めていたのですが、エルフの優秀な耳は森の奥の音をしっかりと捉えていたのです。

嚙猛な大型獣の悲鳴、木々が倒れる音、跳ね回るような足音。

いずれも、普段の森ではあまり聞かれないものでした。それが森の至る所から聞こえてくるのです。森で何か、おかしい事が起きているのは明白でした。

「シャーリー、どうする?」

「……何人か、森を見に行かせよう。ただしあくまで偵察だ。危険を察知したらすぐに逃げて村に知らせる」

「そうだな。よし、何人か暇そうにしている奴を見繕おう」

共に見張りをしていた仲間に方針を伝え、仲間はその意見を受け入れました。見張り台からするりと降り、仲間のエルフは集落へと戻ります。

シャーリーさんは高台に一人残されましたが、監視を緩めはしません。自分が目を離れた瞬間、何かが起きるかも知れないからです。

その懸念は見事当たりました。

集落のある巨木を囲うように生えている木々の一本が、突如として傾き始めたのです。メキメキと悲鳴のような音を鳴らし、呆気なく倒れてしまいます。と、その衝撃で吹き飛ばされたのでしょうか、木に張り付いていた何かが、何十と辺りに散らばりました。

それはぽよんぽよんとした、半透明な生き物。

スライムさんです。森で起きている騒ぎも、彼女達の仕業でした。森林生活に適応した結果、加速度的に個体数を増加させたのです。ぽよんぽよんとした怪物が、森の何もかもを食い尽くそうとしていました。

森に住まうエルフとして、この異変を見過ごす訳にはいきません。ましてや一度はスライムさんを見た事があるシャーリーさんならば尚更です。

「ちっ……以前見た時は無害だと思っただが、このような騒ぎを起こすとはー！」

見張り台から跳び下り、枝へ枝へと移りながらシャーリーさんは地上に下りていきます。人間にはとても出来ない凄技ですが、森で一生を過ごすエルフの中ではちよつと凄い身軽さに過ぎません。

異変に真つ先に気付いたシャーリーさんに続き、次々と大人のエルフ達が地上へと降り立ちました。総勢十七名の少数精鋭です。

そしてエルフの登場に、木を押し倒したスライムさん達も気付きます。何百という数の顔が、一斉にエルフ達の方へと振り返りました。ひとりひとり可愛くても、ここまですれ集まれば流石に不気味です。集まったエルフ達の誰もが表情を強張らせました。

「なんだこの生物は!? 森にこんな動物が……」

「……一月ほど前、あれの同種らしき奴が森に入ったのを確認している。だが、無害な動物だと思つて見逃してしまつた。全て私の責任だ」

「責任の追及は後にしろ。向こうはやる気だぞ」

シャーリーさんは自ら『罪状』を告白しますが、集まったエルフの中の年配者さんがぼそりと告げました。

別に、スライムさん達にやる気などありません。ただ、ごはんを見付けて、ちよっと興奮しただけです。

我慢なんて知らないスライムさん達は、エルフ達目掛けて一斉に駆け出しました。

「来たぞー！ 迎え撃てー！」

年配者さんの掛け声に合わせ、エルフ達は一斉に弓を構え、スライムさん達に矢を放ちます。

エルフの弓矢は非常に強力です。森に棲む獣達の分厚く柔軟な皮を貫くため、人間が使うものより数段発展しました。放たれた矢は高速で回転し、獲物の肉を引き込みながら切り裂くのです。鋼鉄の鎧でも薄い所なら粉碎するほどの威力があり、また真つ直ぐ、長距離まで矢が飛んでいきます。戦争をすればエルフ一人に人間十人が倒されるといふほど、エルフの弓矢は優れていました。

その凄まじい威力は、スライムさん達の頑丈な皮膜をも貫きます。ゲル状の中身がぶちまけられ、辺りが青色に染まりました。流石のスライムさんも身体の一部が吹き飛び、中身の多くが出てしまつては生命活動を維持出来ません。次々とスライムさん達は打ち倒されていきます。

ですが倒しても倒しても、スライムさん達が止まる事はありません。

人間や獣であれば、仲間が次々と殺されたなら、恐怖や警戒心を抱くところでしょう。

ですがスライムさん達は、恐怖心を退化させてしまいました。同族意識なども持つていません。仲間の死も、自分の死も、考慮に値しないのです。

個体数に限りがあれば、考えなしの突撃は無策も良いところでしょう。しかし無尽蔵の物量を誇るのなら、それは恐怖の行進となります。無論、スライムさん達にそこまでの考えはありませんが。

「駄目だ！ 数が多過ぎる！ 矢が足りない！」

「こいつ等一体だけにいるんだ！」

「に、西から他の群れが——ぎやあつ！」

後方に新たなスライムさんが現れた事に気を取られたエルフの腕に、ついにスライムさんは飛びつく事に成功しました。素早く皮膜を伸ばして包み込み、消化液を送り込みます。樹木用に調整された消化液は、動物の身体を溶かすのには向いていません。ですが動物には痛覚があります。例え軽度であつても、皮膚を焼かれるような痛みは淡々と立ち向かうなど出来ません。

「痛い痛い痛い痛い!!? ひ、ひ、ひ、も、ごぎやあああああああああ！」

痛みに怯んだ瞬間、雪崩れ込むようにスライムさん達に群がられてしまいます。顔面も皮膜に包まれたので、今頃その顔は醜く焼け爛れているでしょう。死んでしまえば気にする必要ありませんけどね。

さて。戦士を一人失い、エルフ達の戦線は大きく崩れました。スライムさんと違い仲間の死に動揺した事もありますが、矢を構え直す際の隙を補う仲間が減ったのです。

「あ、矢がな、ぐわ！ は、離れ、がぼ!!」

「いやああああ!! 助けて! 助け、あが!」

次々とエルフの精鋭達は倒れ、スライムさんの群れに飲まれていきます。戦局は決していました。このまま戦っても犠牲者が増えるだけです。

決断が必要でした。

「……私が奴等の目を集める! 皆は集落の者達を連れて森を出ろ!」

シャーリーさんは大声で叫ぶや、スライムさんの群れに突撃しました。

突然のシャーリーさんの行動に、エルフの仲間達に動揺が広がりました。ですが既にシャーリーさんはスライム達のすぐ傍まで駆けています。今更連れ戻そうとしても、帰らない者が一人増えるだけ。

エルフ達はシャーリーさんに背を向け、素早く、大木を登り始めました。

シャーリーさんは遠ざかる仲間の背中を見て、小さな笑みを浮かべます。そしてスライムさん達の方へと振り返ると、腰に付けていた短刀を取り出して構えます。

「お前達が何者かは知らんが、見逃したのが私の罪だ……何匹かは私と一緒に地獄まで付いてきてもらおうぞ!」

威勢の良い掛け声と共に、シャーリーさんはスライムさんの群れに突っ込みます。直後、青い体液が飛び散りました。

やがて、赤いものが飛び散るようになりました。

しばらくして、そこにスライムさん達以外の姿はありませんでした。

かくして、エルフの森からエルフは消え、森も消え、代わりにスライムさんが満ちていきました。青くてぽよんぽよんとしたもので溢れた平野が、新たに現れます。

ですが、やがて彼女達は方々へと散っていきます。

そうです。まだ彼女達は満足していません。次のごはんを求め、新たな土地を探し求めます。ぽよぽよちゃんも、そのひとりです。

もつと、もつと、もーつと、ぽよぽよちゃんは栄えたいのですから……



ぼよぼよ!?

エルフの森を食べ尽くし、ぼよぼよちゃん達スライムさんは大繁殖しました。

その数は今やすうじゆうまんにん、いえ、すうひやくまんにんでしようか？ 数え切れないほどの大群となったスライムさん達は、のんびり気儘に、そして適当に拡散していきます。環境なんて選びません。辿り着いた場所が新天地フロントイデアです。

ぼよぼよちゃんも、ぼよんぼよんと流浪の旅を続けます。ある時は肥沃な草原に定着した仲間を見送り、ある時は川に流された仲間を見送り、ある時は大きな鳥のような魔物に攫われた仲間を見送り、先へ先へと進みました。

そうして愉快な旅を続ける事、早一月。

「ぼよぼよー。」

「ぼよぼよー」

「ぼよぼよー。ぼよぼよぼよー」

「ぼよぼよ、ぼよぼよっー」

ぼよぼよちゃん、仲間達と共に何かを見付けました。

それは町でした。ですがぼよぼよちゃんが初めて辿り着いた町、サスウエルとは様子

が違います。町の外に居ても聞こえてくる賑やかな音や声の数々。活気が違います。

もしかすると人間ごほんがたくさんあるかも知れません。

早速、ぼよぼよちゃんは町へと向かいます。此処までの道中を共にしたさんにんの仲間達も、一緒に町へと向かいました。

町は大きな壁（大体十マグクリツトほどでしょうか）に囲まれていましたが、大きな穴も空いていました。その穴は人間達に『入出国門』と呼ばれていましたが、ぼよぼよちゃん達には知る由もありません。

ぼよぼよちゃん達は堂々と穴を潜り、町の中に足を踏み入れました。

直後に起きた大爆発で、ぼよぼよちゃんとふたりの仲間は吹っ飛ばされてしまいました。ひとりに至っては爆発のど真ん中に居たため、全身バラバラ。青い体液となって飛び散りました。

「ぼよーっ。ぼよっ、ぼよー」

爆発の衝撃で、ぼよぼよちゃんのぼよぼよボディが地面を跳ねます。頑丈な皮膚は爆発の衝撃をしかと受け止め、体組織を保護していました。元々、衝撃で駄目になるような高等臓器なんて持っていませんが。

吹き飛ばされたふたりの仲間もころころと転がり、止まってから起き上がります。何が起きたんだろう？ 事態が飲み込めず、ぼよぼよちゃん達はこてんと首を傾げまし

た。

さて、この爆発は何が原因なのでしょうか？

遙か数百マグクリット彼方の塔に理由がありました。その塔のてっぺんに、黒ずくめの男性が居ます。それも二人。一人はその手に双眼鏡を持ち、もう一人は持っていた杖を塔の外に向けていました。

「初弾命中。素晴らしい腕です」

「当然だ。あんな鈍間を外すほど、鈍っちゃいない」

双眼鏡を持っていた男の言葉に、杖を構えていた男が堂々と答えます。

彼等は狙撃手です。遠距離から魔法を放ち、国内に侵入してきた敵を撃ち抜く事を仕事としています。双眼鏡を持った男が観測者で、もう一人が魔法を放って攻撃を行うのです。彼等はこうして、国の中に敵……主として魔物が入り込むのを防いでいました。この国では、魔物は見付け次第射殺なのです。大体人間の国は、何処でも似たような感じですが。

ぼよぼよちゃん達は、そんなこわーい人間に見付かってしまったのです。しばらく呆然としていると、またひとり、仲間のスライムさんが爆発で吹き飛びます。

その様を見ていたぼよぼよちゃん、どうした事かいきなり身体をぷくりと膨らませ、丸くなりました。そして地面と身体を接着させ、身体の表面を硬質化させ始めます。

これはスライムさんの防御形態。激しい嵐に遭遇した時に起きる変化でした。この変化では持ち前の細胞分裂を活用して皮膜を素早く角質化させ、通常の十倍もの硬さを発揮します。これにより、普段の姿では乗り越えられない嵐を生き抜くのです。

先の爆風二回から、ぽよぽよちゃんの本能が「すごい嵐が来た！」と判断した事で変化が生じたのでしょうか。この状態のスライムさんは正しく石のように硬く、剣や槍など通りません。

尤も、狙撃魔法の爆発に耐えられるほどの強度はありませんが。

狙撃手の放った魔法が直撃し、最後まで残っていた仲間のスライムさんもバラバラに。残るぽよぽよちゃんは、防御形態です。この姿はとても硬い反面、一切身動きが取れないという弱点があります。最早狙撃魔法を躲す事など出来ません。

しっかりと狙われ、放たれた魔法はぽよぽよちゃんを直撃。硬くなった皮膜が焼き物のように割れ、中から青い体組織が飛び散りました。

「……目標の全滅を確認しました」

「了解。通常の警戒態勢に移行する」

国内に忍び込もうとしたスライムさんの全滅を確認し、狙撃手達は安堵したように息を吐きました。杖を下ろし、再び周囲を警戒します。また、本当に死んだかの確認をするため、他の兵士達に死亡確認を行うよう、魔法の道具で連絡を入れました。

塔の中から数人の兵士達が出てきて、ぽよぽよちゃん達の下へと向かいます。とはいえスライムさん達は全員バラバラのぐちゃぐちゃ。死んだふりが出来るような状態です。ありません。兵士達の顔にやる気はなく、駆け足ではありませんが、全力疾走ではありませんでした。

——もしも急いで向かえば、気付けたかも知れません。

バラバラになったぽよぽよちゃんの身体の欠片……その下でもぞもぞと動くものがありました。もぞもぞはぽよぽよちゃんだった欠片を押し退け、外へと出てきます。

それは、ほんの五クリットほどにまで縮んだぽよぽよちゃんでした。

そうです。ぽよぽよちゃんはまだ生きていたのです。ですがぽよぽよちゃんはバラバラになり、中身の体組織をぶちまけています。このぽよぽよちゃんは、一体なんなのでしょう？

その答えは、先程の防御形態にあります。

スライムさんの防御形態は、表皮を角質化させる事で高い防御力を発揮します。ですが角質化した細胞というのは死んでいるため、二度と柔らかな細胞には戻りません。嵐が止んだ後動き出すには、新たに柔らかな皮膜を作り出す必要があるのです。

ぽよぽよちゃんも防御形態を取った時、既に皮膜の再構成を実施していましたが……実はこの際、自身の体組織を分割するように皮膜を形成していました。硬い殻の中で、

分裂による増殖を行っていたのです。ごはんなんか食べていないのに。

これにはスライムさんの生態が関係しています。大規模な嵐が襲来した時は海が荒れ、死んでしまう魚や海藻の切れ端が多数出ます。島で暮らしていたスライムさんの主な食料は、流れ着いた魚や海藻類。つまり嵐の後は、一時的にですが食べ物が豊富になるのです。

ここで繁殖戦略について考えてみましょう。繁殖に使える資源を十とした場合、ひとりの子供に十の資源を投じて大きくひとりだけ産み落とす場合と、ひとりの子供に一だけ投資して小さくじゅうにんも産み落とす場合。一体どちらが繁殖に有利でしょうか？

大きな子供は、体力があり、死に難いという特徴があります。子供同士の競争でも、大きな身体は有利に働きます。対して小さな子供は、体力がないため死にやすく、子供同士の競争にも弱いのです。ですが環境に恵まれて大勢生き延びたなら、ひとりだけ産む時の何倍もの数の子孫を残せます。

さて、どちらが有利な繁殖方法でしょうか。答えは簡単————時と場合によりません。当たり前ですね。一番良いのは使い分ける事でしょう。

スライムさん達は、その使い分けを進化によって獲得したのです。ごはんが乏しい時は分裂によって大きな子を作り、飢餓に備える。そしてごはんが豊富になる時期は小さ

な子供をたくさん作り、一気に子孫を増やす。その選択を決める最大の因子が、強大な嵐なのです。

狙撃魔法の爆発を嵐と勘違いしたぼよぼよちゃんの身体は、守りを固めるのと同時に繁殖の準備をしていました。撃ち込まれるまでの時間が短かったため、ひとりしか分裂出来ていませんでしたが……ひとり生き残れば十分。

新生ぼよぼよちゃんは、ぼよぼよと歩き出します。小さくて未熟な身体は歩く事すら覚束ず、ころんころんと転がりました。

その拍子に、ぼよぼよちゃんは排水溝に落ちてしまいます。

小さな身体は狭苦しい排水溝を転がり落ち、ぼよんぼよんと跳ね、やがて下水道に辿り着きました。

ぼよぼよちゃん、辺りを見回すと、ぼよぼよと再び歩きます。

どんだん下水道の奥に向けて。この町を中心に目指すように。

頭上から聞こえてくる兵士達の足音なんて、気にも留めずに――

ぽくよくぽくよく

「ぽつよー、ぽつよー、ぽつよー」

小さくなったぽよぼよちゃん、元気に歩いて下水道を進みます。

下水道に辿り着いたぽよぼよちゃんは、早速食べ物を探していました。身体が小さいため、蓄えられているエネルギーは普段の数分の一しかありません。生まれただけでなければ尚更。急いでごはんを食べないと、餓死してしまうかも知れないのです。

果たして下水道に食べ物はあるのでしょうか？

人間からすれば、下水道はとても厳しい環境です。何しろ此処には太陽の光が届かず、土も塵のようなものが積もって出来た塊があるだけ。生えている植物は苔ぐらいなもので、果物などを実らせる高等植物などないのですから。人間がこの場所で長期的に暮らすのは難しいでしょう。

ですが、多くの生き物にとっては違います。

例えばネズミ。彼等は下水道に生息している虫を食べています。虫はとても資源量の多い存在です。虫を餌にする事で、彼等は大繁栄を遂げています。

ぽよぼよちゃんの目の前にも、早速一匹のネズミが現れました。



「ぼよーっー」

ぼよぼよちゃん、獯猛な捕食者として早速ネズミに襲い掛かります。

……が、残念。驚いたネズミは素早く身を翻してぼよぼよちゃんの攻撃を回避。そのまま逃げてしまいました。空振りしたぼよぼよちゃんは、ころりんころりん転がりま  
す。

ごはんが食べられなくて、ぼよぼよちゃんしょんぼり。けれどもすぐに立ち直り、次のごはんを探します。

次に出会ったのは、ゴキブリでした。

ゴキブリはネズミ以上に下水道で繁栄した動物です。彼等の圧倒的バイオマス生物量が、下水道の生態系を支えていると言っても過言ではありません。ぼよぼよちゃんも此処の生態系に参加するならば、是非とも捕まえたい獲物です。

「ぼっよーっー」

渾身の力を込め、ぼよぼよちゃん、ゴキブリに向かってジャンプ。

……残念。ゴキブリは素早くぼよぼよちゃんの攻撃を躲し、逃げていきました。彼等はネズミ以上の被食者。逃げる事は十八番です。

またしても狩りに失敗し、ぼよぼよちゃん、ころりんころりん転がりま  
す。また失敗しちやっただけれど、こんな事ではめげません。すぐに次の食べ物を探します。

その後も、色々な生き物に会えました。蠅、ミミズ、ナメクジ、クモ……しかし捕ま  
えられたのはミミズやナメクジぐらい。それ以外の生き物は中々捕まってくれません。  
人間の子供を喰らい、魔物の軍勢を壊滅させ、エルフの森を滅ぼした捕食者<sup>ブレデター</sup>とは思えな  
い失態続きです。

こんなにも狩りが上手いかないには、勿論理由があります。実はぼよぼよちゃん  
達スライムさんは、小動物の狩りが苦手なのです。

小動物の多くは捕食される側として進化してきました。獰猛な捕食者の攻撃を予想  
し、逃げるための機能が発達しています。対するぼよぼよちゃん、確かに捕食は出来ま  
すが、死骸など動かない相手が主な餌。動き回る小さな生き物を、的確に捉えるための  
進化は起きませんでした。そのため小さくてすばしっこい生き物の捕まえ方が分か  
らないのです。

下水道にはミミズやナメクジもいるので、生きてはいけるでしょう。繁殖も可能な筈  
です。ですがこれだけではぼよぼよちゃんの欲求を満たせません。もつともつと増え  
るためには、小動物以外のごはんが大量に必要でした。

——さて。

ここまでで、ぼよぼよちゃんはたくさんの生き物と出会いました。彼等は一体何を食  
べているのでしょうか？

ネズミやクモは他の昆虫類を餌にしています。ミミズやナメクジは壁面に生えている僅かな苔やカビを食み、ゴキブリや蠅は死んだ昆虫やネズミなどを食べています。ですがこれだけでは、巨大な生態系を支えきれません。もっと大量かつ高品質の食料供給が必要です。

その供給は何が、どんな形で来ているのか。

はい、答えは簡単ですね。何しろ此処は下水道なのですから。

「ぼよぼよ。」

ぼよぼよ歩いていったぼよぼよちゃんも、ついに『それ』を見付けました。

大量の水が吐き出されている、排水パイプです。このパイプは地上に立つ家々が出した生活排水を、ぼよぼよちゃんが居る此処下水道へと流しています。此処にやってきた排水は、やがて郊外にある川へと流されるのです。

そして排水の中には、色々なものが混ざっていました。

例えば残飯。例えば動物の死骸。例えば人の腕……おや、殺人事件でもあったのでしょうか？ 物騒ですね。

ともあれたくさんさんの『ごはん』がありました。しかし一番多いのは——糞でしょう。勿論人糞が大多数です。中には犬猫の糞もあります。

この世界の多くの国では、人糞を堆肥として活用しています。ですがこの町では畜産

が盛んに行われており、そのため家畜の排泄物が容易に入手出来ました。この状況で人糞堆肥を作っても、使い道がありません。与え過ぎれば肥料過多で作物に悪影響が出てしまうのですから。そのため人の排泄物は、川へと流してしまふのが最も合理的でした。

流れてきた糞の多くは沈み、下水を腐らせる一員となります。腐るといふ事は、有機物がたつぷりという事。このたつぷりある有機物とバクテリアを食料に、ハエやカの間が大量発生し、下水道生態系を支えていたのです。

とはいえ、全ての有機物が無駄なく使われている訳ではありません。ハエの仲間が発生しているのは、『下水』の水面付近のみ。下水中には居ません。これは有機物が分解される際、酸素が消費され、水が無酸素状態になる事が原因です。カの子虫は腹部末端にある気門から空気呼吸をしているため、無酸素状態の水中でも生活可能ではありません。下水には流れがあり、泳ぎが下手なカの子虫には暮らし難い場所となっています。そのため下水の底には、手付かずの『糞便』その他諸々が大量に堆積していました。

「……ぼよちゃん……」

ぼよぼよちゃん、じつと排水を眺めます。やがて小さな、人糞らしき欠片がぼよぼよちゃんの居る『歩道』付近へと流れてきました。

ぼよぼよちゃん、すかさず皮膜を伸ばしてこれを食べます。

汚い下水に浸った、汚いものの代名詞である糞は、当然ながら雑菌に汚染されています。ですがご安心を。ぼよぼよちゃん達スライムさんは、元々島に流れ着いた魚などを食べています。死んだ魚なので、当然腐っている事も多いです。

そう。ぼよぼよちゃん達スライムさんは、生體的に腐食傾向の強い生物なのです。無駄に豊富な消化酵素は、腐敗物の雑菌を殺し、消化するための進化の結果。人糞だろうがなんだろうが、スライムさんは食べる事が出来るのです。

食べる事さえ出来れば、糞は汚らしいものから良質な食糧源となります。糞に含まれているのは未消化物の残りカスだけではありません。例えば人糞の場合、消化器官を形成する細胞の亡骸や腸内細菌の死骸、或いはそのものが三割四割を形成していると言われていきます。動物性細胞の塊を、人間は肉と呼んでいます。即ち人糞とは三割以上は肉なのです。

人間の一日辺りの排便量は、動物性・植物性の食べ物をどれだけ取るかによって大きく変わります。この国の場合、○・三〇・四ボツド（重さの単位。成人男性の体重が約六十ボツド前後です）程度です。この都市の総人口は約三万人。つまり一日で約一万ボツドもの『資源』が生み出され、殆ど手付かずで川へと流されている事になります。

ならば、この莫大な資源を独り占め出来たら。

ぽよぽよちゃんの嬉しそうな声が、下水道に可愛く轟きます。

されど地上に居る人間達に、この言葉は聞こえません。

下水道に暮らす、人間に下等と蔑まれてる生き物達だけが、その声のおぞましさを察しました。

そして――

――そして月日は流れ、一ヶ月後。

「ぎやああああああああつ!」

「助けてくれええ!」

眩い陽光が照らす昼の町に、人々の悲鳴が木霊します。

美しい町は火の手に飲まれ、家々の壁にはべつたりと血糊が付いていました。あちこちを兵士が駆け、市民を連れて町の外へ連れて行こうとしています。親とはぐれた、或いは失った子供が泣き叫び、子を失った親達が半狂乱で右往左往しています。

町を満たす惨劇の原因は、町に溢れかえったスライムさんの大群でした。

下水道に流れ着いた人糞を食べに食べて、ぽよぽよちゃんは大繁殖。僅か一ヶ月で、総数にじゆうまん以上にまで膨れ上がりました。最早下水道の生態系は崩壊し、人糞の奪い合いが発生する始末。下水道の底に溜まっていたヘドロ口化した糞便さえも食

い尽くしています。

結果排水される水が綺麗になり、これを怪訝に思った下水道の管理人が兵士達と共に下水道の中へと入り——それが刺激となって、スライムさん達が町に溢れ出したのです。

三万人の町民が暮らす町に、にじゅうまんにんのスライムさんが現れたのです。一対一なら持ち前のタフネスで人間を狩れない事もないスライムさん。この圧倒的多勢に無勢で、人間に勝ち目などありません。

それは塔の上から、スライムさんを狙撃している魔法使い達も同じ。  
「全く……狙い甲斐のない奴等だ」

狙撃手が撃てども撃てども、スライムさんは減る気配もありません。彼が倒した数より、人間を食べ、増える数の方が上回っていました。

「本当です。これなら自分でも、当てられますよ！」

観測者をしていた魔法使いも、杖を持って狙撃します。最早生死の確認すらも不要でした。

そんな彼等が立つ塔の最上階に、ぼよん、と音がします。

狙撃手達の動きが止まりました。ぼよん、という音は止まりません。

ぼよん、ぼよん。





朝日が登る頃には、町からかつての住人は消えていました。

残っているのは、にじゆうごまんにんぐらいになった青くてぼよんぼよんとした生き物のみ。彼女達も、やがてこの場所に飽きて何処かへ旅立つでしょう。

だけどしばらくは、満腹になった幸せに浸るのみ。

町中を、ぼよー、ぼよーという愛らしい声が満たします。

穏やかで、争いのない時間が、町を支配するのです。

ぽよお……

かつて五万人もの人々が暮らしていた町は、今や青くてぽよぽよした生き物に埋め尽くされています。家は軒並み倒され、木々は丸裸。すっかり荒廃しています。

「ぽよよー♪」

「ぽよよー♪」

「ぽよよー♪」

そんな荒野の上を、ぽよぽよちゃんはとっても幸せそうにころころ転がっていました。他のなんにんかの仲間も、一緒にころころしています。

普段ごはんのことばかり考えているスライムさんですが、何かを食べた後、このころ遊びを始める事があります。スライムさん達は遊びと思っっていますが、実際には体の組織の攪拌を行い、取り込んだ物質を全身に満遍なく行き渡らせるための実利的な運動です。厳しい環境の島で進化した結果、『楽しみ』までもが本能に組み込まれているのですね。

さて、そんなころころ運動を続け、先程食べたもの——建物の地下に隠れていた人間の一家です——をきっちり消化すると、ぽよぽよちゃんはむくりと起き上がりま

す。

幸せな時間は、長くは続きません。

ごはんの消化が進めば、それは次のごはんを取り込める状態になったという事。

自分を増やす事が第一であるぽよぽよちゃん達スライムさんは、次のごはんを探し始めます。とはいえこの町は粗方食べ尽くしてしまいました。粘っている子も少なくありませんが、そのごはん探しに同行するのは効率的ではありません。

スライムさん達は自然と、散り散りになっていきます。

ぽよぽよちゃんも、町の外へと歩き出しました。そう、特に何も考えずに。

自分の進む道の先にあるものを、人間達が『亜人の領土』と呼んでいる事など、知りもせずに。

………

………

………

ぽよぽよちゃんは人間の領土から去りましたが、スライムさんは未だたくさん暮らしています。そして彼女達もまた、ぽよぽよちゃんと同じく自分を増やしたいと思っていました。

なので、スライムさんは相変わらず人間の領地で増えようとします。増えるためには

ごはんが必要です。だから色んなものを食べました。それが人の『財産』である事などお構いなしに。

ある時は畑を荒らし。

ある時は家畜を襲い。

ある時は町を滅ぼし。

被害が出れば出るほど、スライムさんはその数を増やし、更なる被害をもたらします。ただ被害が出るだけではありません。畑や家畜が失われれば、食糧が足りなくなりません。町が消えれば交易が滞り、防衛線にも穴が空きます。

ぼよぼよちゃんが大陸に流れ着いてから一年と半年後。人間の社会は、すっかり滅茶苦茶になっていました。

勿論人間達もただただやられていた訳ではありません。兵士を増員し、勇者を集め、駆除を行いました……が、スライムさんの増加を緩やかにする程度の成果しか出ませんでした。何しろただのスライムとは比較にならないタフネス、なんでも食べる食性、無闇矢鱈な適応力……スライムさんは繁殖能力に優れています。初期対応ならば兎も角、十分な数まで増えてしまったスライムさんを人力で駆逐するのは不可能でした。

しかし、座して滅びを待つような人類ではありません。

そして人類は自分達の強みを知っています。

そう、他のどの種族よりも優れた知性があるという強みが……

「ぽっよー」

「ぽよよー」

「ぽよぽよー」

今日も平原で、たくさんのスライムさんがころころ転がって遊んでいました。

いえ、平原というのはちよつとした間違いです。何しろ此処は、元は巨大なトウモロコシ畑であり、今にも収穫出来そうな実が先週まで実っていた場所なのですから。

ですが、今ではトウモロコシの実はおろか、茎の一本すら立っていません。

一週間前、ごはんを求めて流れ込んできたスライムさん達が、みんな食い尽くしてしまつたのです。畑の持ち主である農家の人は泣きながら鋤を持ってスライムさん達を追ひ払おうとしましたが、逆に包囲され、バラバラに引き千切られてしまいました。たくさんのごはんを手に入れたスライムさんは爆発的に増殖し、流れ込んできた時の三十倍近い数であるさんぜんにまで増えていきます。

これは、今此処だけで起きた悲劇ではありません。今や人間の領土内では何処でも起きています、あり触れた惨劇でした。いずれ遊ぶのに飽きた彼女達は、新たなごはんを探し求めて大移動を開始するでしょう。

「……ぼよっ」

そんなこんなで暢気に暮らしていたスライムさんでしたが、ひとりがある事に気付きました。

何処からか、煙が漂ってきたのです。

それは白い煙で、朦々とスライムさん達が群れている場所へと入り込んできました。岩と土と海しかない場所で進化してきたスライムさん達には、火事という概念がありません。煙が満ちてきても、誰ひとりとして逃げようとしませんでした。

それが、運命の分かれ道とも知らずに。

「……ぼよー……」

どろりと、溶けるようにひとりのスライムさんが倒れました。

それを合図とするかのように、次々とスライムさん達が倒れていきます。いいえ、倒れるというのは正確な表現ではありません。本来固形に近い硬さのある体組織が融解し、生命活動を停止していました。つまるところ、死んでいたのです。

どろり、どろり、どろり。次々と仲間が倒れていくので、普段仲間の生死など割とどうでも良いスライムさん達でも、困惑したように辺りを見回していました。ですがスライムさん達に見付けられるような危機は、何処にもありません。そうこうしているとまたひとり、またひとり、どろりと倒れていきます。

時間にして、五分も経っていないでしょうか。

その場に立っているスライムさんは、ひとりも残っていませんでした。三千にもなる集団が、あっという間に息絶えたのです。あまりにも一方的な『殺戮』でした。

さて、スライムさんには何が起きたか最後まで分かりませんでした。知性があれば漂ってきた煙が怪しい事に気付くでしょう。

煙は、ある一方向から流れていました。それはスライムさんが占拠していた場所よりも高いところから来ています。辿ってみれば……五人ほどの人間達が、そこには居ました。

そして彼等の傍には、パチパチと燃えている薪があります。

「……もう良いだろう。消火！」

五人の人間達の中で、最も豪華な鎧を来た人間が指示を出します。火を見張っていた、顔を袋のようなもので包み込んだ四人の人間は返事をする、燃えている薪に水を掛けます。当然、火は難なく消えました。

ほつと一息吐いた豪華な鎧の人間……この五人の中では一番偉そうなので、隊長と呼ぶとしましょう。隊長は一瞬安堵の笑みを浮かべましたが、すぐに真剣な顔に戻します。それからじつと、スライムさん達が居た畑を見つめました。

畑は最初煙に覆われ、あまり見通せない状態でしたが、発生源である火が消えた事で、

徐々に晴れていきます。畑だった場所には動かなくなったスライムさんがびっしりと埋まり、海のように真つ青な光景を作っていました。

この景色を見て、隊長は満足そうに頷きます。袋を被っていた人間達は頭の袋を取り、隠されていた笑顔を見せました。隊長も再び笑みを浮かべ、今度はその笑みを消す事はありません。

何しろ彼等は、この結果を望んでいたのです。

スライムさん達が人間に与えた被害は、途方もないものでした。幾つもの町が消え、このままでは国が消えるのではという予感が、いよいよ現実になろうとしていたのです。ですが人間の武力では、凡そスライムらしからぬ捕食能力を持ったスライムさんを退治するのは一苦勞。群れで襲われれば尚更です。武では勝ち目がありません。

そこで人間達は、自らの長所である知性を用いました。

生け捕りにしたスライムさんを使い、研究を進めたのです。凡そ一年もの月日を掛けた研究は、やがて実を結びました。多種多様な酵素で毒素を分解してしまうスライムさんでも、解毒し切れない毒素を発見したのです。その毒は人間や他の動物にも有害でしたが、人間が見付けた毒の中では、最も量産化しやすく、尚且つ効果的な代物でした。

人間は発見した毒を薪に染み込ませ、その薪を焼いて毒の煙を作りました。この煙は空気よりも重く、地面を這うように進みます。かくして無事畑へと流れ込んだ煙は、見



事その役目を果たしました。さんぜんにんのスライムさんを、呆気なく全滅させたので  
す。それが、先程スライムさん達を襲った惨劇の真相でした。

これだけ効果的に殺傷出来るなら、人間の領土にて大増殖したスライムさんを根絶や  
しにするのも、さして難しい話ではないでしょう。

「よし、この結果をすぐさま国王陛下に伝えるんだ」

「はっ！」

隊長の言葉を受け、四人の人間達は嬉しそうに走っていきます。彼等の喜びは当然の  
ものです。何しろ国土を荒らし回り、数多の国民の命を奪ってきた魔物を、ついに征伐  
出来るのですから。

そしてそれは隊長にとっても同じ事。

「……<sup>おやし</sup>親父、仇は取ったぞ」

この畑の持ち主であった自分の父親に向けて、隊長はしかと報告したのでした。

人間達は勝利を確信していました。確かにそれは圧倒的な力であり、文明という如何  
にも人間らしいものに頼った方法です。スライムさん達の脅威がなくなるのも、時間の  
問題と思われていました。

故に人間達は気付かなかったのです。

自分達が、とんでもない『ミス』をしている事に――

ぼー！ よー！

「なあ、最近あのへんてこスライムをまた見るようになったよな」

とある王国首都・即ち王都の防壁にて、見張りをしていた一人の兵士がそんなぼやきをもらいました。彼が見下ろしている先は、かつては林のあった場所ですが、今では草一本生えていない荒野です。

そしてその荒野を、それなりの数の青い生き物が、ぼよぼよと跳ねていました。

スライムさんです。スライムさんがたくさん棲んでいました。これは大変奇妙な事です。何故なら、人間達がスライムさんを殺す毒を開発してから、今日でかれこれ半年が過ぎたのですから。

毒を開発してから、人間達はあちこちで毒を撒き、スライムさんの駆除を進めました。効果は靦面、なんじゅうまん、なんびやくまんものスライムさんが殺されました。この王都の周りにも毒は撒かれています。そのため一時はスライムさんの姿は全く見なくなつたのですが……彼女達はまた現れました。勿論現れる度に毒を撒きましたが、撒けども撒けども、彼女達は何処からかやってくるのです。今ではすっかり、毒を開発する前と同じ光景が広がる始末。

ぼやいた兵士の言葉を聞き、もう一人の兵士（訳が分からなくなりそうなので、聞き手を兵士B、ぼやいた方を兵士Aとしましょう）は、こくりと頷きます。それからこう話しました。

「ああ、なんでも開発した薬剤が効かなくなってるらしい。薬のお陰で一時はかなり減ったのに、また増え始めたそうぞ」

「は？　おいおい、マジかよ。アイツら解毒魔法は使えないって話じゃなかったか？」

「なんで平気なのかは知らん。学者達も頭を抱えているらしい。確かなのは、今じゃ最初に喰らわせたやつ十倍以上の濃さで薬を撒かなきゃなんない事だけだ。あれ、人間にも危険だから、中毒に備えて魔法使いの同行が必須になったみたいだ。取り扱いを間違えて死んだ奴もいるらしいぞ」

「うへ……そっちの任務はやりたくないねえ。給料泥棒って言われても、ただ外を眺めるだけの仕事の方が良い」

「全くだ……ん？」

兵士Bは、ふと目を細めて遠くを見つめます。それからしばらくして、彼の目が大きく見開かれました。

地平線から、無数の青い生き物——スライムさんが群れていたのです。そして彼女達は真つ直ぐに、兵士達が居る防壁目指して進んでいました。

お腹を空かせたスライムさん達が、偶々見付けた『ごはん<sup>人</sup>』を狙い、やってきたので  
す。

「て、敵襲——ッ！ へんてこスライムが来たぞお！」

兵士Bに続いてスライムさん達に気付いた兵士Aは、大声で叫びながら傍にあつた鐘を鳴らします。

兵士Aの連絡を聞き、たくさんの兵士達が防壁に集まります。門は閉ざされ、出入りが簡単には出来ないようになりました。防壁の前に、スライムさんが無数に集まりません。彼女達はきよろきよろと辺りを見渡しますが、中に入れそうな穴は何処にもありません。

とはいえスライムさん達は諦めが悪いのです。防壁にしがみつくと、下腹部を吸盤のように吸い付かせて登り始めます。これは嵐などが来た際吹き飛ばされないよう進化した形質ですが、防壁のような垂直の壁を登るのにも役立つていました。

流石に進みはとでも遅く、たまにぼろりと落ちている個体も居ます。ですがなんびやくにんものスライムさんが、少しずつですが着実に、防壁を乗り越えようとしています。

尤も、人間達はスライムさん達をたつぷりと研究しています。この程度の事態は想定内です。

集まってきた兵士達は、すぐさまその手に持っていた袋から薪を取り出しました。スライムさんにとって有効な毒を染み込ませた薪です。これを焼き、その煙に含まれる毒素でスライムさんを駆除するのです。

耐性が付いている事は判明していたため、通常よりも高濃度の、初めてスライムさん達に使われたものより十五倍も濃い毒を染み込ませた薪を使います。兵士達が火を付けると、薪からは噴き出すように毒の煙が出ました。

煙の殆どは城壁をなぞるように、外側へと流れていきます。が、一部が兵士達の居る場所で舞い上がりました。

「う、ぐぐ、うう……！」

運悪く煙を吸ってしまった兵士が、胃の中身をぶちまけます。中毒症状です。彼はそのまま倒れてしまい、慌てて仲間の兵士達が彼を煙の中から引つ張り出しました。それからすぐに医務室へと運びます。

確かにこの薬は人間にとっても危険なものでしたが、最初は余程長時間吸わない限り、軽い眩暈と吐き気をもよおす程度のものでした。それが今では一呼吸で昏倒するほどの毒ガスです。

ましたや大量の毒ガスを浴びたスライムさん達は、一溜まりもないでしょう。

「ほよー……！」

能天気な断末魔を上げ、ひとり、またひとり、壁をよじ登っていたスライムさん達が落ちていきます。普段なら弾力のある身体で衝撃を受け流しますが、死んでしまったスライムさん達の体組織はどろどろに溶けています。落ちた衝撃を受け止めきれず、ばかりと弾けて辺りに飛び散りました。

防壁からその光景を目の当たりにしていた兵士達は、顔を顰めながらも勝利の余韻に浸ります。確かに効き目は良くありませんが、それでも確実に駆除は出来ている様子。此度の襲撃は無事乗り切れました

——— と思っていたのです。

「……………」

城壁から地上を見下ろしていた兵士の一人が、気が付きました。

すうにんのスライムさんが、まだ壁から落ちていなかっただのです。変な引っ掛かり方でもしているのでしょうか？ 兵士はじっと見つめました。

やがて彼はその目を大きく見開きます。

壁から落ちていないスライムさん達が、顔を上げて自分の方を見たのです。おまけに、口をにたりと歪ませていました。

そうです。毒ガスを浴びて、尚も生きているスライムさんが居たのです。

そして生き延びたスライムさん達は、猛然と壁を登り始めました。

「い、生きてる！　生きてる奴がいるぞお！　こつちに登つてきてる！」

目撃した兵士の叫びに、場が凍り付きました。兵士達は慌てて武器を手にし、スライムさんを待ち構えます。

「ほっよー」

それから間もなくひとりのスライムさんが、ついに城壁を登りきりました。

もし、この場にスライムさんを研究している学者が居たなら、現れたスライムさんの姿を見て違和感を覚えるでしょう。

そのスライムさんは、普通のスライムさんよりも一回りほど大きな身体をしています。体色も青ではなく紫色でした。何より、随分と興奮した様子で、普段すつとろいスライムさんと違い、そわそわと動いています。

専門家であれば、何かがおかしいと警戒するでしょう。ですが兵士達はそれどころではありません。何しろスライムさんは、人間を食べてしまう、恐ろしい魔物なのですから。早く退治しなければ、誰かが食べられてしまいます。

「たああつー！」

「やあつー！」

故に兵士達の中でも勇猛な若者二人が、躊躇わずその手に持っていた槍でスライムさんを貫く事は、さして誤った判断ではありませんでした。



槍に貫かれたスライムさんは、しかし平然としています。尤もこれぐらいの生態は兵士達も周知済み。このままバラバラにして中身をぶちまけるのが、唯一にして確実な駆除方法です。遅れながらも仲間の兵士達が加勢しようとなりました。

尤も、それよりもスライムさんが大口を開け——もわりと、白い煙を吐く方が早かったようですが。

煙はかなり広範囲に広がり、槍を突き刺していた二人の兵士を包み込みます。助太刀しようとした兵士達は慌てて下がりますが、一人が転び、包まれてしまいました。

「ぐっ!? おい、ぼ(ぼ)ぼ(ぼ)い」

「がひゅ……ぎいー!」

するとどうでしょう。煙に包まれた兵士達は、白眼を向き、泡を吹いて倒れてしまったのです。

「ひいつ!? な、なんだこれはあ!」

「ど、ど、毒だ! アイツ、毒を出したんだ!」

戸惑う兵士の疑問に答えるように、別の兵士が自分の考えを伝えます。

彼の考えは正しいものでした。そのスライムさんには、口から毒ガスを吐く力があつたのです。

そしてその力は、人間が与えたものでした。

耐性の獲得方法は、何も分解だけではありません。スライムさん達は身体の中に小さな『袋』を作り、そこに毒素を一時的に隔離するようになったのです。編み出した当初は器官——隔離器官と命名しましょう——が未発達で、最終的には体内に取り込んでしまう作りでしたが、それでも時間を掛けて取り込めば、持ち前の再生力で復帰が可能です。スライムさん達は体内構造を変化させる事で、薬物への『耐性』を手に入れました。

そうして薬物耐性を獲得し、生き残ったスライムさんは繁殖を始めます。ある程度増え、人間にとって脅威となると、人間達はまた毒を撒きます。ですが今度は耐性があるため、今までの濃さでは効きません。そこで人間達は、毒の濃度を濃くするという方法で対処してしまつたのです。

その安易な選択は、隔離器官が未発達なスライムさんを淘汰し、より発達したスライムさんを選別する結果となりました。生き残ったスライムさんは増殖し、変異を繰り返して更なる進化を遂げます。こうなるといちごっこの始まりです。

そうしてどんどん濃い薬物を身体の中に溜め込めるようになったスライムさん。やがて、ある利点が生じました。毒を溜め込んでいるため、天敵に襲われ難くなったのです。いいえ、それどころか偶然にも襲い掛かってきた動物が隔離器官を破き、中に溜まっていた毒を浴びると、怯んだり、死んでしまう事態も多発しました。

勿論スライムさんは、何故動物が死んでしまったのかなんて知りようもありません。ですが獲得した器官には新たな可能性がありました。

やがて誕生したのが、溜め込んだ毒ガスを吐いて獲物を捕らえる、スライムさんの亜種でした。

この毒ガスは、人間の撒いた毒が大元です。人間が撒いた毒は、スライムさんを駆除するどころか、より凶悪な種の誕生を後押ししてしまいました。それどころか、この毒ガスを吐くスライムさん……仮に、毒スライムさんと呼びましょう……この毒スライムさんには、人間にとって厄介な性質がありました。

毒を撒いても嫌がるどころか、引き寄せられ、興奮するのです。というのも毒スライムさん自身には、毒物を合成する器官がありません。毒は人間達がわざわざ供給してくれたので、わざわざ生成器官を作るより、外界から取り込む方が省コストで有利だったからです。とはいえ毎回運良く、人間達が自分の居るところに毒を撒いてくれるとは限りません。自分から毒に近寄る性質がより適応的となります。

そして最も大量の毒を作り、定期的に使っている場所。それこそが此処、毒の製造元である王都周辺でした。

人間達はこの恐ろしい魔物を、自分達の手で引き寄せてしまったのです。

「ひいひいひい!」

「どンドン来てるぞお!」

兵士を二人ほど仕留めた毒スライムさんに続き、次々と新たな毒スライムさんが現れます。皆、興奮状態です。大量の毒ガスを浴び、元気に満ち溢れていました。

そして目に入るごはん……いいえ、『獲物』達。

毒スライムさん達は、その口から次々と猛毒の煙を吐き出し始めました。

「うわああああつ!」

「毒ガスだあ!」

「ひ、ぎやつ!? あ、た、助けげごぐんごんごん」

吐き出された毒ガスを前にして、そのようなものと対峙する訓練を受けていなかった兵士達は次々と逃げ出します。突き飛ばされ、転び、煙の中に取り込まれた仲間が居てもお構いなしです。『戦線』の崩壊は明白でした。

毒ガスが充満する部屋は毒スライムさんの独壇場です。兵士達の亡骸を食べ、毒スライムさんの繁殖が始まります。毒ガスを撒き散らすスライムさんが、無数に増えていくのです。

そして王都は魔物達の侵攻を防ぐため、強固な防壁でぐるりと囲われています。逃げ場など、ありませんでした。

毒スライムさんの快進撃は止まりませんでした。

防壁を乗り越えた毒スライムさんは、次々と口から毒ガスを吐き、王都を汚染していきまます。常人ならば即座に痙攣し、動けなくなるほどの猛毒に、兵士達は近付く事すら儘なりません。

毒スライムさん襲撃による混乱で起きた火事も、人間達の不利となりました。どれが毒スライムさんの出した毒ガスで、どれが『無害』な煙なのか、分からなくなってしまうのです。消火活動に当たっていた住人が昏倒し、兵士は燃えている家の横を通れず、毒スライムさんは好き放題に暴れる有り様。

勿論人間もただただやられていた訳ではありません。解毒魔法を使える魔法使いを集め、兵士や住人の治療を行いました。ですが毒スライムさんの毒ガス……元を辿れば自分達の作り出した薬は、あまりに濃くなり過ぎました。死ぬまでの猶予が酷く短く、また魔法使い自身が毒を受けると、呪文を唱えられない状態になってしまいます。

そうした混乱の果てに、ついに町の辺境に置かれていた毒の備蓄倉庫に引火。普段なら水魔法の使い手が数人常駐していますが、彼等は既に毒スライムさんのお腹の中でした。

燃えたぎる備蓄倉庫は毒ガス製造器と化し、毒スライムさんに毒の供給を行います。逃げ出そうにも防壁内で毒スライムさんが増殖し、出入り口は毒で覆われる始末です。

誰一人、逃げ出せません。

悲鳴が町中に響きます。子供の泣き声が轟きます。罵声が飛び交い、狂った笑いがか聞こえてきます。それらも、夜を迎える頃には静かになりました。王都に残るのは、ぼよんぼよんと跳ねる生き物のみ。

これは、人間にとつてあまりに大きな事件でした。

人間達は政治によって束ねられ、政治によって安寧を築きました。その政治の中枢が一晩で消失したのです。生産量が減る一方の食糧の分配をどうするのか、兵士の配置はどうするのか。税金の集まる場所は、改正間近だった法は、軍に勤める者達の賃金は。今まで上が決めていた事が、何もかも破綻したのです。

食糧不足を起因とする暴動、目付が消えた事による貴族の増長、賃金未払いによる兵士達のサボタージュ……何もかもが、壊れていきました。人間の武器だった筈の協調性は、最早何処にもありません。誰もが、自分と、自分の家族を守るために必死でした。

しかし力を合わせて立ち向かわねば勝てない相手、スライムさんは、まだまだたくさん暮らしています。

最早人間社会について、語る意味はありません。

あとはただただ内輪揉めを繰り返し、ゆっくりと衰退するだけなのですから――

## ぼよん

さて。人間社会が無茶苦茶になる半年ほど前——人間の領土を出たぼよぼよちゃん、ぼよんぼよんと歩き続けていました。

平原を越え、荒地を進む事数日目のお昼頃……大きな山が見えてきます。

その山は、所謂禿げ山でした。木どころか草も生えておらず、乾燥して白茶けた地面が広がっています。お隣の山には青々とした木々が山体を覆い尽くしているにも拘わらず、です。所々に掘り起こされたような痕跡があり、木で枠を固められた穴が幾つも見えます。

そして穴の近くには、何やら動くものがありました。遠くて形などはよく分かりませんが、確かに動いています。彼等は穴の傍で何かをすると、すぐ穴の中へと戻っていきましました。まるでアリのようですね。

「ぼよーっ」

動いている何かをごはんと思ったぼよぼよちゃん、山へと向かう事にしました。山に迫り着くためには目の前の荒野を越えねばなりません、スライムさんの環境耐性を以てすればなんのそのです。

翌日の朝方。ぼよぼよちゃんは山に辿り着き、その中腹までやつてきました。遠目でアリのように動いていた生き物の姿も、よくハッキリ見えるようになります。

その生き物は人型をしていましたが、人間の半分ほどの背丈しかありません。とはいえその身体は屈強で、全身が筋肉で包まれていました。雌らしき個体でも顔は強面で、雄らしき個体はどれも髭が生えています。

彼等はドワーフという名の亜人でした。主に鉱山で暮らしており、工芸に秀でる種族として有名です。ただしその腕を振るうのは専ら自分達のため。おまけに採掘活動や生活に使う燃料として木々を倒し、禿げ山にするという自然破壊も行うため、自然と共にある多くの亜人と敵対関係にあります。触れ合うと災いに見舞われるとの言い伝えがあるため、人間との仲もかなり悪いものです。しかし気が合わないからと戦争を起こしても、彼等はすぐ山の中に引きこもってしまうため、まるで戦いになりません。今では戦争するだけ無駄と言われるほどです。

結果、大抵の種族と接触がない、非常に排他的な生活をしていました。食べ物には光のない土の中でもむくむく育つ生き物（植物と同じく水と二酸化炭素からデンプンを合成しますが、そのためのエネルギー源は主に熱です。熱合成とも呼びましようか）が主体なため、彼等は殆ど外にも出てきません。こうして地表に出てくるのは、燃料である木々の伐採と、採掘時に出た土砂を捨てる時ぐらいです。



はてさて。そのような事などな〜んにも知らないぽよぽよちゃんは、辺りをきよろきよろしながら堂々とドワーフ達の中へと加わります。突然の見掛けぬ来訪者にドワーフ達は顔を顰めました。ぽよぽよちゃんはお構いなしです。どんどん前に進みます。

そうして偶々正面に居たドワーフに近付きました。彼女は小さな子供でしようか、他のドワーフよりも更に半分ぐらいの背丈しかありません。身体も華奢で、戦士のようにも見える成人女性のドワーフと違い、とても愛くるしい容姿をしています。

ぽよぽよちゃんにとっては一口サイズの、とても美味しそうな女の子でした。

「ぽよー」

「ん？ ……わあ、かわいいー」

装うまでもなく無邪気に近寄るぽよぽよちゃんを見て、ドワーフの少女も無邪気に駆け寄ります。排他的なドワーフも、幼い頃は好奇心旺盛なのです。

無論、心を通わせるつもりなんてぽよぽよちゃんにはありません。射程圏内に収めるや、素早くその身体を伸ばしてドワーフの少女に襲い掛かり

「ふんっ！」

その様を見ていた、屈強な男のドワーフに阻まれました。大人のドワーフはぽよぽよちゃんが魔物の一種であると見抜き、その動向を監視していたのです。

男のドワーフは、その手に持っていた巨大な鈍器でぼよぼよちゃんを殴りました。人間なら頭がぼーんと弾けて、真つ赤な火花が見られた事でしょう。

分厚い皮膚に守られているぼよぼよちゃんはそこまで悲惨な姿にはなりませんでしたが、ぼよんつ、と鈍い音を立てて吹っ飛ばされてしまいました。やがて地面に落ちた身体は、ぼよよんつと大きく跳ねます。弾力のある身体が徒となりました。

ぼよよん、ぼよよん、ぼよよん。あつという間に転がり落ちてしまうぼよぼよちゃん。窪みに嵌まるまで、かなり長い距離を跳ねてしまいました。ドワーフ達の住処は、かなり遠くなっています

「……ぼよー?」

何をされたのか分からず、ぼよぼよちゃんは首を傾げます。ですが難しい事を考えられるほど、ぼよぼよちゃんの頭に中身は詰まっています。

分からなかったので、ぼよぼよちゃんは再びドワーフの住処へと向かいました――

それから、一週間ほどが経ちました。

「ぼよー」

ぼよぼよちゃんは、今日もドワーフ達が暮らす山に居ました。

ぽよぽよちゃんの傍には、ふたりの仲間が居ます。禿げ山でしたが、周りの山から鳥や虫が飛んできたため、それらを食べて増えました。ちなみに今頃、周りの山ではすうじゆうにんのスライムさんが、のびのび暮らしています。

はてさて、ぽよぽよちゃんはこの一週間で、何度もドワーフ達の暮らす場所への侵入を試みました。

ですがいずれも失敗続き。毎回ハンマーで吹っ飛ばされてしまいます。弾力のある身体とハンマーは相性が悪く、早々死にはしませんが、弾かれた身体は彼方へと吹っ飛ばされます。そのため、攻撃は平気で耐えられるのに、まるで近付けないという奇妙な関係が出来ていました。

別段、ぽよぽよちゃんはドワーフに拘る理由もありません。ですが、そこにある『こはん』を無視する、という事も出来ません。何故なら「食べられるものをわざわざ無視する」という高度で戦術的な思考は、天敵なんていない島では不要だったからです。完全に見えなくなれば諦めても、ぽつぽつと小さな姿が見えてしまうと諦められません。諦める、という考え自体が欠けているのです。

今日もぽよぽよちゃんとその仲間達は、ドワーフ達の住処を目指して進みます。太陽が赤く色付く頃には十回目の到着を果たしました。

この頃になると、ドワーフ達もすっかりぽよぽよちゃん達に慣れていました。またお

前らか、と言いたげです。

何時もなら一番近くに居たドワーフが、ハンマー片手に渋々やってくるのですが……  
おや、今日は何やら様子が違います。

現れたのは、ドワーフとしては大柄な体軀の方でした。肉体も、筋肉質ばかりなドワーフの中でも目立つほどのムキムキです。片手に持つハンマーは、他のドワーフの倍近い大きさがありました。

やってきたドワーフ……仮に、マッチョさんと呼びましょう……マッチョさんを前にして、ぼよぼよちゃん達は首を傾げます。

するとマッチョさん、持っていたハンマーを高く掲げて

「ふんっ！」

大きな掛け声と共に、真っ直ぐ振り下ろしました。

ハンマーの行く先には、スライムさんがひとり。寸で避ける、なんて事はしません。攻撃の概念がないため、何をされているのか分からないのです。

マッチョさんのハンマーはスライムさんを脳天から捉え、叩き潰しました。弾力のあるスライムさんの身体が潰れ——行き場をなくした体液の圧力によって、叩かれたスライムさんの身体が弾けました。

青々とした体液が、地面に広がります。同時に、地震のような揺れと、突き飛ばすよ

うか衝撃波が傍に居たぽよぽよちゃん達を襲いました。

「ぽよよよー?」

踏ん張りが足りなかったぽよぽよちゃん、可愛くころころと転がります。どうにか余波を耐え抜いた仲間は、キョトンとしています。マッチョさんはそんな仲間を見逃してはくれません。残ったひとりも叩き潰され、地面の染みとなりました。

助かったのは、ぽよぽよちゃんただひとりです。

今まで難なく追い返されていたとはいえ、ぽよぽよちゃん達スライムさんはこれでも魔物です。何度追い払われても戻ってくる姿に恐怖したのか、鬱陶しく思われたのか。なんにせよ、ついにドワーフ達は実力行使を行う事にしたのです。マッチョさんは、そんなドワーフ達の戦士でした。

幸いぽよぽよちゃんはハンマーが振り下ろされた際の威力で転んで、坂をころころ転がったために難を逃れる事となりました。そのまま斜面に入り、ぽよぽよちゃんは自分の意思と関係なくドワーフ達から離れていきます。

斜面は何時までも続き、ぽよぽよちゃんは麓近くまで戻されました。ぽよんと最後に一跳ねし、ようやく止まったぽよぽよちゃん。目の前でふたりの仲間が殺されましたが、特段何も思いません。ましてや復讐なんて考えてもいません。

とはいえ「食べたいなあ」とは思っているので、中腹に見えるドワーフ達の影を見て、

もう一度山に登ろうとします。が、丁度その時に、傍をひらひらと蝶が飛んでいきました。

「……ぼよーっ、ぼよー」

蝶に気付いたぼよぼよちゃん、今度はそつちに夢中になります。ドワーフも蝶も、ぼよぼよちゃんには大した違いではありません。短い両手をパタパタさせながら、ぼよぼよちゃんは蝶を追い駆けます。

蝶を追い駆け、森の傍まで来たら、もう禿げ山などどうでも良くなってしまいました。目の前にあるたくさんの植物。それもまた食べ物なのですから。

それから一月ほどの間、ぼよぼよちゃんは山で暮らします。

『自分達』が仕込んだものに、気付かぬまま——

## ぼよーん

ぼよぼよちゃんが来なくなり、ドワーフ達の生活は落ち着きを取り戻していました。

排他的な彼等にとつて、魔物や他の種族も大差ありません。ですがぼよぼよちゃん達スライムさんのように、何度も何度もやってくる輩は、不快を通り越して恐怖でした。だからこそ戦士が出てきて、彼女達を退治したのです。

そうして安寧を取り戻してから、三日ほどの月日が経った頃。

「けふ、けほ、げほっ」

外に土砂を捨てに来たドワーフの一人が、痰の絡んだ咳をしていました。彼はドワーフの中でもかなりの高齢で、顔には深い皺があります。咳をする度、その皺がますます深くなつていきました。

「なんだあ、爺さん風邪でも引いたか？」

「けほ……うぬ、ちと昨日から咳が止まらなくてな。まあ、熱はないから、大したもんではないだろう」

老ドワーフの咳を聞き、髪を逆立たせた若者が煽るように尋ねます。しかし老ドワーフが素直に病状を話すと、若者ドワーフは不愉快そうに表情を顰めました。

「けつ、ジジイの言い分なんざ信用出来ねえなあ。移されても困るからさつきと帰ってほしいもんだよ」

そして悪態混じりの言葉を発しながら、老ドワーフが持っていた土砂入りの手押し車を強引に奪い取ります。

老ドワーフは一瞬ポカンとしていましたが、やがて彼の真意を察したようで、にこりと笑いながら「そうするかのお」と答えます。

一部始終を見ていた他のドワーフ達にはやにやとした笑みを浮かべ、若者は顔を赤くしながら辺りを睨みます。無論誰一人として怯む筈もありません。

荷物を纏めて立ち去ろうとする老人に背を向け、若者は老人の分の仕事を黙々とこなしました。

三日後、その老人は亡くなりました。

「……なあ、イザーク。気持ちは分かるけどよお、その……」

ドワーフ達が暮らす、鉱山の深部にて。白熱電球（彼等は発電技術を開発しています）に照らされる道で、厳つい顔をしたドワーフが、言葉を選ぶように目の前の相手を宥めていました。



宥められているのは、髪を逆立たせた若者ドワーフでした。

彼は顔を真っ青にし、汗をだらだら流していました。勿論、周りに居るドワーフに、彼と似たような状態になっている者はいません。誰もが、若者ドワーフに心配そうな眼差しを送ります。

「う、るせえ……げほっ、げほっ！ ごほっ！ せめて、せめて最期に一目、合わせろよ……あのジジイ、昔から、げほっ、ガミガミ五月蠅くて、今、文句を、言わなきや……げほっ、ごっつ、ごぼっ！」

若者ドワーフは咳き込みながら、必死に友人に頼み込みます。友人ドワーフはとても困りました。彼だって、若者ドワーフと同じ気持ちだからです。あの老ドワーフは小五月蠅くて、面倒臭くて、悪ガキだった自分達に何時も真っ正面から向き合ってくれたのですから。

やがて友人ドワーフは、小さなため息を吐きました。

「……一目だけだぞ。あと、葬式が終わったら病院行け。爺さんの風邪、もらってるかも知れないからな」

「ああ……恩に着る……げほっ！ ごほっ！」

ついに根負けした友人ドワーフは、若者ドワーフに肩を貸し、連れて行きます。

きつと一目見るだけでは終わらないだろうなど、薄々諦めながら。

二日後、若者ドワーフが亡くなりました。

友人ドワーフは部屋の隅で布団に包まり、カタカタと震えていました。

時折、痰の絡んだ咳が出ています。

顔は真つ青で、汗がだらだらと流れていました。

それはここ最近、ドワーフ達の間で広がっている病気と同じ症状でした。彼の友人である若者ドワーフが、自分達を可愛がってくれた老ドワーフが、死の間際に患っていたものと同じ症状でした。

そしてその病から立ち直った者は、今のところ誰一人として居ません。

自分にも移っている。死が迫っている。それはとても恐ろしく、彼は昨日から一睡もしていません。寝たら、きつと二度と目を開けられないという恐怖が、自分の胸を満たしていました。

だけど、何より恐ろしいのは。

「ゴゴゴ……」

こんこんと、部屋の戸を叩く音と共に、あどけない男の子の声がしました。この部屋の戸は岩を加工して作った、とても薄くて粗雑な扉です。地下暮らし故部屋の密閉を好

まないドワーフの生活に適した、隙間がちよこちよこ見られる扉でした。

部屋の中の淀んだ空気が、少なからず扉の前を漂っている事でしょう。

「く、来るなあー！」

友人ドワーフは大きな声で叫びます。扉の向こうから、愛する息子の小さな悲鳴が聞こえました。

「ご、ごめんなさい、ぽぽ。でも……」

「アマンダあー！　なんでレイを部屋に近付けた！　アマンダアアア！」

息子の謝罪を掻き消すように、友人ドワーフは妻を呼びます。彼の身体は既にぼろぼろで、叫んだ喉から血が溢れました。それでも、彼は愛する妻の名を呼びます。

彼は恐れていました。息子や妻に、この病が移ってしまう事を。

だから孤独に耐え忍び、彼は部屋に籠もっていました。妻には部屋に近付かないよう、何度も頼みました。なのに、息子が部屋の前まで来ているのです。裏切られたような気持ちになるのも仕方ない事でした。

尤も、

「ぽぽ、あのね……ままが、おひるなのにまだねてて、おきてくれないの。どうしたらいい？」

「本当の絶望は、その愛する息子から告げられました。」

「——あ、あああああ……い、い……!?」

心を満たす黒い色と共に、息が詰まり、視界が消えていきます。息子の声が遠くなつていき、身体が動かなくなりそうです。

やがて、扉を開く音が聞こえました。

家族に看取ってもらえる。

それがこんなにも恐ろしく、悲しく、暗いものだったなんて、友人ドワーフは思ってもいませんでした。

それから時は流れて、一ヶ月後。

「ぼっよ、ぼっよ、ぼっよ」

ぼよぼよちゃんは再び、ドワーフ達が暮らす禿げ山を登っていました。

理由は、森でたくさんの仲間が増えたため、新天地を目指す事にしたためです。ドワーフ達が暮らす禿げ山の周りにある森は、エルフの森ほど過酷な生態系は持っていませんでした。植物は柔らかいものが多く、動物も、肉食獣は野生化した猫ぐらいなもの。スライムさんが蔓延る事は難しくなく、今や森の至る所に分布しています。やがて森が草原となる日も近いでしょう。

勿論ぼよぼよちゃん、そんな難しい事はよく分かりません。ただ、仲間に食べ物を横

取りされる事が多くなり、別の場所に行きたくなつたのです。

さて、そうして登る禿げ山ですが、一月前までと様子が異なります。

ドワーフ達の姿が何処にも見当たらないのです。

ドワーフの事などすっかり忘れているぼよぼよちゃんは気にも留めませんが、本来、これはとても奇妙な話なのです。確かにドワーフ達は普段、山の中にある坑道から出てきません。しかし生活空間の拡張や保全のため、常に大量の土砂が出ます。その土砂を捨てる作業があるため、少なくとも鉱山への入口付近には何人かのドワーフが居るものです。どうしたのでしょうか？

やがてぼよぼよちゃんは、禿げ山の中腹辺りまでやってきました。ドワーフの姿が見えないのなら、足を止める必要もありません。ぼよんぼよんと山頂を、山頂の向こう側を目指して進みます。

「……ぼよん？」

おや？ ぼよぼよちゃんは不意に足を止め、振り向きました。

ぼよぼよちゃんが振り向いた先には、木組みの出入り口がありました。ドワーフ達の住処へと続く場所で、普段は二人の見張りが立っているのですが……今日は誰も居ません。

ぼよぼよちゃんは木組みの出入り口に近付き、ぴよこんと中を覗き込みます。

入口の先は、丁寧に掘られた坑道が続いていました。中は天井にぶら下がる白熱電球がぼんやりと照らし、晴れた日の夕方ぐらいの明るさがあります。ですがやはり、ドワーフの姿は見えません。

代わりに、呻きと、泣き声が聞こえてきました。

ドワーフ達は、坑道の奥深くに引きこもっていました。坑道の奥は彼等の居住区画であり、家族単位で部屋が割り振られています。その部屋の中に彼等は閉じこもり、カタカタと家族で身を寄せ合って震えていました。

そして道端や、静かな部屋の中には、腐敗の始まった死体が転がっています。

ぼよぼよちゃんはこの死臭を嗅ぎ取ったのです。確かにドワーフも生き物であり、エルフほど長命でもありません。いえ、むしろ人間よりもやや短いぐらいです。数千人も暮らしていたなら、年に百人近くは死んでいます。ですが今の居住区に転がる死体は数千近く……暮らしていたドワーフの大半に上りました。

そしてその全員が、一月前から流行りだした病によって命を落としています。そう、ぼよぼよちゃん達がやってきたぐらいの頃から。

その通りです。ドワーフ達に病を運んできたのは、ぼよぼよちゃんでした。

実はぼよぼよちゃんの身体は、無数の細菌に汚染されていたのです。発端は言うまでもなく、人間の町でたらふく汚物を食べた事でした。ぼよぼよちゃん達スライムさんは

強力な消化酵素を持っていましたが、大便などに含まれていた幾つかの細菌は、その酵素を潜り抜け、ぼよぼよちゃん達に感染しました。中には死んでしまうスライムさんもいましたが、そこは無駄に早い世代交代と数の暴力で、どうにかこうにか適応していきます。感染した細菌達も、宿主に死なれては自分も死んでしまうので弱毒化が進みました。

両者は互いに歩み寄るように進化し、十何種かの細菌が、スライムさんの体内に留まるようになったのです。

この細菌達こそが、ドワーフ達を壊滅させた元凶でした。彼等は極めて排他的で、他種族との接触をほぼ断っていました。そのため外界の細菌と触れ合う機会がなく、免疫機能が脆弱だったのです。人間と触れ合うと災いが起きると言い伝えも、かつて人間と接触した事で伝染病が広がった……なんて事が理由かも知れませんか。

それは兎も角。

スライムさんを叩き潰した結果、周囲の土壤に細菌まみれの体液が飛び散りました。それらは地面に染み込み、土の中に混ざります。そして乾燥した土は風や震動で舞い上がり、ドワーフ達の体内へと侵入。パンデミックを引き起こしたのです。閉鎖環境故に伝染病の広まりも早く、ほんの数週間で、山に暮らしていた三千人のドワーフが犠牲となりました。生き残りは、今や死者の半分ほどしかいません。

そして更に数週間後には、ゼロとなるでしょう。

「ぼよよー♪」

亡骸を喰らい繁殖するぼよよした生き物が、見張りのいなくなった門を潜ったので  
すから——



ぼ  
〜

ドワーフの集落を襲い、食べ尽くしたぼよぼよちゃん達スライムさん。彼女達は存分に増え、亜人達の領域に広がっていききました。

そうなるに当然、亜人との接触も増えます。ぼよぼよちゃん達スライムさんは亜人達を襲い、被害を与えました……ところがどっこい、行われた駆除は大したものではありませんでした。精々村に入ってきた輩を、ひとりひとり丁寧に退治するぐらい。何故亜人達はちゃんとした駆除を行わなかったのでしょうか？

これには、亜人社会の特徴が関係していました。

亜人、というのはその呼び名の通り、人に似ている種族を指す、人間側の言葉です。つまり基本的には『人間以外』という意味しかなく、実際亜人達に生物学的・文化的共通点はありません。そのため彼等には纏まりがなく、仲間割れもしよつちゅう起きています。何より個々の種族の勢力は小さく、全員纏めてでなければ人間や魔族と対抗出来ない有り様でした。

これはぼよぼよちゃん達スライムさんにとって、極めて大きな利点でした。

スライムさんは繁殖力に優れており、ひとりかふたり駆除したところで意味はありま

せん。ごつそりと、なんぜんなんまんという数を一気に減らさねば、すぐに元の数に戻つてしまいます。

そのためスライムさんの駆除で成果を出すには、大規模な駆除を可能とする組織力・経済力が必要でした。しかし種族間の纏まりがない亜人達には、これらは到底用意出来ません。仮に用意出来ても、他の種族が文句を付ければ、政治的に止めねばならない時もあります。むしろ敵対種族が襲われている時には、スライムさんを放置する事すらありません。

亜人達の駆除は極めて局所的で、政治的で、その場しのぎにすらなっていないません。スライムさんの繁殖は留まるどころか、殆ど野放し状態でした。

そんなこんなで、半年ほどの月日が流れまして――

「ぼつよ、ぼつよ、ぼつよ、ぼつよ」

「ぼよー、ぼぼよ、ぼよぼよー」

ある日のぼよぼよちゃん、仲間とお喋りをしていました。

ぼよぼよちゃんと仲間が居るのは、とある荒野です。乾燥した地面が地平線まで広がり、草が疎らに生え、木に至っては近くに見当たらないような環境でした。太陽の光がギラギラと降り注ぎ、地表はかなり暑くなっています。小川などもなく、植物に覆われ

てもいないため、とても乾燥した環境となっていました。

一般的なスライムには過酷な環境ですが、そこは独自の進化を遂げたぼよちゃん達スライムさん。分厚い皮膜が水分の蒸発を防ぎ、この地での生存を可能としていました。

とはいえ、問題がない訳ではありません。

気温です。スライムさんが採用している体温調節方法・大気式冷却は、体温より空気の方が低温である事を前提にしている……つまり気温自体が高い場合、体温を下げられないという欠点がありました。元々日陰一つない場所に生息していたためスライムさんの耐熱性はかなり高めですが、この土地はあまりにも暑過ぎます。人間のように『汗』による気化熱式冷却ならばこの地で暮らすのも難しくはないのですが、スライムさんには些か厳しい環境でした。

そこでスライムさんは『知恵』を使いました。

知恵といっても、スライムさんに難しい事は考えられません。道具を作る事も出来ません。

行うのは、情報のやり取り——つまり会話です。

ぼよぼよちゃん達スライムさんには、言葉によるコミュニケーション能力があります。これにより「あつちは他の子あんまりいないよー」とか「あつちに大きいごはんあつ

たー」とか、そういった情報を交換し、生活に役立てるのです。小さな島でも情報のやり取りは大変有益でした。広大な荒野であれば尚更です。

ぽよぽよちゃんとスライムさんも、今は涼しい場所や食べ物について話してました。ぽよぽよちゃんは涼しい場所（岩場の影など）のようですね）について知り、仲間はぽよぽよちゃんが食べ残した朽ち木の場所を知ります。Win Winな関係ですね。

……おや、楽しくお喋りをしているぽよぽよちゃん達に近付いてくる生き物がいます。

それはのしのと荒野を歩く、真つ赤な体色のトカゲでした。

トカゲの大きさは五十クリツトほどもあり、鋭い牙の生えた恐ろしい形相をしています。如何にも肉食です。ぎよろりとした目はぽよぽよちゃん達をしかと捉え、歩みは明らかにぽよぽよちゃん達に向いています。

大トカゲに気付いたぽよぽよちゃん達、互いの顔を見合うと、我先に大トカゲに駆け寄ります。自分よりも大きなトカゲだろうと、スライムさんにとっては食べ物に過ぎません。

ぽよぽよちゃんも、その仲間も、足の速さに大した違いはありません。ですが仲間の方が大トカゲと近かったため、先に射程圏内に迫り着きます。

仲間のスライムさん、皮膜を大きく広げて大トカゲを食べようと思いました——そ

の時です。

大トカゲが、口から炎を吐きました。

大きさにして、人の掌ぐらいの規模でしょうか。時間もほんの一瞬で、ボツ！ と派手な音がなつたぐらいです。しかし火である事に変わりはありません。

「ぼよーっ!？」

火を浴びせ掛けられ、仲間のスライムさんはその身体を縮めました。ぼよぼよちゃんも感じた熱さから反射的に逃げようとして、後ろへすつてんころりん。転んで離れてしまいます。

大トカゲはそんな彼女達の隙を付き、仲間のスライムさんに噛み付きました。

スライムさんには分厚く、再生力に優れた皮膚があります。縮み込んだ事で皮膚は分厚く弛み、更なる防御力を発揮していました。これにより生半可な攻撃なら跳ね返せるのですが、大トカゲの牙はこの皮膚を易々と貫きます。中から体液が溢れ、大トカゲの口を青く染めました。

仲間が大怪我をしています。基本的にたにんの事にはノータッチなのがスライムさん。ぼよぼよちゃんは襲われている仲間を助けよう、なんて考えもせず、むしろ先程吐かれた炎が熱くて不快だったため、そそくさとこの場から離れてしまいます。

ぼよぼよちゃんが逃げてしまい、仲間のスライムさんはたったひとりになってしまい

ます。反撃しなければやられてしまいますが、しかし炎を浴びた事で、身体が部分的にクリプトビオシスの準備を始めていました。上手く動けません。

その間にも大トカゲは容赦なくスライムさんを襲います。ぶんぶんと振り回せば青い血糊が大地を汚し、叩き付けければ中身のゼリーがぶちやぶちやと音を立てました。

やがてスライムさんが動かなくなると、大トカゲは勝ち誇ったような咆哮を上げ、スライムさんを食べ始めます。

見事スライムさんを討ち取ったこの大トカゲ——種名を『サラマンダー』と言います。

サラマンダーはこの荒野に住む『野生動物』です。体内に魔力を持ち、炎を吐く事で獲物を捕らえたり、天敵を追い払ったりする事に役立てています。そしてこの荒野における生態系の頂点でもありました。

……尤も、知恵によって彼等を狩る者もいますが。

獲物を捕らえたサラマンダーは、夢中でスライムさんを貪り食っていました。自分の後ろから近付いてくる影にも気付かず、夢中になって食べています。余程お腹が空いていたのでしょうか？

近付いてくる影は、サラマンダーの傍までゆつくりと、足音を立てないようにながら近付き……ある程度距離を詰めたところで、素早くその手に持っていた紐をサラマン

ダーの首に掛けました。そして紐をきゅつと締めたのです。

突然首を絞められたサラマンダーは、当然ですが暴れます。ところがスライムさんにお見舞いした、炎攻撃はしません。鋭い爪はあるけど短い手足をジタバタさせるばかり。やがて疲れてしまったのか、ぐったりとします。

サラマンダーを捕まえた方……革で作られたフードを被った人型の種族は、安堵したかのように一息吐きました。浅黒い褐色の肌を持ち、目は金色に光っています。見た目は女性のようなですが、持っているのは紐一本だけ。相当な女傑ですね。

「……頼まれたものは捕まえた。これで良いのか」

そんな女傑さんはくると振り返り、蒸れてきたのかフードを脱いでから尋ねます。

彼女の後ろには、亜人の一種である竜人が三人ほど居ました。彼等はトカゲが二足歩行しているようにしか見えない容姿をしています。亜人の中でも聡明で、落ち着きのある種族です。基本的に他種族には不干渉ですが、差別する事もしません。部族紛争などでも、仲介役を担う事の多い種族です。

そして女傑さんも人間ではなく、ダークエルフと呼ばれる種族でした。彼女達はエルフと魔物の間に出来た子とされ、その存在自体が穢らわしいがために、神の裁きによってこの厳しい荒野へと追放されたと言われています。実際には乾燥地に適応したエルフの亜種です。魔物の血は一滴も入っておらず、遺伝子情報を解析すれば一発で明らか

になります。が、この世界にそのような技術はありません。見せても信じないでしょうが。

さて、ダークエルフの女傑さんは捕まえたサラマンダーを、竜人達に見せつけます。竜人達は興味深そうに、サラマンダーをまじまじと観察しました。

「おお……これがサラマンダーか……」

「こんな魔物があの変異性スライムを食べてくれるなんて、見るまで信じられなかったぞ」

「魔物ではない。我等にとつて、サラマンダーは大事な食糧だ」

「……守護神とかではないのか」

呆れ顔の、ですが傍から見ると何も表情が変わっていない（何分頭がトカゲなので）竜人の意見に、女傑さんは首を傾げます。

さて、暢気に話している暇もありません。

サラマンダーを捕まえたのは、見せ物にするためではなく、ましてや客人に料理を振る舞うためでもありません。

販売するためです。

女傑さんの前に現れた竜人達の目的は、サラマンダーの輸入でした。というのも内輪揉めばかりしているうちに、スライムさんは亜人達の領土で大繁殖。「あれ？　もしか



してこれ色々手遅れじゃない？」という状態に陥っていたのです。竜人達も不干渉主義の所為で世界がどうなっているかよく分からず、気付けば住処の周囲がスライムさんだらけになるという体たらくでした。完全な自業自得ですね。

何はともあれ、危機が迫っていると気付いた竜人達は、ある策を用いる事にしました。スライムさんを捕食する生物であり、クマやオオカミほど凶暴でなく、尚且つ繁殖力も比較的旺盛な生物……サラマンダーを移入し、駆除に役立てようというものです。

これは所謂外来種の移入です。聡明な竜人達は、外来種の移入が環境に与える悪影響を、重々理解しています。ですが既に彼等の暮らす地域の生態系は壊滅しており、今更壊れるものなどありません。故に問題ないと判断したのです。

そして女傑さんは、彼等からサラマンダーの捕獲を依頼されました。

女傑さんは捕まえたサラマンダーを檻に入れます。鉄製の檻の中には、既にもう一匹のサラマンダーがいました。先に入っていたのが雄で、今し方捕まえたものが雌です。

「確かに、つがいを用意したぞ」

「うむ。確かに受け取った」

女傑さんは檻と共にサラマンダーを竜人に渡します。竜人は檻を受け取ると、そそくさとこの場を後にしました。

一人残されたダークエルフは、ぼりぼりと頭を搔きました。

「……何事もなければ良いんだがな。巻き込まれるのだけは勘弁だぞ」  
そして不安を独りごち、荒野の奥地に向けて歩き出します。

立ち去った竜人達と違い、彼女だけが、表情を強張らせたまま――

よ  
く

竜人達がサラマンダーを導入してから、二年の月日が流れたある日の事。

草すら殆ど生えていない荒野に、四人の竜人が居ました。彼等は真つ白なクロークを纏い、眼鏡を掛けて、如何にも知的そうな風貌です。三人は一冊の手帳とペンを持ち、しきりに何かを書き込んでいます。

そして残る一人の手には一本の双眼鏡があり、彼はそれを用いて遠くを見つめています。

双眼鏡が向いている先には、ふたつの動物の姿があります。ひとつはスライムさん、もうひとつはサラマンダーです。

サラマンダーはスライムさんにゆっくりと、にじり寄ります。スライムさんもサラマンダーと間合いを図るように、がらんだような瞳で自身を見つめるサラマンダーを見つめ返していました。

しばし睨み合いを続ける両者でしたが、やがて我慢が出来なくなつた——そもそも我慢の概念が希薄なのですが——スライムさんが動きました。自分より大きなサラマンダーを捕らえるべく、皮膜を伸ばして包み込もうとします。ですがサラマンダーは

火を吐いてこれを返り討ちに。高熱を受けたスライムさんは縮こまり、サラマンダーの餌食となります。

と、ダークエルフの土地で見られた攻防戦と、ほぼ同じハンティングが行われました。「……問題なく、捕食しているように見えるな」

「ああ。予想通りの捕食だ」

「変異性スライムの防御も変化なしと見て良いだろう」

その様を見ていた竜人以外の竜人三人は意見を交わし、満足げに頷きました。

彼等はスライムさん対策としてこの地に放たれたサラマンダーの生態調査に来た、竜人の科学者達です。先程まで彼等が観察していたサラマンダーは、ダークエルフの土地から導入した個体の子孫と思われる個体でした。

スライムさん対策にサラマンダーを導入する計画は、成功といって良い状態です。

一部で懸念されていた生態系への悪影響は、殆どありませんでした。何しろ影響を受けるような生態系が残っていないのです。スライムさんが粗方全部食べ尽くし、残っているのは丈の短い草や苔、動きの素早い羽虫ぐらいなのですから。

そしてスライムさんにとって、サラマンダーはとても恐ろしい敵でした。炎による強制的な硬直により、攻撃を受けたらほぼ反撃も儘なりません。鋭い牙を突き立てられ、ぶちまけた中身をゆつくりと食べられてしまいます。その上サラマンダーは、そこそこ

の繁殖力があり、二〜三ヶ月に一度のペースで子供を作ります。ダークエルフという、サラマンダーを食べてしまう天敵の存在が、彼等に高い繁殖サイクルを身に付けさせたのです。サラマンダーはどんどん増え、スライムさんはどんどん食べられていきました。

かくして試験的に導入されたこの土地では、スライムさんの個体数は大きく減少してしました。全盛期と比べた場合、大体半分ぐらいでしょうか。

「変異性スライムの個体数も減少傾向にある。完全な根絶は無理だとしても、被害はかなり抑える事が出来そうだ」

「生態系の回復は無理そうだがな。なんらかの手立てを考えねばならないか」

「そこそ自然に任せるべきではないか？ あの変異性スライムとサラマンダーの個体数が安定すれば、外部から何かしらの生物が定着する筈だ」

サラマンダーが今も生きていて、そしてスライムさんを狩っている事を確認出来た三人は、将来についての意見を交わします。既に解決済みだと言わんばかりです。

ただ一人話に加わらなかったのは、双眼鏡を覗いていた竜人だけでした。

「……痩せているな」

その竜人さんがぼつりと漏らした言葉に、三人が振り向きまします。

「……なんだって？」

「痩せている。少なくとも、一年前に調べたどんな個体よりも」  
「個体差じゃないか？」

獣人からの意見に、竜人は言い返す言葉がないとか押し黙ります。

「それより、得られた情報を一旦持ち帰ろう。此処での意見はあくまで私見に過ぎない」  
「……その通りだ。情報の精査をしなければ」

促された竜人は、撤退しようとする他の竜人達の後を大人しく追います。

最後にちらりと、痩せたサラマンダーの方へと振り返りながら……

そうして帰還した四人の学者達は、驚愕で目を見開いていました。

竜人の集落が、燃えていたのです。

それはもう、火事と呼ぶよりも大火です。彼等の集落の大半が火の手に包まれていました。悲鳴が聞こえ、バキバキと燃え尽きた建物の崩れる音が鳴り響いています。このままでは、集落そのものが燃え尽きるのも時間の問題でしょう。

「な、なん、だ……これは……」

竜人の学者の一人が、茫然自失といった様子で呟きます。他の学者達も呆然と立ち尽くしていたり、崩れ落ちるように膝を折ったりしていました。

彼等の家は確かに植物も用いますが、耐熱性の高いものであり、火事が起き難く、燃

焼しても進み辛い材質です。密集した家を建てる文化形態なので、火事には細心の注意を払っているのです。消防施設もあります。何軒も燃えるためには相応の火力が必要で、それは竜人が想定する中では他の種族からの攻撃によってのみ起こるものでした。

しかし他の種族は、スライムさんの拡散によって今や壊滅状態。他種族に戦争を仕掛ける余裕なんてない筈です。ましてやサラマンダー導入によりスライムさんの脅威を多少なりと排除し、力を保っている竜人を攻めるなんて、無謀以外の何ものでもありません。

しばらく立ち尽くしていた学者達ですが、やがて集落の方から数人の軍人と、彼等に連れられた子供の竜人が走ってきました。我に返った一人の学者が軍人達に駆け寄り  
ます。

「すまない。一体何があったんだ？ 村が燃えているが……」

「さ、サラマンダーと変異性スライムが……!」

「？ その二種がどうした？」

息を切らし、言葉が途切れた軍人に、学者は問い詰めます。軍人は息を整え、ゆっくりとですが話し始めようとして

「あ、アイツらが来た!」

子供の一人が、後ろを指差しながら叫びました。

兵士達が一齐に後ろへと振り返り、学者達は彼等が見る先に目を向けます。そして学者達は、全員が愕然と——それこそ村が燃えている時よりも愕然としました。

現れたのは、数百はあるのかというスライムさんとサラマンダーの大群でした。

ただの大群ではありません。なんとスライムさんの上に、サラマンダーが騎乗していたのです。

逆ではありませんよ？ スライムさんの上に、サラマンダーが騎乗していたのです。スライムさんの上に乗っているのは、子供のサラマンダーでしょうか。大人の半分ほどの大きさしかありません。

喰う喰われるの関係である筈の二種が、ケンカもせず、まるでコンビを組むように一緒だったのです。

「みんな先に逃げてください！ ここは私が食い止めます！」

「ま、待て！ 隊列を崩すな！」

若い兵士が、兵士達の中でも最も階級が高そうな上官さんの指示を無視して突撃します。若い兵士は接近するスライムさんの一体に槍を突き刺し、その身に傷を与えました。

するとどうでしょう。スライムさんの上に乗っていたサラマンダーは、ボツ！ と小さな火を吐きました。突然の炎に驚き、兵士は槍から手を放してすてんと転んでしま



ます。

スライムさんはこの隙を逃しません。素早く皮膜を伸ばし、竜人の兵士の足を包み込みます。

そしてぐるんと一回転。デスロールにより、その足を身体から引き千切りました。

「ぎゃあああああつ?!? 痛い痛い痛い痛い痛いっ!?!」

足を捻じ切られ、若い兵士は叫びを上げます。すると悲鳴を聞き付けたスライムさん達が、わらわらと叫びを上げた兵士に群がりました。悲鳴は、すぐに聞こえなくなりました。

その様を見ていた学者達、言葉を失います。ですがそれは、目の前で人命が失われた事がショックだったからではありません。

スライムさんとサラマンダーが、明らかに協力していたからです。

「(ば、馬鹿な……あの変異性スライムが、サラマンダーを役使しているのか?!? 人間の薬物にも即座に適応したと聞いたが、いくらなんでもこんな……)」

彼女達の行動の意図を探る学者達ですが、答えはすぐに分かりました。

スライムさんの上に乗っていたサラマンダーが、自身の乗っているスライムさんの身体に噛み付いたのです。そうして出来た傷口からは青い体液が溢れ、サラマンダーはそれをペろペろと舐めていました。

学者達は気付きました。使役しているのはスライムさんではなく、サラマンダーの方であると。

サラマンダーにとってスライムさんは、決して良い獲物ではありませんでした。確かに炎を使えばスライムさんは簡単に動かなくなりませんが、時には構わず襲い掛かったり、反応の鈍い個体も居ます。そういった個体はサラマンダーに致命傷を与える事もあり、狩る時は正に一か八か。時々やられるかも知れない相手を主食に出来るのは、とても危険な事でした。おまけに五十クリットあるとはいえ、サラマンダーは横幅が広くないトカゲ型。三十クリットしかないとはいえずんぐりむつくりなスライムさんと、実は見た目ほどの体重差はありません。元々大食漢でない事もあり、折角捕まえたところで半分が食べ残しになってしまいます。もっと小さな獲物を捕まえる方が、簡単で安全というものです。

しかしスライムさん達の環境破壊により、既に殆どの動物は食べ尽くされています。残っているのは動きが素早い羽虫や、スライムさんを襲えるクマやオオカミ、バシリスクなどのスライムさん以上に危険な生き物ばかり。獲物はスライムさんしかいません。選択肢のない環境に無理やり連れて来られた彼等は、必死に、必死に生き延びようとして……ある性質を身に着けました。

スライムさんの身体に纏わり付き、体液を少しずつ啜るといふ生態です。スライムさ

んは再生力に優れているため、ちよつとした傷ならすぐに直ります。ちゆうちゆうと、ちよつとずつ食べる方法なら、スライムさんの身体を無駄なく利用出来るのです。

スライムさんにも、サラマンダーに寄生されても悪い事ばかりではありませんでした。彼等の吐き出す炎が外敵を怯ませ、身を守るばかりかそれらの捕食に役立つのです。獲物を豊富に食べたスライムさんはぶくぶく太り、栄養たっぷりの体液を吸い続けたサラマンダーもたくさんの卵を持てるようになりました。

かくして、サラマンダーとスライムさんの共生関係が出来上がったのです。外来種が移入先では原産地と異なる生態を見せる事はよくある事。現地の生態ならば導入しても問題ないと思つても、そう簡単には思い通りにならないのです。

そう、だつて誰もが生きていますから。生きていますから、いくらでも変わつてみせます。

誰かの思惑なんて、知つた事じゃありません。

「不味い……逃げるためには、変異性スライムの生息地を通らねばならない。後ろの奴等と挟み撃ちに合えば……」

上官さんの漏らした言葉に、兵士達がざわめきます。此処に居る兵士は誰もが若く、未熟でした。一対一でも危険な相手なのに、挟み撃ちになれば全滅する事は明かです。

そんな大人達の気持ちを、子供達も察したのでしよう。

子供の一人が、学者の服の裾を引っ張りました。ここまでずっと立ち尽くしていた彼は我を取り戻し、足元に居る子供に目を向けます。

「おじさん。ボク達、ここで死んじやうの?」

子供は、とても『簡単な質問』をぶつけてきました。

学者達は顔を見合わせました。それからこくりと、言葉もなく頷きます。

学者は子供の頭を撫でながら、こう答えました。

「いいや、君達は死なない。私達がアイツらをやっつけるからだ」

『簡単な質問』だったのに、間違えた答えを。

「兵士達、子供達を連れて逃げるんだ。先程行った調査によれば、南西方角は比較的変異性スライムの生息密度が低い。あそこなら無事抜けられる可能性が高い筈だ」

「……念のため確認します。あなた達はどうかされますか」

「我々は大人だ。責任は取らねばならん」

一人の学者の言葉に、他の学者も頷きます。

上官さんはしばらく黙っていました。が、学者達を説得しようとはしませんでした。無言のまま敬礼をし、子供達をそつと抱き寄せます。

「全軍南西方角に全速前進! ホビットの領土まで抜けるぞ!」

そして勇ましい声と共に、兵士達は子供達を連れて移動しました。

残った学者達は兵士達と子供達を見送り、スライムさん達の方へと振り返ります。

「目的は分かっているな？」

「問題ない。私の学説を確かめる良い機会だ」

「検証は子供達の誰かがやってくれるだろう」

「生憎、私はまだ死ぬつもりはない」

学者達は言葉を交わし、にやりと、その爬虫類らしい顔を歪めます。

それから彼等は、スライムさん達の下へと駆け出しました。

自分達の活躍を、後世が語り継いでくれると信じて……

## ぽよよ

巫人達の国を粗方滅茶苦茶にした、ぽよぽよちゃん達スライムさん。竜人達が運んできたサラマンダーとの協力関係もあり、破竹の勢いで生息域を拡大していきました。今や世界の六割の土地にスライムさんは分布しています。支配する領土の面積で言うならば、ぽよぽよちゃん達スライムさんは間違いなくこの世界の支配者と呼べる存在になっていました。

しかしぽよぽよちゃん達スライムさんの渴望は止まりません。新たなごはんを求め、北へ、南へ、東へ西へ……自由に、新たな土地へと広がります。

ぽよぽよちゃんも、新天地を目指して歩んでいます。ちなみにぽよぽよちゃんの頭の上に、サラマンダーは居ません。彼女は『原始的』なスライムさんなのです。

旅路にはたくさん仲間が付いてきましたが、基本仲間意識なんて皆無なスライムさん。実質単身です。野を越え山を越え、川に流され崖を転がり落ち……はてさて、何処まで行ったのやら。

気付けばぽよぽよちゃん達は、荒れ果てた大地の上に居ました。

ただの荒野ではありません。地平線の彼方まで、紫色に染まった土が広がっています。

す。木々や草は疎らに生えているだけで、乾燥もしています。ですがダークエルフの暮らしていた土地とは違い、かなり気温は低いようです。

また、この地には活性化した魔力が高濃度で漂っていました。魔物や魔法が使える人間、一部の巫人が体内に持っている魔力ですが、これらは魔力を持っていない生物にとつては毒物のように作用します。微量であればなら問題は無いのですが、この地に漂っている魔力の濃度は『汚染』と言っても過言ではないもの。並の生物なら全身を蝕まれ、臓器不全を引き起こしたり、産まれてくる子供に奇形が増えたり、そもそも不妊になったり……様々な障害が現れるでしょう。

此処は魔物の領地。魔物達が暮らす、荒廃した世界です。

多くの生物には適さない環境で、魔物達も弱肉強食のルールによってどうにか生きていく土地です。生えている動植物もこの地の環境に適応した固有種ばかり。新天地とするには、あまりにも過酷な世界でした。

が、過酷な環境への適応はぽよよちゃん達スライムさんの十八番です。

生物が少ない、即ちごはんの少なさへの耐性は言うまでもなし。分厚い皮膜は乾燥に強く、多少寒いぐらいはむしろ体温調節の方法からして適合しているぐらいです。そして魔力汚染ですが、ぽよよちゃん達スライムさんにはさしたる脅威ではありませんでした。あらゆる臓器が再生能力を有するほど構造が単純であり、生じた奇形を大きく上

回る繁殖力を持ち、単為生殖のため不妊個体とつがいになる心配も要らず、何よりそんな事を気にするような知恵がありません。

ぽよぽよちゃんが筆頭に、亜人の土地を食い荒らしたごせんにんものスライムさんは、意気揚々と魔物の土地に足を踏み入れました。

「……………」

おや？ ぽよぽよちゃん、早速何かを見付けたようです。

ぽよぽよちゃんが見つめる先……地平線のところに、大勢の生き物の姿があります。

それは魔物達でした。ゴ布林、オーク、ハーピー（空を飛ぶ、半人半鳥の怪物です）やドラゴン（翼を生やしたトカゲの姿をした魔物で、魔物の中でも極めて高い魔力と生命力、知恵を有しています）……多種多様な魔物が、一列に並んでいました。総数は一万は居るでしょうか。魔物達の誰もが鎧や剣など、文明的な装備を身に付けており、極めて統率された存在である事が見て取れます。

そうです。彼等は、魔物の軍人です。彼等がこの場に居る理由は、とても簡単なものでした。

亜人の領土から流れ込んできたスライムさん達の、殲滅です。

「ゴオアアッ！」

ドラゴンの一匹が大きな口を開けると、その奥が煌々と輝き——赤い火の玉が、



放たれました。

火の玉はぽよよちゃんの頭上を通過し、後ろに居た仲間達の一群に命中。大きな爆発を起こし、じゆうにんぐらいのスライムさんをバラバラに吹き飛ばしました。

ファイアブレス。ドラゴン種お得意の遠距離攻撃です。人間達が開発した大砲よりも射程が長く、精度も優れた、恐るべき攻撃でした。

しかしぽよよちゃん達スライムさんは攻撃の概念がありません。仲間への愛情だとかなんだとかも、です。そのため先程の火の玉についても、熱いなーとか、眩しいなーとか、そんな事しか思っていませんでした。

むしろ目の前にあるものが『ごはん』だと気付き、興奮します。

「ぽよー！」

「ぽよー！」

「ぽよー！」

ぽよよよしたスライムさんの大群は、一斉に、なんの躊躇もなく、魔物の軍勢へと近付き始めました。魔物達も素早く武器を構え、スライムさん達目掛け突撃を開始します。

そして両者は激突し、決戦が始まりました。

戦いは、魔物達の圧倒的優勢です。

彼等は統率された軍隊であり、同時に極めて優秀な身体能力を誇る種族です。人間や亜人とは違います。ゴブリンは数人でひとりのスライムさんを仕留め、オークは棍棒で次々と叩き潰し、ハーピーは上空から奇襲します。ぽよぽよちゃん達スライムさんも欲望のまま魔物達に襲い掛かりますが、中々食べる事が出来ません。彼等の規律ある隊列が、適当なスライムさん群団を翻弄するからです。

そもそもにしてスライムさんは、決して魔物だけを狙っている訳ではありません。

「ぽよ？……ぽよ。ぽよよ」

例えばぽよぽよちゃんは、偶々大きな動物の死骸が目に入り、そちらに気を取られてしまいます。なんにんかの仲間も、ぽよぽよちゃんと同じく死骸の方へと行きました。魔物なんてどーでも良いのです。彼女達は、あくまでお腹が空いているだけなのですから。

上手い事魔物を食べたとしても、満腹になったスライムさんはその場でころころ遊びを始めます。魔物達が自分を襲う、という事が理解出来ないのです。魔物を討ち取った傍から、スライムさんは次々と叩き潰されました。

凡そ戦争とも言えない、雑な掃討戦は十分もすれば終わりました。

「戦局を報告したまえ」

戦闘が終わった頃、魔物達の戦列の最後尾に居た一人の……老人のような顔立ちの魔

族が、尋ねます。

彼の隣には、他よりも一際巨大なオークが立っていました。オークはハーピーから報告を受け、その内容を魔族に伝えます。

「はっ。現在、戦線から離れた一部の奇形スライムを除き、殲滅が完了した模様。被害はゴブリン十六、オーク七、ハーピー八。ドラゴンは全個体生存していますが、一体、片手を食われました」

「ふむ。五千の大群相手ならこんなものか。負傷者は休ませろ。健康な兵の一部を、戦線から離れた奇形スライムの探索に当てなさい。あれは一匹でも残すと爆発的に増殖する性質があるらしい。取りこぼしてはならない」

「御意です、伯爵」

伯爵と呼ばれた魔族は、こくりと満足げに頷きます。

伯爵さんこそが、この軍隊を率いている司令官でした。そしてこの辺りの土地を治めている、有力な魔族です。

彼は人間や亜人の失敗から学び、流れ込んでくるであろうスライムさんへの対抗策を用意していたのです。それは侵入前の徹底した駆除……水際作戦でした。大勢の魔族を率いて、彼は自らの収める土地を守り抜いたのです。

とはいえ、これで戦いが終わった訳ではありません。

「それにしても、思っていたよりも大群でした。戦力は現状で足りるでしょうが、死者は可能な限り減らしたいところ。もう少し遠距離で数を減らしたい」

「でしたら、ゴブリンとオークの配置を減らし、キメラを入れましょう。あれも、ドラゴンほどの威力と射程はありませんが、炎を吐けます」

「成程。ではそのようにしなさい」

「御意」

伯爵さんからの許しを得て、大柄なオークは早速行動を始めます。最後尾に一人残された伯爵さんは、大きなため息を吐きました。

そして伯爵さんは考えます。

伯爵さんは、自分の選択は正しいと確信していました。人間や亜人達の研究をし、策を練った自分は間違っていないと。

しかし。

魔物は強固な上下関係があり、故に他者を見下す事が多々あります。そしてスライムは、魔物の中でも特に力の弱い種族です。スライムさんとしてスライムである事に変わりはありません。

だとしたら、誰かが彼女達を見下さないとも限らないのです。

もしも誰かがあの群団を前にしても、ろくな戦力を用意しなかったら。もしも誰かが

逃げ出したスライムさんを脅威と思わず見逃したら。

脳裏を過ぎる最悪の可能性に、伯爵さんは笑みを浮かべます。

何故なら、彼もまた魔族なのです。

自分の欲望のためなら、他者がどうなろうと知った事ではないのですから——

## ぽぽー

伯爵さんの懸念は、見事の中しました。

魔物達の多くは、スライムさんに対し脅威など抱きませんでした。人間や亜人が破滅的な被害を受けたと聞いても、さしたる問題意識を持ちません。何分人間や亜人すらも見下す対象なのです。少しは苦戦するかもという考えはあっても、自分達が負けるとは露ほども思いませんでした。

結果、残党処理を怠ったり、殆ど戦力を用意しなかったりで、侵入してきたスライムさんの完全駆逐に何度か失敗していました。

一度定着したら後の祭り。戦闘時に生じた死骸をもりもり食べてスライムさんは大繁殖。亜人達の領土から侵入してくるスライムさんの数は減らず、気付けば内も外もスライムさんだらけ。戦線はあっさり崩壊し、更に繁殖したスライムさんが隣の土地へと流れ込み……そこから先はとんとん拍子です。

スライムさん達が魔物の領土に入り込んでから半年ほどが経った頃には、

「……伯爵が倒れたようです」

「ふむ。これで残るのは我が領地のみ、か」

魔族の地はボロボロとなり、統治機構を残しているのは伯爵さんの領土のみとなりました。人間の土地が一年半以上、亜人達が二年半以上持つていますから、断トツの文明壊滅記録に王手が掛かっています。他人を見下しといてこの様でした。

椅子にふんぞり返りながら、伯爵さんは大柄なオークの報告を聞き、×印が無数に付けられた世界地図を眺めます。×が付いていないのが伯爵さんの領土。×が付けられたのが、スライムさんが闊歩している土地です。地図の九割ほどに×印が付けられています。

伯爵さんは他の魔族や魔物と違い、スライムさんを見くびつてはいませんが、圧倒的な戦力差をひっくり返せるような英雄でもありません。このまま戦いを続けても、いずれスライムさんの群れに滅ぼされてしまうでしょう。

このまま同じ戦いを続けても。

では、違う戦い方をしたらどうなるでしょうか？

「ここが頃合いだ。『アレ』を使いなさい。そうだな、西側が良い」

「御意。ただちにハーピー達に出撃させます」

「私も出よう。自分の作ったものだからね、最初の試験運用ぐらいは見ておかねば」

伯爵さんは玉座から立ち上がり、部屋を出ます。お付きである大柄なオークも一緒に部屋を出ました。

彼等は並んで歩きません。なので相手がどんな顔をしているかは、知る由もありません。

ですが二人とも、ハッキリとこう思っていました。

きつと相手も、自分と同じ顔をしていると。

邪悪な笑みを浮かべながら——

相変わらず暗雲が立ち込める空の下に、五体のハーピーがやって来ました。

彼女達はたった一つの、自分達の倍以上の大きさの樽のようなものを協力して運んでいます。やがて一匹のハーピーが地図を見ながらぎやーぎやーと騒ぎ、その声を聞いた四匹はゆっくりと地上へ降下します。

大地のすぐ近くまで来たハーピー達は、樽のようなものを魔力に塗れた土地のど真ん中に起きました。簡単には転がったりしない置き方になった事だけを確かめると、彼女達は慌ただしく空へと舞い戻ります。

「ぎやーぎやー」

「ぎやーぎやー」

そんなハーピー達の置き土産に、近くに居たスライムさん達はすぐ気付きました。

既に辺り一帯の動植物を食べ尽くしていたスライムさん達は、すっかりお腹ぺこぺこ



です。置かれたものを見付けるや歩み寄り、仲間の移動を見付けては着いていき……まるで引き寄せられるように、たくさんのスライムさんが樽のようなものへと集まっています。

やがて一匹のスライムさんが樽のようなものに辿り着き、どうやって食べようかとペタペタ触り始めた

丁度、その時でした。

樽のようなものが光を放ったのです。とはいえ光が放たれたのはほんの一瞬の出来事。スライムさん達が認識する暇などありません。

加えて、直後に発せられた猛烈な衝撃波が、スライムさん達の身体をバラバラにしました。

集まろうとしていた無数のスライムさんが、一瞬にして消し飛びます。衝撃波は音の何倍もの速さで駆け抜け、大地を満たすスライムさん達を次々と消し飛ばしました。大地は何千マグクリットにも渡って焦土と化し、発せられた爆炎はまるでキノコのような形となって空へと昇ります。

まるで悪魔が下した災いのような光景です。

その光景を遙か遠方から——笑いながら眺めている者達が居ました。

「はっはっはっ。中々見事な光景じゃないか」

「ええ、伯爵様。流石です」

伯爵さんと、大柄なオークです。伯爵さんは手にしたワインを口に含み、心底楽しそうにキノコ雲を眺めます。

実は先の爆発は、伯爵さんが引き起こしたものだっただけです。

とはいえ、それは彼が魔法の力で繰り出した技ではありません。むしろ彼は魔族としては、あまり強い方ではない人物でした。

代わりに、彼はとても頭が良かったのです。

伯爵さんは、自分や他の魔物が持つ魔力を結晶化する技術を発明しました。そしてその結晶を圧縮し、ある程度の量を集めると、既存の魔法とは比較にならない威力の爆弾を作れる事を発見したのです。

それが先程スライムさん達を吹き飛ばした、『純魔爆弾』でした。彼等はこの純魔爆弾を用いて、スライムさんを生息地ごと吹き飛ばす事にしましたのです。人間よりも遥かにえげつない方法でしたが、人間達が使った毒とは違い、薄まる事で耐性が出来る心配はありません。仮にいくらか頑丈になったとしても、毒と違い爆破を無効化する事は不可能です。何しろ純魔爆弾の炎は、金すらも気化させてしまうのですから。肉で出来たスライムさんなど、直撃を受ければ跡形も残りません。

とはいえ、欠点がない訳ではありません。いいえ、むしろ欠点だらけと言うべきで

しよう。

「しかし、予想よりも被害範囲が広いです。投下したハーピー達が巻き込まれている恐れがあります」

「些末な事だ。たかがハーピーの数匹を失ったところで、大勢に影響はない。土地について、汚染区域が多少増えたところでどうという事もない。数百年もすれば汚染は薄まる。それまでは耐性が強い、スケルトンやゾンビでも棲まわせて復興作業をさせれば良いだろう」

オークからの報告を、伯爵さんはあつさりを受け流します。オークはそれもそうだとばかりに頷くと、そのまま押し黙ってしまいました。

そう。この純魔爆弾は、起爆すると魔力を撒き散らし、汚染するという問題があるのです。

ただでさえ高濃度の魔力に塗れた土地が、更に濃い魔力で満たされるのです。耐性を持っている魔物達すら、その影響を受け、病気や不妊を引き起こすでしょう。最早何人も暮らせない、死の大地へと化します。先程候補に挙げたスケルトンやゾンビなどのアンデッド系（人間や亜人の死骸に、特殊な細菌型魔物が寄生したものです）の魔物であっても、決して楽には生きられないでしょう。過酷な復興作業の果てに、どれだけの犠牲者が出るか分かったものではありません。

正に禁断の兵器なのですが、伯爵はこれを躊躇なく使用しました。高貴なる存在を自称する魔族にとって、自分以外の下等な魔物がどうなろうと知った事ではないのです。いえ、魔物全体が似たような考えといっても過言ではありません。ハーピー達の犠牲など、興味ありません。

何より、自分達を包囲する数十万ものスライムさんの『駆除』した事には変わりないのです。

「まあ、無駄に犠牲を出す必要もない。量産した純魔爆弾を、起爆時間を二十秒だけ延ばす。変更点はそこだけだ。早速周囲の土地を爆破し、奪還するとしよう」

「——了解しました」

伯爵さんの指示を、オークはさして迷いもなく受けます。向かう先は仲間の下。

伯爵さんに言われた通り、純魔爆弾を使うために。

「く、ふふ。はははははは！ 純魔爆弾の力があれば、邪魔者共は全て一層出来る！ 私の名が歴史に刻まれる時も近い！ ははははははははっ！」

残された伯爵さんの笑い声が、何処までもこだましました。

何時までも。何時までも……

ぽっぽっぽっ

伯爵さんが笑っていられたのは、ほんの数ヶ月の間だけでした。

ここで、数ヶ月前に最初の純魔爆弾が炸裂された場所を見てみましょう。爆弾が炸裂した直後は何もかも吹き飛ばされ、焦土と化していましたがはてさて……

おや？ 不毛の地となった筈の場所に、疎らではありますが、緑色のものが点在しています。近付いてみましょう。

そこに居たのは、スライムさんでした。

ですが少し変わったスライムさんです。まず身体が緑色をしていました。それにぼんやりと空を見上げるばかりで、食べ物を探そうとしません。どうしたのでしょうか？

そんなぼんやり緑色のスライムさんの下に、別のスライムさんが近付いてきました。

そのスライムさんは普通のスライムさんよりも一回り大きく、下半身がガツシリとしています。歩き方もぽよんぽよんではなく、のしのと、しつかり大地を踏み締めています。安定した下半身により、その歩行速度は一般的なスライムさんよりも遙かに速いです。

大きなスライムさんの接近に気付いた緑色のスライムさん、のろのろとですが大きな

スライムさんから離れるように歩き出しました。しかし大きなスライムさんの方がずっと速く、緑色のスライムさんは呆気なく捕まってしまう。

すると大きなスライムさんは、緑色のスライムさんに齧り付きました。

皮膚を伸ばして取り込むのではなく、総出入口で直に噛み付いたのです。そしてじゅるじゅると、緑色のスライムさんの中身を吸っていきました。緑色のスライムさんはバタバタと手足を暴れさせますが、なんの抵抗にもなりません。中身は吸い尽くされ、皮だけがべしやりと捨てられます。

そうして大きなスライムさんが立ち去ると、今度は物陰から小さな、緑色のスライムさんの半分もないようなスライムさんが無数に現れました。彼女達は素早く緑色のスライムさんの亡骸に近寄り、皮膚を伸ばし、皮を引き千切って食べていきます。

いずれも、今までのスライムさんには見られない特徴です。これはどういう事でしょうか？

原因は、何十万ものスライムさんを吹き飛ばした、あの純魔爆弾でした。

純魔爆弾による汚染は、魔物達にとつても危険なものでした。それはオークやゴブリン、魔族などの文化的な魔物だけでなく、スライムや人喰い蟻などの獣染みた生活をしている種族にとつてもです。魔力汚染により難を逃れていた野生の魔物すらも駆逐され、生態系は完全に崩壊しました。精々魔力汚染により死んだ魔物がちらほらと見える

程度です。

こうした生態系の隙間に素早く入り込んだのが、スライムさん達です。

魔力汚染による死亡率よりも繁殖力が勝っているスライムさん達は、空白となった生態系に侵入。その上ごはんがなくても長い間生きていける飢餓耐性もあり、定着に成功しました。

するとどうでしょう。スライムさん達に、ある種の『恩恵』がありました。

魔力汚染による、遺伝子の変異です。実は魔力汚染による悪影響は、魔力が生体内の遺伝子を破損させる事により起きていました。微量の損傷ならば生体が持つ修復機能により直せますが、あまりに酷いと間に合いません。例えば遺伝子の損傷によりガンが生じて臓器不全が引き起こされたり、胎児の遺伝子が破損して奇形になったり、子宮にガンが出来て生殖能力を失ったり……

本来これらは生物にとって、まず有益なものとはなりません。

ですがぽよぽよちゃん達スライムさんは違いました。彼女達は元々多数の遺伝子を体内に有しており、一部の遺伝子の変異しても許容出来る生態を有していました。そのため魔力汚染による変異を活かす事が出来、多様性の獲得に成功したのです。いえ、それどころか食べたごはんの遺伝子が断片となって漂い、傷付いたスライムさんの遺伝子と結合する有り様。

結果、スライムさん達は無数の『亜種』を生み出す事が出来たのです。スライムさんを食べる形に変異した肉食性スライムさん、土中の有機物を食べる土食性スライムさん、水棲生活に適応した水生スライムさん、葉緑素と細胞が癒着してしまった植物性スライムさん……多様な亜種が出現しました。

無論、これらは所詮突然変異によつて産まれた、偶然の形質です。何十億年も掛けて進化し、会得した生物達の形質ほど精錬されていません。通常であれば、このような亜種は生態的地位が重なる生物と競争になり、簡単に一掃されます。

しかし純魔爆弾により生態系は消滅し、競争相手はいません。

故にどんな些末な形質でも、生きるのに有利であれば定着する可能性があります。加えて幸運な事に、魔族達はスライムさんを一掃するため、最初の爆破地点から同心円状に爆破を繰り返しました。これにより既存の生態系からの生物の流入が防がれ、スライムさん達の亜種は悠々と繁殖出来たのです。

そして今まで以上の多様性を獲得したスライムさん達は、これまでとは比較にならない脅威でした。

場所を移動しまして、魔物達のお城。そこは今、地獄絵図の様相を呈しています。

「ギャアアアッ!」



「た、助け、がもっ！」

魔物達の悲痛な声が、城の中に響きます。

彼等に悲鳴を上げさせているのは、スライムさん達でした。魔族達のお城にスライムさんの群れが攻め込んだのです。

それも雑食性だったスライムさん達ではなく、肉食に特化したスライムさんの亜種達でした。今までのスライムさんよりも獰猛で、素早く、力があります。加えて肉食傾向が強いため、植物など他の獲物に興味を示さず、多数の肉食性スライムさんが真つ直ぐにお肉<sup>魔物</sup>が居るこのお城に集結しています。今までのぽよぽよしたスライムさんよりも、数割ほど巨大な群れとなりました。

おまけにこのスライムさん達は、回り込む、回避する、という行動も取ります。

獲物を取るために、極めて原始的ながら『戦術』を身に着けたのです。無論ろくな淘汰も受けていない付け焼き刃の本能ですので、一対一ならばなんの脅威にもならないでしょう。ですが一対多数の時には、思考を割かねばならない面倒事となります。

数の暴力、戦術、個々の身体能力——あらゆる点で、元となったスライムさんよりも上です。

劣勢をひっくり返すための爆弾が、スライムさん達の進化を促してしまったのでした。

「……………これは、夢、か…………？」

そしてこの景色を自室から眺めていた魔族……純魔爆弾の作り手である伯爵さんは、  
啞然としながら眺めていました。

「伯爵！ もうこれ以上は抑え切れません！ 退避を…………！」

劣勢を悟った側近である大柄なオークが、伯爵さんに提言します。ですが伯爵さん、  
これになんの反応も示しません。むしろ楽しげに、けたけたと笑い始めました。

「ああ、そうだ。夢なんだ。夢だ、夢、夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢  
夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢」

それからぶつぶつと、意味のない言葉を呟きます。

配下のオークは呆然としてしまいます。だけどすぐに察した事でしょう。コイツは  
もう駄目だ、と。

ですからオークは、すぐにこの場から逃げようとなりました。

残念ですが、既に手遅れです。ドアを破り、窓を登り、何百ものスライムさん達が部  
屋に流れ込んできたのですから。

「ひ、ひいいいいいっ!? 来るなあ！ あ、ぎ、ぎぐえっ」

「夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢ゆぐほ」

スライムさん達は一斉に、部屋の中に居た二つのごはんを群がります。ごはんの一つ

は暴れて抵抗しましたが、すぐに静かになりました。

そして彼等の悲鳴を最後に、お城の中はとても静かになりました。

かくして、伯爵さんはその名を魔族の歴史に刻む事となります——余計な事をし  
てくれた、最低最悪のお調子者と。

ですが、嘆く必要はないでしょう。

その刻まれた歴史も、近々幕を閉じるのですからね。

## ぽよぽよー

最早、世界は元の形を成していませんでした。

世界の至る所に、青くてぽよぽよした生き物と、その生き物に乗った赤い生き物と、ぽよよした奇妙な生き物ばかりが闊歩しています。木々は根こそぎ倒され、獣は残さず食い散らかされ、町は無惨に荒らされました。

それでも、世界が終わった訳ではありません。

そう、例えば……

例えば、廃墟と化した人間の町。

瓦礫の山の下に、一人の六歳ぐらいの少年が居ました。

少年はカタカタと身体を震わせながら、恐る恐る瓦礫の隙間から外を覗きます。

外には月明かりに照らされているぽよぽよした生き物、スライムさんが無数に蠢いています。

少年はすぐに身を引つ込め、瓦礫の奥へと戻ります。

少年はただの子供でした。特別な力なんてありませんし、使い方も習っていません。

ひとりのスライムさんから逃げる事は出来ても、なんじゆうにんものスライムさんに囲まれれば、一瞬にしてごはんとなります。その事を彼はよく分かっていました……彼の愛しい家族と、粗暴で無謀な友人と、高慢で臆病な友人が、その身を以て証明してくれたお陰でした。

幸いにして、彼にはすぐにこの瓦礫の下から出ないといけない理由はありません。

何故なら瓦礫の奥には、潰れた食糧棚がありました。開ければそこには乾燥したパンと、挽き肉がしまわれています。飲み水こそありませんが、雨水が瓦礫の下まで流れ込み、水溜まりを作っています。衛生的ではありませんが、水には違いありません。

食べ物はとも少ないものでしたが、少年一人だけが食べるなら、一週間分の栄養にはなるでしょう。そして瓦礫の下には今、少年一人しか居ません。

一週間のうちに、スライムさん達は何処かに行くかも知れません。もしかすると助けが来るかも知れません。

少年は、じつと待ち続ける事にしました。

この場へと続く瓦礫の隙間を、周りに蔓延るスライムさん達が覗き込まない事を祈りながら――

例えば、巨大な溪谷沿い。

「はっ、はっ、はっ……！」

「ひ、ひつ、ひう……」

大人の女ダークエルフが、エルフの少女を背負いながら駆けていました。

エルフの少女はダークエルフの背中にしがみつき、走る彼女に振り下ろされないようにしていました。ダークエルフの女も、エルフの少女を落とさないよう必死に支えています。

そんな彼女達の後ろを、無数のスライムさんとサラマンダーが追っていました。

共生型スライムさんです。サラマンダーのお陰で大きな生物も効率的に狩れるようになった彼女達は、この数年間のうちに、より速力に優れる形態へと進化が進んでいました。さながら獣のような四つん這いの姿勢となり、跳ねるように大地を駆けまわります。半身を吸盤のように使う機能は失われ、樹木や崖を登る機能は失いましたが、平地により適応した形態となっています。これにより平地であれば大人の人間が走るぐらいのスピードを獲得しました。

もしも彼女達に追い付かれたら、ダークエルフとエルフの二人はサラマンダーの炎に炙られてしまうでしょう。灼熱の炎を受ければ、エルフの少女はしがみつく力が奪われ、ダークエルフの足はもつれて転ぶかも知れません。

それは死を意味していました。

「ちくしょう！ いい加減諦めろっての！」

「……ねえ、お願い。私を捨てて、逃げて！」

「はあっ!? いきなり何を……!」

「私が囹になれば、あなたは逃げ切れる! でもこのままじゃ……」

「冗談を聞いている暇はない!」

エルフからの提案を、ダークエルフは拒否します。それから振り向いた横顔に、鬼気迫る表情を浮かべ、こう言いました。

「もう、仲間を置いていくのは嫌なんだ!」

ダークエルフの言葉に、エルフは大きく目を見開きました。それからしばしその口を閉ざし、ふと、笑みを浮かべます。

エルフの少女は、ダークエルフに今まで以上に力強く抱き着きました。

「もう、寂しがり屋なんだからっ!」

「ふんっ! お前だつて似たようなもんだらうが!」

悪態を吐きながら、二人はとことん逃げます。

かつて差別する側と、差別される側という関係は、そんな二人からは見て取れません。ですがそれも当然の事でしょう。今の二人は、相手の事を仲間と思つていらのですから。

だから二人は逃げ続けるのです。

自分達の行く手に、別のスライムさんの群れがある事も知らないで——  
例えば、魔力に満ちた開けた大地の一角。

巨大なオークが、棍棒を振り回していました。

オークの目は白く濁り、明らかに自我を失っていました。暴れている場所の周りには何もなく、無為に地面を叩いたりしています。見境なんてものがあるとは思えない、とても野蛮な姿を晒していました。

「お、俺、俺は、俺は殺されんぞ……絶対、絶対……」

そしてその口からは、ぶつぶつと恐怖に震えた声が漏れ出ています。

何処かから物音がすると、彼はすかさずそこに棍棒を叩き付けました。何か小さな生き物が居れば原形を留めないぐらい叩き潰し、生き物が居なければ気が済むまで叩きま

す。  
彼は自分が殺される事をとても恐れていました。何故なら彼の仲間や家族は、皆ぼよぼよした生き物に生きながら食べられ、苦悶の叫びを上げながら息絶えたのです。

仲間意識は希薄なオークでしたが、自分と他者を重ね合わせるぐらいの知能はあります。それだけの知能があったので、彼は錯乱してしまいました。自分が仲間達と同じように、四肢を引き千切られ、生きたまま内臓を引きずり出され、最後に頭を捻じ切られるような……そんな死に方をしたくないがために。



「殺されない殺されない俺は殺されない絶対に殺されない殺されない殺されない殺されない」

ぶつぶつと呟き、あらゆるものを叩き潰しながら、彼は当てもなく彷徨い歩きます。

自らの出した音が、無数のぼよぼよした生き物を引き寄せている事に気付かず——

誰もが、必死に生きようとしていました。

それは生き物として当然の姿であり、仲間を増やしたいと思っていた。ぼよぼよちゃん達スライムさんと同じ想いでした。食べ物を探し、寝床を求め、仲間を増やす……生き物として、ごく自然で、有り触れた姿です。

勿論、ぼよぼよちゃん達スライムさんは、世界を『正しい姿』にしようなんて考えていません。ただ、自分達の仲間を増やしたい、ごはんを食べたい、おなかいっぱいになったら遊びたい……それをしたがために、頑張っているだけです。

そう、ただただ頑張って、頑張り続けて。

それから、月日は流れて——

ぽよぽよ

世界の中心に浮かぶ最も大きな大陸は、鬱蒼とした緑色のものに覆われていました。

それらの高さは、ざっと十五マグクリットはあるでしょうか。無数に生えているそれは、ぷるんぷるんとした肉厚で緑色をした突起を多数持ち、降り注ぐ太陽の光を浴びています。緑色の突起は黒くて丈夫な棒に付いており、地上はそれらに覆い尽くされています。よくよく見れば多彩の形のもが存在しており、一種だけではないと分かります。

それはかつて、緑色のスライムさんと呼ばれていたものでした。

光合成の力を獲得した彼女達は、スライムさんの捕食によつて衰退していた植物の生態系的地位を埋めるように大いに繁栄しました。ところがある程度繁栄すると、今度は同種が、光エネルギーを奪い合うライバルとなります。種内競争は激化し、子孫を残せるものは、より大きく、より平坦な個体だけ。それは衰退していった、樹木達と同じ戦略への進化でした。近縁でない種が似たような形質を持つに至る、収斂進化と呼ばれる事象です。

やがて緑色のスライムさんは、スライムさんの亜種という括りを離脱。一つの種とし

て独立し、環境に合わせ多様な種へと分化しながら世界中に広まっていききました。今では世界の何処に行っても、このぷるぷるとした植物スライムさんを見る事が出来ます。

そんな植物スライムさんの葉の上には、三クリツトほどの大きさしかない、細長いイモムシのようなスライムさんがいました。小型化・草食に特化したスライムさんの亜種……いいえ、分化した独立種です。彼女達イモムシスライムさんは、植物スライムさんの葉を食べて生きています。植物スライムさんの身体には、防御のための毒がたっぷり含まれているため、イモムシスライムさんはそれらの毒を分解するための器官を持つ必要があります。ですが植物スライムさんが多彩な種へと分化した事で、毒の種類も多岐に渡るようになりました。食べる植物スライムさんの種に合わせ、イモムシスライムさんも種分化が進み、今では数万種にもなる大繁栄を遂げています。

そしてそんなイモムシスライムさんを狙うものが、空には居ました。

それは翼を持ち、空を飛ぶ事が出来るようになった、鳥型スライムさんでした。正確には鳥のような羽毛ではなく、コウモリのような皮膜で羽ばたいています。口器が発達し嘴のようになっていました。翼は六枚もあり、これにより優れた機動性を発揮します。樹木が生い茂るこの環境では繊細な飛行のコントロールが必要なため、飛行力に優れるスライムさんは森林環境における空の覇者となりました。

鳥型スライムさんは木々の間を飛び交い、葉に留まるイモムシスライムさんを次々と

捕らえていきます。ですが彼女はこれを食べません。彼女には子供がいて、巣の中でお腹を空かせて待つているからです。このイモムシスライムさんは、子供達の大切なごはんでした。

しかし此処は厳しい自然界。

悠々と飛んでいた鳥型スライムさんは、突如木々の間から跳び出してきた何かに襲われました。突然の事に鳥型スライムさんは羽をばたつかせて抵抗しますが、その喉笛に噛み付かれ、頭を引き千切られて絶命します。

鳥型スライムさんを捕らえたのは、立派な四肢を持ち、大きな頭と丈夫な牙を持った、猫のようなスライムさんでした。猫型スライムさんは手に入れた獲物の断面をちゅうちゅうと吸い、その中身を食べます。

鳥型スライムさんは猫型スライムさんよりもずっと小さかったため、その中身は全て猫型スライムさんのお腹に収まりました。猫型スライムさんは残った皮を捨てると、次の獲物を探して移動を始めます。

そうして打ち捨てられた皮に、今度は地面から現れた小さな虫達……ただしスライムさんではなく、硬い甲殻に身を包んだ節足動物の……が群がりました。彼等は死骸を分解し、無機質へと還元。それらの物質は植物スライムさんの栄養となり、再び生態系の循環に加わります。

——このように世界は、今やスライムさんのものでした。

全ての生き物がスライムさんに置き換わった訳ではありません。小さな虫、ネズミ、鳥、植物……スライムさん達の大侵攻を生き延びた種は大勢いて、それらは新たな種へと変化していました。ですがかつての生態的地位チの大半は、スライムさんの子孫が手にしています。何処を見ても、何処を探しても、スライムさんを見付ける事が出来ませんでした。数万年もの月日の果てに、この星は、スライムさんの星となつたのです。

つまりはこの星の主はスライムさんであり、それはかつてない大繁栄と言えるでしょう。自分を増やしたい、もつと栄えたいと思つていた『彼女』の願いは叶つたのです。そういうえば、『彼女』は今何をしているのでしょうか？

ちよつと会いに行つてみましょう——

海辺を、ぽよぽよとした生き物が歩いていました。

それはスライムさんです。亜種や進化系ではなく、青くて、ぽよんぽよんとした、昔ながらのスライムさんでした。ですが、周りに仲間はいません。たったひとりだけです。

かつては世界中へと広がった彼女達ですが、その後衰退の一途を辿りました。周囲が進化を続ける中、極めて原始的な特徴を持つ彼女達は適応出来ず、ゆつくりと個体数を減らしていったのです。より適応的で、生態の似た種が現れた事も、個体数減少を加速

させました。

加えて、故郷である島が火山の噴火によって消滅。真の衰退を迎える事となり……純粋な意味でのスライムさんは、最早この子だけでした。

最後の末裔となったスライムさんは、ぼんやりと海を眺めます。

——彼女は覚えていないでしょう。始まりがこの海の彼方にあつた、今では存在しない小島だった事など。

この子は『彼女』……全ての母であるぼよぼよちゃんなのでしょうか？ そうかも知れません。スライムさんは分裂によつて増えるため、自他の境界が極めて曖昧なのです。彼女は間違いなくぼよぼよちゃんから分裂した個体の末裔であり、ぼよぼよちゃんと変わらぬ形質を保つた存在です。神経細胞も引き継いでいますから、忘れた分を除けば記憶だつて同じです。ならばきつと、彼女はぼよぼよちゃんなのでしょう。

ぼよぼよちゃんは何時までも、何時までも、ぼんやりとしていました。別に何も考えていませんが、なんとなく海の方を見ていました。

そうして海を眺めていると……ちやぼんと、海面で何かが跳ねます。

それは魚でした。

魚型スライムさんではありません。立派な骨を持った硬骨魚の一種です。

陸地の環境は激変しましたが、海はそこまで大きな影響を受けませんでした。一時的

には流れ込む栄養素の減少により、生物密度が低下しましたが、陸上生態系の再構築に伴い今ではすっかり回復しています。

何より、スライムさんは水中を苦手としています。

水生のスライムさんもありますが、それらはあくまで水中に身を潜めているだけで、息は空気中の酸素で行います。丁度、カエルのような生き方です。水中呼吸を獲得するためには踏まねばならぬステップが多く、極めて時間が掛かります。また水中には魚や甲殻類など、水中生活を行う事に特化した生物が多数棲み着いていました。そのため生態系的地位が独占されており、生半可な形質では淘汰されてしまいます。海鳥などの存在により、海生生物を利用するニッチも埋まっていました。

かくして海は、スライムさん達の侵出を免れたのです。

—— 少なくとも、今日までは。

「……………ぽよー」

あれ、食べてみたいなあ……とでも思ったのでしょうか。ぽよぽよちゃんはじつと海を眺めます。

そうしていたところ、ふと賑やかな音が聞こえました。

食べられないものよりも音に興味が移り、ぽよぽよちゃんは音が聞こえた方を目指してぽよぽよと歩きます。

すると、そこには『ヒト』がいました。

正確には人間だけではなく、例えばオークだとか、ゴブリンだとか、エルフだとか、ドワーフだとか……兎に角色々な種族でしたが、彼等が集まっていました。わいわいと笑い合い、とても楽しそうにしています。とても夢や幻とは思えません……ぼよぼよちゃん、そんなものは見るほど、彼等に思い入れなどありませんが。

数万年前に文明を築いていた種族は、絶滅していなかったのです。

生存競争に負けた彼等は逃避行の中で、海辺が安全地帯である事に気付きました。内陸から海辺での生活にシフトする事で、獯猛で危険なスライムさん達から逃れようとしたのです。ぼよぼよちゃんに知る由もありませんが、このような集落は世界中で何千と存在し、数十万もの『知的種族』が暮らしています。文明力は原始生活レベルにまで退行しましたが、なんやかんやちやっかり生き残ったいたのですね。

そしてその過程で、彼等は異種族との調和を成し遂げました。

尤も、ある意味必然な流れでしたが。海辺しか安全地帯がないのですから、生き残った種族が集結するのは当然の事。もしも此処で争いなんかをしても、ただの潰し合いにしかありません。協定を結び、力を合わせるのが正解です。

そうして出来た仮初めの協定は、時間が経つと忘れ去られ、子孫は異種族との暮らしが当たり前となりました。今では協力するのが当たり前、仲良くするのが普通です。



だって、その方が色々上手くいくのですから。

そして彼等はその生活の糧を、海の幸に頼っていました。

「……ぽつよ、ぽつよー」

ぽよぽよちゃん、ぽよんぽよんと跳ねながら、彼等の集落に近付きます。

狙うは集落の住人……ではありません。住人達が海に捨てている、生ゴミの方です。大きくて動き回る生き物を狙うより、小さくても動かない生き物の方が効率的であると、ぽよぽよちゃんは学んでいました。

海水へと入るや皮膜を伸ばし、ぶかぶか浮かぶ生ゴミを取り込みます。それは肉も皮も食べられた、小さな魚の骨でしたが、ぽよぽよちゃんにとってはご馳走です。美味しく、いただきました。

お腹が膨れたぽよぽよちゃんは、ぶるぶると震えました。やがて頭が割れ、胴体が裂け……ふたりに増えます。最後の生き残りという絶望的状况は、ギリギリのところでした。

仲間が増えたぽよぽよちゃん、海辺でころころ転がりながら一休み。なんだかこの辺りはとても居心地が良いようです。

それも当然です。元々ぽよぽよちゃん達スライムさんは、海に囲まれた島で暮らしていました。陸地に適応した『子孫』達と違い、海の近くこそが本来の生息地なのです。

此処ならば、進化した子孫達相手にも有利に戦えます。

子孫達は確かに仲間かも知れませんが、さすが同時に、最早別個体です。ぽよぽよちゃん達スライムさんを突き動かす衝動は、子孫が増えれば納得するほど合理的ではありません。

ただただ自分を増やしたい。増えた自分がどうなるとか、進化するだとか、そんなのはどうでも良い事です。そして目の前には手付かずの『世界』が広がっています。

今や世界はスライムさんのもの。

だけど彼女達は、まだまだ進化を止めません。

新たな環境に、新たな生態的地位ニッチに、新たな場所に。

止め処なく増えていきます。

例えそこで先住種族の悲鳴が上がるうと。

知性の末裔が根絶やしになるうとも。

星の環境が激変しようとも。

だって。

ぽよぽよちゃんは栄えたいのですから。